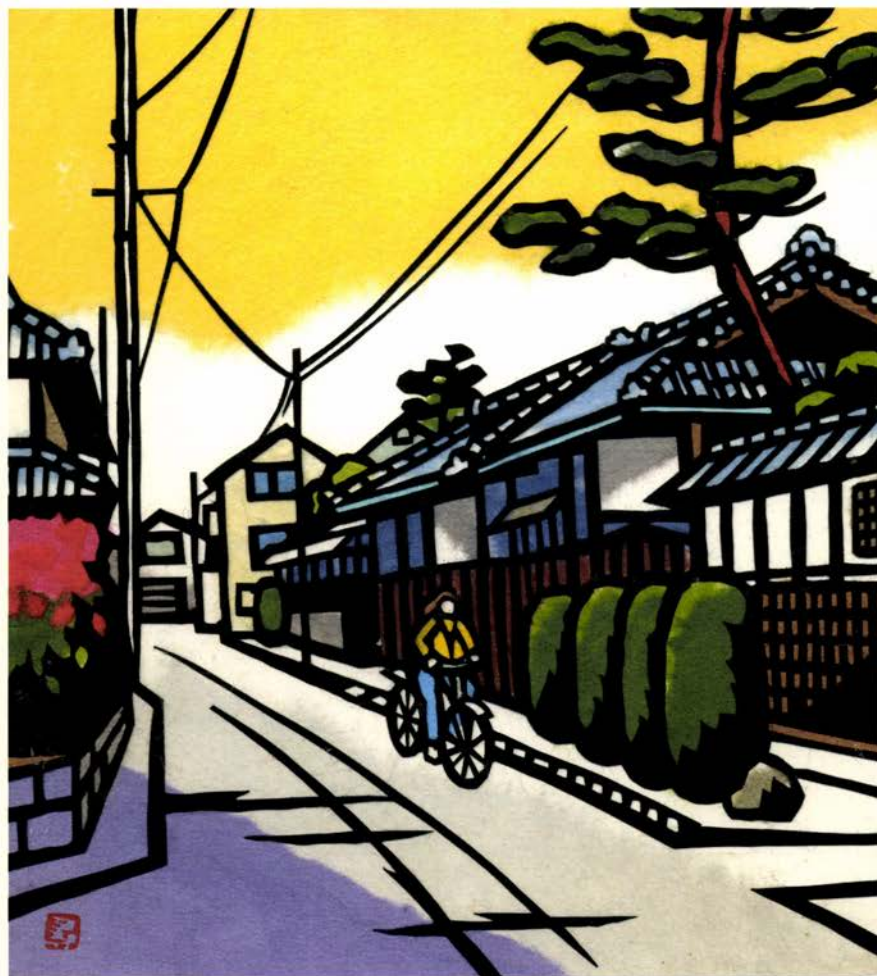


川柳塔

昭和四十一年一月九日 第三郵便物認可
平成二十三年六月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通卷一〇〇九号



日川協加盟

No. 1009

六月号

予告

第十七回 川柳塔まつり

とき 十月十日 (月・祝)

ところ ホテル・アウイーナ大阪

◎ 詳細は後日お知らせいたします。恒例によって同人総会・各賞表彰・記念句会・懇親会を開催します。同人総会以外はどなたでも参加できますので、ふるってご参加ください。

残暑見舞広告

本誌八月号に掲載する残暑見舞広告を募集いたします。広告のスペースと掲載料は左記の通りです。5月号巻末の綴じ込み暑中見舞広告原稿台紙に原稿を貼付(又は記入)してお申込下さい。よろしくお願い致します。

★個人 一口 二、〇〇〇円

★団体

① $\frac{1}{3}$ 頁 六〇〇〇円 ③ $\frac{2}{3}$ 頁 一二〇〇〇円

② $\frac{1}{2}$ 頁 九〇〇〇円 ④一頁 一八〇〇〇円

▼原稿締切 七月二十日

川柳塔社

信頼され、社会に役立つ製品を作る

高級封筒専業メーカー



コーキ封筒株式会社

本社 富田林市若松町東3丁目7番8号 〒584-0023

TEL 0721-25-7210 FAX 0721-25-9484

東京営業所 東京都中央区日本橋本石町4丁目5番8号 〒103-0021

(日本橋川村ビル4F)

TEL 03-5255-5158 FAX 03-5255-5159

<http://www.koki-envelope.com>

番傘わかくさ創立65周年
田中新一句集『生きる』発刊

記念川柳大会

小島 蘭 幸

フエイセスゲストハウス月華殿はとても美しい会場でした。私は会場へ早く着き過ぎたのですが、スタッフの皆さんはすでに全員集合されていて、田中新一さんも大会会長として忙しく対応に追われておられました。その中で直接氏名札を渡して下さり、歓迎の握手をして下さいました。大会出席の醍醐味はなんといっても柳友との交流です。そういう思いを強く感じたあたたかい握手でした。記念大会もほのほのとしたあたたかさに包まれていました。芥川賞作家、辻原登氏の祝辞は、句集「生きる」について淡々と語られました。厳しくてあたたかい目は、さすが同級生と胸が熱くなりました。

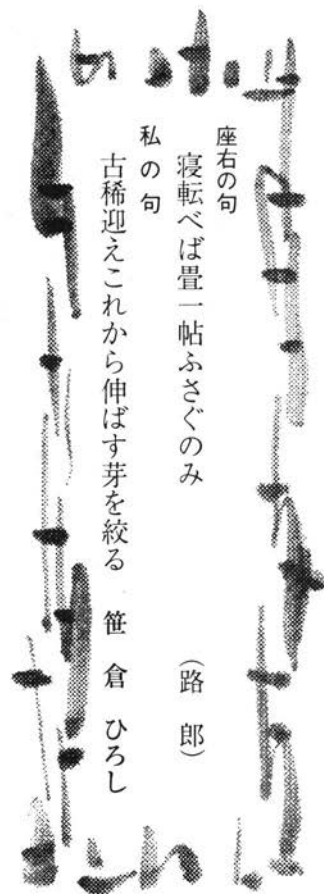
しんしんと雪はやがてのことばかり

新一

可愛いお孫さんの花束贈呈をはじめ、ご家族の皆さんが最後まで残ってご挨拶をされていた姿も美しいものでした。句集「生きる」は家族に支えられて生まれたのだと、しみじみと思ったことです。清興の落語二題は若い落語家お二人の川柳大会にいる事を忘れさす程の熱演で、正に一服の清涼剤でした。

当日の大会入選句は50句という厳しさでしたが佳い作品を直接選者から聞くことが出来る幸せは出席者しか味わえない至福の一刻でした。川柳塔からは楓楽理事長が堂々と披露されました。懇親宴は、露のさきょうさんのお祝の舞「白扇」から始まりました。鏡割り、乾杯、カラオケ、美味しいお酒と料理、和やかな歓談の時間はアツという間でした。出席者四四四名、番傘わかくさの逞しいエネルギーを一杯頂いた一日でした。最後に忘れてならないのは、大震災の被害甚大な福島県から出席者があった事です。あたたかい拍手の中で川柳の持つ力は凄いなとつくづく思った事です。6月12日に仙台で開催される全日本川柳大会に向けて大きな力を頂きました。

私の心はもう仙台へ向いています。



座右の句

寝転べば畳一帖ふさぐのみ

(路郎)

私の句

古稀迎えこれから伸ばす芽を絞る 笹倉ひろし

川柳塔 六月号 目次

題字・中島生々庵ノ表紙きり絵・前田 尋「小栗街道」

■巻頭言

番傘わかくさ創立65周年
田中新「句集『生きる』」発刊

記念川柳大会

小島 蘭 幸 ……(1)

改めて智子さんを偲ぶ

奥田みつ子 ……(2)

川柳塔(同人吟)

小島 蘭 幸 選 ……(4)

川柳塔の川柳讃歌 (78)

木津川 計 ……(47)

自選集

温故知新 ……(48)

水煙抄

西出 楓 楽 選 ……(51)

麻生路郎句抄

淡路 放生 ……(52)

■寄稿『麻生路郎読本』

ふたりの風色 ……(75)

檸檬抄「時代」

三宅 保 州・山本希久子共選 ……(76)

堀端三男氏を偲ぶ

牛尾 緑 良 ……(80)

改めて智子さんを偲ぶ

奥田 みつ子

平成八年十月の同人総会で小出智子さんが理事長に指名された。皆からの信頼絶大な御方だから最適任者なのだが智子さんは、「私には無理、とても出来ない」と弱音を吐かれた。ちようど、私も田中正坊さんから「初的女性編集長だから頑張って」とバトンを渡され、責任の重さに挫けそうになっていたの、二人で「どうしよう、どうしましょう」と嘆くばかり。(智子さんは健康に不安があったのかも。)

翌九年六月二十八日に天王寺区たかつガーデンで麻生路郎三十三回忌・葦乃十七回忌・中島生々庵十三回忌・西尾菜三回忌の追悼川柳大会が行われることになっていたの、智子さんはその準備などで大変な気苦労をしていらしたと思う。そして、とうとう体調を崩されて、三月十五日に入院された。

その十年前の昭和六十二年七月五日、高野山の普賢院で麻生路郎二十三回忌・麻生葦乃七回忌・中島生々庵一周忌追悼川柳大会の時には智子さんは広い普賢院を走り回るようにして、三百名近い参加者のお世話をしておら

愛染帖

誹風柳多留——一篇研究 70

新家完司選 (84)

「茂る」

平田実男選 (88)

一路集

「役目」

石谷美恵子選 (90)

「川」

片岡智恵子選 (91)

初歩教室「口」

鈴木公弘 (92)

秀句鑑賞 同人吟

中居善信 (94)

水煙抄

高橋岳水 (96)

せんりゆう飛行船 (6)

新家完司 (97)

『麻生路郎読本』余滴 (3)

榎原道夫 (98)

五月本社句会

(100)

各地柳壇(佳句地十選/水原昌鼓)

(104)

六月各地句会案内

(118)

柳界展望

(120)

■編集後記(ひとこと/江島谷勝弘)

朱夏・富美子 (124)

座右の句

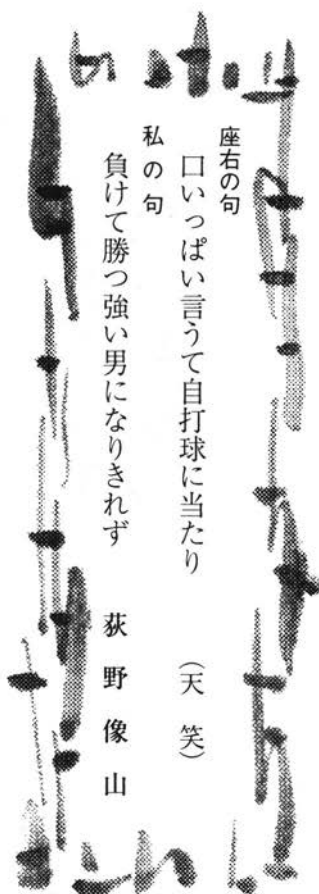
口いっぱい言うて自打球に当たり

(天笑)

私の句

負けて勝つ強い男になりきれず

荻野像山



れた記憶があるが、この時は入院をされたまま、大会の六日前の六月二十二日に旅立られてしまった。その追悼文で高杉鬼遊氏は「責任感の強い智子さんだから追悼大会に合わせ、四先生をお出迎えにこの世を旅立たれた」と書いておられる。私もそんな気がする……亡くなられる直前の六月八日に全日本川柳三重大会があり、私が初めて選者を勤めさせて頂くので、智子さんは服装のことから落着いて披露するようになど御自分のことのようにお気遣い頂いた。大会後、当日の服装で、私の選「流れ」の秀句をお見せしたところ、及第点をくださった。智子さんは偉大な先輩だが私にとっては身近なやさしいお姉さんである。

九年七月号の編集後記に智子さんの病床での感想を載せていたので、要点のみ再び記す。「健康の大切さ。本人も家族も健康であればこそ句会に出られる。句会で数多く抜けさえすればよいという句を作らないように。後でノートに残せる作品か。自分の心の句なのか。忙しさにまかせて、同じような言葉を使い、同じような句を作っていないか。自分では作れない句をつくる。」実に耳が痛い！

「見る人は見ている駅の未生流 智子」
お願いして書いて頂いた短冊の前で反省!!



小島蘭幸選

鳥取市 森山盛桜

一計は皆が笑える事が良い
ストレスが無いというのも味気ない

生きているゲゲゲと大山と砂丘

天気図に逆らう暮らしなどはせぬ

コーヒーは便利無言で時が過ぎ

品格が無いのでワインには合わない

弘前市 高瀬霜石

ビー玉の中にダイヤは混じらない

朝一番生きているぞとほくに言う

守りたいものがあるから嘘をつく

孫孝行指をくわえて見えています

引き際が見事でおとこ男たり

テレビから地球の悲鳴漏れてくる

堺市 柴原道夫

牛の眼に映るものみなあわれなり

渚には人居て人の顔見えず

測量の傍をどきどきして通る

浴槽に陽が射しているぜいたくさ
押入れのベニヤの薄さかくれんぼ
劇場の裏へ回って得心する

鳥取県 斉尾くにこ

追えば逃げ逃げれば追って春が来る
避難所の卒業式の早春譜

今だから歌うひょうたん島の歌

エルニーニョわたしの海へ流れ込む

しあわせのレシピタバスコ追加する

胸のグラスへ言葉のワイン注がれる

和歌山市 牛尾緑良

円空仏みんな集めて笑いあう

連弾のピアノそのまま共白髪

貪っていたのは定年後の時間

五百羅漢今日のわたしを見つけたり

男心だろうか日がさす雪が降る

神様の前では腰を伸ばさねば

大阪市 谷 口 義

長生きするのは命懸けである

ダークダックスは二人になっていた

そんなもんかと思えばこんなもんである

敷居の上に立っていたのは神さまか

神さまと一緒に立っている桜

気に入らぬ事はオゾン層に捨てる

和歌山市 木 本 朱 夏

木の橋を渡りさくらに逢いにきた

桜さくら観ているうちに泣けてくる

夜桜を観ている ここはこの世ではないぞ

神は不在のこの世を染める桜さくら

遠い目でさくら視ている放浪者

昭和残像さくらはちちにはに降る

堺市 志 田 千 代

女性達が惚れる女であらまほし

どなたともちゃんと目を見て話せます

玄関を出たら男をたててます

孫がくる硬い御飯を炊きましよう

ひっそりと被爆者の姉旅立つた

花魁また逢えるネと送りだす

三田市 上 垣 キヨミ

玄関で今日の笑顔を確かめる

お見舞に土筆 草もち 玉子焼

名前など公表しないボランティア

見栄っ張り止めるとこんなにも軽い

忙しい時には出来た親介護

アナログの暮しへサクラ四人咲く

堺市 村 上 玄 也

定年後姉さん女房然の妻

ナフタリンのにおいが抜けぬスーツ着る

ケータイが鳴ったを潮に座を辞する

抜き差しがならぬ突っ込み過ぎた首

酒止めてしょんぼりとしている親父

足し算で生きれば人は幸せだ

富田林市 中 井 ア キ

恋人の胸にもさくら咲かせたい

似たような傷を持つてる人という

笑みひとつ残して苦手から逃げる

泣いて笑って自然のままを愛される

骨抜きにしたい男がひとり居る

終止符はきっちり赤で打つてある

河内長野市 村 上 直 樹

来し方の勇氣いくたび水五調

煌めいていのちの讃歌揚げ雲雀

筋トレはジム脳トレはクイズ漬け

年金にすがりしぶとく白寿まで

一滴の善意つなげばもう大河

花愛でる日よ被災地の底力

人間の弱さもろさよ桜桃忌

弘前市 高橋 岳水

やり直す決意を裸木と交わす

青竹を踏んでエイジングに抗す

生かされて余白を埋める趣味に遇う

逝けるなら花咲く頃を所望する

生きるとはなんと厳しき寒立馬

鳥取市 近藤 佳子

母の命日を彩る露のとう

生きよ生きよと母は米寿の背を押す

お花見に薄紫のコートなど

一日に十遍辞書の世話になる

パートナ―また変つてゐるあの熟女

イケメンの狎抱きしめて春を待つ

三田市 堀 正和

サクラサクみんなオンリーワン目指す

孫が来る気合入ったちらし寿司

初詣サボったツケが来たらしい

願ひ事ひとつランクを下げました

父母の恋の話は聞いてない

年の順ならばそこそこのいい位置に

藤井寺市 鴨谷 瑠美子

花を見て来た人花の匂いする

山門をくぐる花と約束してるので

宇宙の話する人と向かい合い

きのうから持ち主探すボールペン

逆上がりして引返すランドセル

ゴールではバツと両手を挙げようか

西宮市 緒方 美津子

オール3心やさしい二年生

搜索の日を追う毎に萎えてくる

遺産より父のやさしさ忘れない

女偏になりたい男多すぎる

無駄にせぬ瑞穂の国の米だもの

やさしさも強さも見せている墨絵

大阪市 古今堂 蕉子

団体旅行その場限りの友作る

被災地の背中押す手が世界から

血圧と勝負古希の恋病い

災害に備えつけとく体脂肪

額面通り信じる癖がなおらない

気まぐれな身体だ今日は動かない

尼崎市 長浜 美籠

決心がつかないままに桜散る

鉛筆の先尖らせる今日の鬱

前略とペンから溢れ出す思ひ

言う人には言わせておくさ雲流る

独り居の至福墨の香漂うて

太線で囲む忘れぬオマジナイ

堺市 齋藤 さくら

また地震テレビはずっと点けたまま
青空に自然の恐さ忘れがち
買いだめをしないみんなの輪が出来る
勢いで夫婦げんかもしています
反抗期やがてお世話になる孫だ
母送り心に穴が開きました

唐津市 樋口 輝夫

苦勞した顔は見せない同期会
この指に止まった鬼の肩を揉む
まっすぐに帰る努力はしています
まだ枯れぬ脳に優しく水をやる
老いてなお脈打つものを抱いてます
囲炉裏火も民話も燃える里の夜

美作市 大石 あすなろ

手をつなぐ春の掌温かい
春の陽を浴びると歌い出す新芽
新しい皿に初心を盛り直す
キッチン視野に女の四季がある
愚痴半分自慢半分それもよし
晩学の友です辞書と打ち解ける

八尾市 高杉 千歩

マナーモードぶるぶる地震かと脅え
何処で借りたか捨てられぬ傘溜る
平均寿命過ぎましたと卒寿

レシートで探る一万円の行方
ネイルアート包丁ないのも領ける
誕生日薬もひとつ増えました

大阪府 米澤 俣子

貰い泣き被災地写すカメラアイ
日本人で良かった満開の桜
淡い色ひとつ足して春が来る
あした咲く蕾はパワーぎゅつと溜め
天上天下指さす釈迦の花御堂
道の駅やさしさをくれる春キャベツ

鳥取県 西谷 悦子

人形になり生きてゆく箱の中
穏やかなハートから出るいい笑顔
二人だと気持ちも強い老いの坂
ひらめかぬ脳在庫品ないらしい
上げ膳に据え膳なんか落ち着かぬ
なまけた日 時計が鬼に見えてくる

岸和田市 岩佐 ダン吉

汗いっぱいあれが原点なんだろう
ジグザグを歩いて目ざすものがある
花曇りハローワークに今日もいる
手の内は読んだとばかり思ってた
反対論たつたひとりが沸かしてる
無私無欲トリックなどに縁がない

竹原市 石原 淑子

臓器移植いのちのリレーです重み

原発の怖さヒロシマの戦慄

誕生日希望の種を蒔きました

心許り行く先ざきです募金

山頭火に出逢った里の桜散る

ガンバレ日本世界の熱意受けとめる

大阪市 川端 一步

消灯の時も彼の地に思い寄せ

震災後お酒がうまい日とならず

泣き虫も髪の色も亡母に似て

手を抜いた将棋あれから弱くなり

孫たちの出入りけなるいなど言われ

巻き返す明日のために万歩計

大阪市 升成 好

たて板に水は説得力に欠け

背の丸さ歳を重ね着したようだ

駆け引きも妥協も知らずただ頑固

顔つきが変わった決意したらしい

パソコンもケータイもないわたし誰

京都市 梶本 宏子

お朔日も炊いてた赤御飯

フルコースも茶漬も同じ胃の型

妖精のいる森 子らに夢つなく

子育ても父母も夫も走馬灯

初恋を語るおとこの目は遠く

神様のおとほけだらう物忘れ

田辺市 岡本 昇

ネクタイの数がもの言うニュースアナ

泥よけの合羽羽織って秘書になる

毒葺は厚化粧して生えてくる

ピンピンコロリ地獄の道も何のその

女まだ捨てるものかと試着会

自分流でグランドゴルフやっています

東かがわ市 清川 玲子

冬から春へ私の羽根も春色に

春だけど花見などとは浮かない

どの色で髪を染めても高齢者

欠点の一つをバネにとんでみる

絵手紙から時に聞こえてくる汽笛

被災地入りの娘の無事祈る老母なり

鳥取市 岸本 宏章

四月馬鹿かまさか義弟の訃報聞く

葬送の「おしろい花」がまた泣かす

振り返るゆとりができた老いの川

生きている者の役目だ墓洗う

旅プラン犬と相談して決める

早起きが苦手朝ドラ昼に見る

海南市 堂 上 泰 女

仏壇へ春を告げてゐる黄水仙

計画停電オール電化もお気の毒

ベビーすくすくスイトピーの香満ちる部屋

被災地へ愛の心を立ち上げる

地震国明日の我が身を見る恐怖

原子炉へ挑む勇者へ手を合わす

倉吉市 猪 川 由美子

大惨事総理は上手く利用する

エナジの素僕はいつでも恋してる

緊急事態普段のエコが物を言う

電力不足今から夏へ対処する

ああ日本がどんな破壊されてゆく

大惨事に陛下やさしいお氣遣い

和泉市 横 山 捷 也

雑念を捨てに八十八の寺

ネクタイの子ばかり育て悔やまれる

臥す床に孫から貰う力水

正論を吐くたび友の数が減り

良い人と言われ私の妥協癖

春の気配する母からの宅配便

西宮市 片 山 忠

津波から人生観を変えられる

我慢する県民性がかたし

スカイツリー誰も話題にしなくなる

地震予知しているほうも辛かろう

ふと横を見たら私を見てる人

父越える何を基準に言えますか

府中市 藤 岡 ヒデコ

あの日から夜毎祈りの灯をともし

弱音など吐かずひたすら前に向く

まだ続く余震鎮める策もなく

義援金手と手をつなぐ温もりを

北上の桜にエール託すのみ

記憶から離れる事はない津波

藤井寺市 津 田 シルク

桜咲く気持はやはり災害地

目に青葉癒されて詠む五七五

蝶は移り気未完のままで恋終る

さびぬきのにぎりもあつて誕生日

カニ缶が家出したらし水屋から

生簀から哀願の目がつきささる

八尾市 村 上 ミツ子

余りの惨状言葉がでてこない

あの日からパニック居すわったまんま

知恵も力もお金もないが生きている

被災地へエールを送る桜咲く

買い溜めはしないが買い置きを少し

四月馬鹿笑わせる嘘うかばない

竹原市 岩 本 笑 子

美祿市 安平次 弘 道

春の雨さあ大根の種をまく
笑うているように葉牡丹の花が咲く
蹟いた事は内緒よ石地蔵
タジン鍋愛もたつぷり入れてます
朝の鏡に真実と言う白髪

府中市 岩 本 雅 代

前向きに春の大地を踏みしめる
春のうつ湯呑茶碗が欠けていた
咲く花と散る花あつてドラマ生む
休耕田つくし取る客花盛り
温度差に振り回される八十の背な

府中市 馬 場 利 子

スイッチを入れて心に灯をともし
ひび割れた器に過去が盛つてある
人間に生まれて死んでいける幸
雑談の中から春の詩拾う
被災地を癒やすがごとく桜咲く

宇部市 平 田 実 男

グルメ旅仕上げやっぱり妻の味
歳だけはなんとか亡父を越えました
あの日から余震が続く古い二人
落ち椿私の未来かも知れぬ
酒煙草止めて体調狂い出し

一夜明けてみれば自然に身にまかせ
河川敷に咲いていたのはバラの花
銭儲けがしたくてねじを締め直し
望みまだ捨てず涙をひたかくし
食べかけのリングが闇を深くする

東かがわ市 川 崎 ひかり

少しずつ明日へ希望の灯をともし
無器用でいつも荷を負う役どころ
万の手に触れても夫の手は解る
災害の地にも芽吹きが絵が写る
老犬と歩調合わせる散歩道

東かがわ市 伊 勢 八重子

受け流す事で総てが丸くなる
思いやり誰にも負けぬ茶髪の子
被災地を想い眠れぬ長い夜
団欒は猫真ん中に老夫婦
いい人だけれどもタイプとは違う

東かがわ市 原 賢

赤い薔薇心も炎える雨上がり
凜と咲く花に生命を聞いてみる
一年かけつくった土に菊一輪
さあ春だスタートラインのランドセル
古ぼけた幟はためく過疎の路地

松山市 古手川 光

三重苦無神論者になりそうだ
せて成仏を行方のわからない御霊
起こる前喋って欲しい専門家
てっばんのばあちゃん丸ごと川柳や
番狂わせがないと面白い選挙

松山市 高橋 宏臣

ピカピカの硝子が入口をふさぐ
親展と書いて少しの安堵感
大風呂敷の穴からこぼれ嘘真
正装すると尻尾が邪魔になる
孤立無援の安楽椅子は眠りこけ

松山市 宮尾 みのり

東北へ思い馳せれば耐えられる
福島恐怖伊予にも原子力
天敵の存在自然界回る
鍵穴の向こう異次元かもしれぬ
断捨離は止めたほんわか生きていく

大洲市 中居 善信

焼け野が原がダブって見える震災地
原発に浮かれた足を掬われる
札束で口を封じた付けだろう
遠吠えをするマスコミの無責任
考えてみれば日本の平和惚け

西予市 黒田 茂代

投句する日は仏滅を避けている
生まれたての春を探しに風の中
白檀の香りのひとと薪能
くじ運も生命線も五里霧中
電子辞書よりもわたしは広辞苑

高知市 小川 てるみ

桜満開 寂として声がない
手を繋ごうひとりぼっちじゃないんだよ
目に見えぬ怖さベクレル シーベルト
原発の怖さ資源のない辛さ
勝った負けたとライバルが口にする

高知県 小澤 幸泉

耐えがたき萎えた手足の先のさき
父さんよ呼び名をかえて息子は巣立つ
そのままでよいと納得させられる
悲しみが私の中でとけ始め
眼薬の恵みか神に生かされる

福岡県 林 さだき

思い出の一枚ずつの泥拭う
被災児の大人に負けぬ思いやり
見る場所を時には変えて花の宴
役職が役職を呼び超多忙
自分史のインクの薫り晴れやかに

唐津市 井上勝視

熊本県 岩切康子

終章にととのいましたと言えるかな

貧しく育ち感謝してまず不況風

老いの知恵時どき呆けを演じてる

見ぬ振りで気を遣ってる老い夫婦

気短かで愚痴が増えてる老いている

唐津市 坂本蜂朗

グループの中の素朴が掻き回す

円の中素朴な男逆回り

好きな人の噂にそっと添える花

やつかみを風の便りに追加する

少子化が雷親父排除する

唐津市 山口高明

漫ろ歩きの偕楽園で目の保養

耳を澄ますと亡びの歌が聴こえるよ

国民を騙して詐欺に成らぬらし

花輪にも序列あるらし並べ変え

戯れの恋も生まれる夏の浜

熊本県 高野宵草

丁度好いお湯が蛇口に出てる贅

悔いのない今日を励んだしんどさよ

物忘れ余生のゆとりまた咎め

眉に唾つけた無料にしてやられ

相傘の雫は僕が受けてやる

発表があるから作品熱が入る

史跡巡り街の身近な偉人たち

一家で墓参さぞや故人も嬉しかろ

芋団子叔母のレシビを懐しむ

朝市の曖昧値札ついてない

札幌市 小沢淳

褒めるより辛口あとでじわり効く

人徳といつて実力うとまれる

浮き袋つけて溺れる人もいる

天女にも魔女にもなれずまだ独り

押せば引く他人に合わせる自然体

札幌市 三浦強一

鬱の字がまだ書けませんが楽しんで

悪筆も句を見て欲しい色紙展

事故起きて約款を追う虫メガネ

仇討の話が好きな男の血

一ぷくが禁煙パイプとは虚し

砂川市 大橋政良

一票の重さ握った手が熱い

すんなりと笑えぬ時もありました

高齢者笑い声にも皺がある

一筆箋で足りず三枚書きました

失った言葉をさがす旅に出る

黒石市 佐藤 古拙

承らえて何を今さら塩加減
披露宴出口調査する不遜

亡父植えた老木を伐りりんご苗
植えかえた苗木の上は青い空
メモ用紙使い切れないチラシ裏

黒石市 相馬 一花

丹田に力を込めて吐く決意

今度こそ本気に見える目の光
めきめきとお化粧が乗る玉の肌
善よりは悪がのさばる俗世間
年金も退職金も妻のもの

平川市 小寺 花峯

八方美人茶番劇なら繰り返す
足枷を外して友と縄暖簾
セピア色写真は胡坐かいたまま
パソコンの側では辞書がペソをかく
三月のNHK涙なくして見られない

弘前市 岡本 花匠

しつけ糸の亡母の言葉を聞く安堵
夢を追う若さあふれる一輪車
愛燦燦さくらの好きな国民性
朝さくらの精気を貰い若返る
しあわせの夢を描いて愛ふたり

弘前市 今 愁女

停電のパニックおして知るべし被災地を

生かされたいのちしつかり被災者よ
家の中仕分けせねばと思うても
地球に棲み地球にいのち剥ぎ盗られ
だが地球 春爛漫と桜咲く

弘前市 福士 慕情

もうとまだ使い分けてる古稀手前

政治家は大風呂敷を持つている
計算ドリルなんぼか落ちた脳の錆
手の平で掬って旨い岩清水
青空へ描いた夢を見失う

弘前市 須郷 井蛙

飲み会は和気あいあいですぐ決まり
二次会は怖いキツネが待っている
外出の度に津波へ募金して
特売へ腰痛背負い靴を履き
我慢することを教えた大地震

青森県 松山 芳生

過疎の村物干台に影がない
子も孫もスーブの冷める位置
喜怒哀楽わたしの耳は雨季乾季
耳朵が軋む悲哀がまだ残る
飾りたいところ贋作だとしても

さいたま市 星 野 育 子

生かされた者に癒しの桜咲く
初登校カバン制服風光る

青虫の気持ちになつて春キャベツ

白紙の名刺で自分らしく生きる

君の住む街をずっと忘れない

東京都 岸 野 あやめ

孫嫁ぐ私も入れ歯直さねば

子に整理頼めばみんな捨てられる

あやしげな営業電話に年齢を言う

呆けたふりしたら本当になりそうで

氷河期の卒業でしたまだニート

八王子市 播 本 充 子

もう隠せないベクレル シーベルト

仮設住宅に海の絵は飾らない

尻取りでもしよう計画停電中

薄暗い暮らしに宝物が増え

ありがちな話を花柄で包む

横浜市 小 野 旬多留

品薄に群れる市民が御し難い(地震関連 5句)

万物の霊長嗤う予想外

節電の事実で背筋伸びてくる

人材の不足に国が荒れてくる

ケータイを握り静かな街ぐるみ

横浜市 菊 地 政 勝

現実の惨事に暮らし変えられる

いく度の電話に岩手音もなし

余震にもすぐ身構える地震病

北国の春を歌って涙ぐむ

関東も覚悟問われる大地震

川崎市 三 浦 き ぬ

美しい眼の娘だきつと恋してる

九十歳過ぎた老婆に頑張れと

三面鏡美人に映る面はどこ

故郷は遠いよ夢で迎るのみ

戦争の中の青春甘辛く

富山市 島 ひかる

チンドンの音色に桜ほころびる

堪え難きに耐えた日本にある秩序

募金しか出来ぬ支援のどこかし

受けた恩忘れていない支援の輪

錆びついた自我を折り折り生きている

可児市 板 山 まみ子

民衆は評価されてる日本人

義援金出す時は出すお金持

競争の社会に合うかのどかな子

度胸よく速度違反は乙女らも

口あけたままは喋れぬ治療台

犬山市 吉田 幸子

見て見てと花桃さつと手をひろげ
ついでにの機転が利かぬもどかしさ
泥々のアルバム笑顔浮き上がり
もらい泣きして報道にくい入る日
バカ正直が取得会計ええかいな

犬山市 関 本 かつ子

日程も妻の余白の日で決まり
Bクラス補欠の孫が初ゴール
せめてもと福島産の米を買い
人生を分かりかけると枯れ始め
日本の価値を見直す日本人

犬山市 金 子 美千代

義援金だけでは済まぬ身の置き場
満更でない我が国の底力
万国旗フレーフレーと日本へ
土筆摘むこの幸せをかみしめる
こんな時だから明るい服を着る

愛知県 早 川 遯 行

血圧を計って今日もよいいドン
階段を上る軽い日重たい日
居酒屋で聞く人生に嘘はない
不揃いを値打に買った道の駅
剪定の鋏がとまるいい話

京都市 坪井 孝一

人生に道草もまた泳ぐ術
目指す山あるからドラマまだ続く
忘れてたうちには笑いあつたんだ
親友にはその計略に乗つてやる
古いレコードノイズ優しく聞いている

京都市 藤井 文代

ツイッターに右往左往の権力者
断捨離で捨てたあとから捜す日々
単純に笑顔が欲しく積んだ徳
人生を飾ってくれた子に感謝
横文字と新語で頭あやふやに

京都市 西村 益子

当り前の生活出来るありがたさ
イカナゴの煮付笑顔でやって来る
下山して頑張った脚撫でてやる
雑魚だけど選挙で思い届けます
イケメンの白衣血圧押し上げる

京都市 高島 啓子

置き手紙米は買いおきしています
充電をしなくてもよい紙の本
体力も無いとできないおつきあい
マンホールへと続いている秘密基地
すぐ抜けるよう回しておく指輪

京都市 三宅満子

大阪市 田浦 實

筥に木の芽を飾り春香る

でんでん太鼓読んで川柳また好きに

地震国避難袋を確かめる

いかなごの釘煮の匂いうちの春

面映ゆい祝辞をもらう披露宴

霧化粧して艶つばい生駒山

花粉症春の予定はブルーです

税申告終えてちよつぱり胸を張る

納豆の粘りで今日も頑張れる

杉檜のせいじゃないんだ人のせい

亀岡市 井上森生

大阪市 近藤 正

何事も想定内におく覚悟

政治家は防災服で身を飾る

原発と津波の答え出すチャンス

アキレス腱原発神話にもあつた

復興は皆が元氣の出る居場所

大津波残していったランドセル

無縁社会いい暖かい思いやり

レベル七植えつけてもいいですか

大震災の答えを出せるは日本だけ

新緑に抱かれてゐる彬の碑

長岡京市 山田葉子

大阪市 平嶋 美智子

雲ひとつない空遊べ言うてくれ

災害地元氣を出せと花が咲く

こぶし咲くやさしさごっこ終りそう

満開の花観るゆとり持つてほし

宣誓でひとつになった甲子園

被災地に毎日心からエール

マナーかじりなるほどと知るお国柄

路肩にも雑草萌えて氣をもらう

二千円札ちつともお目にかからない

齒の寿命もうこれまでか喜寿の春

大阪市 小谷集一

大阪市 吉村 一風

良い話並べられると身構える

悠ゆう自適愛をぬくめて子に注ぐ

原石をダイヤに変える塾カバン

見栄張るとペンも氣さくに走らない

アリバイを誰にも言えぬ訳がある

食べ歩き捨てて今では寺巡り

逆らわず目立たず笑顔絶やさない

人生の模索老いてもありますよ

長生きは良い思い出と好奇心

傷心を聞く妻達の長電話

大阪市 奥村 五月

隠れ読む妻の六法気にかかる
頑張った母だあの世は手抜きして

連休は過疎の村にも人の花

お守りのように山ほど持つ葉

風呂トイレ自分で行けるありがたい

大阪市 坂 裕之

焼き肉の煙にむせて泣く桜

縁側で花見弁当古い二人

悪友が桜の下で寂を説く

散り際を桜のようにしてみたい

咲き終えて水面を飾る花筏

大阪市 榎本 日の出

あの世まで持つては行けぬのに貯金

品があり威厳もあるが遺影です

長生きの秘訣時どき破ってる

ズバズバと言ってる人が楽しそう

けんかして周りがよく見えてくる

大阪市 松尾 柳右子

温かいまなざし送るうちのポチ

琴の音に癒されている四帖半

義援金おさめ自転車走らせる

満月に昔を偲ぶ至福時

口笛を吹けばみんなが歌うたう

大阪市 津村 志華子

車椅子の背を押している青い風

母の訓えは心に照らすものがある

スランプを幾度も舐めてセピア色

後悔でいつも心が病んでいる

母さんの風に逢いたい時がある

大阪市 井丸 昌紀

只酒で危ない橋を渡らされ

スピーチは五分お願いしてたのに

まずまずで妥協できずに友はなし

雨降ってひっそり春の香りする

笑う時笑えない時酒を酌み

大阪市 池上 清治

諦めていても発表待ち遠し

年金の通知すぐ開け確かめる

桜待つ春を今年も迎えられ

原子炉の恐さに国中が目覚め

目を覆う惨状 T U N A M I 世界語に

大阪市 伏見 雅明

水たまり一つひとつにある苦悩

バブル期の遊びいまごろ生きている

適当にメディアが選ぶ街の声

髪染めて老いの気配を封じ込め

初孫に息吹き返すお雛さま

大阪市 江島谷 勝弘

男つてアホやと思うロマンもち
嫌われてもわがまま通す加齢かな
レディーファーストは難しいもの
ロマン抱き街のあかりを口遊び
原発は制御ができぬ代物か

大阪市 澤田 定子

クラス会もう最後かも誘いくる
耳馴れぬ単位ベクレル減らぬ鬱
花並木哲学の道想わせる
道一筋違えば屋敷並ぶ町
花粉症マスク美人が増える街

大阪市 佐藤 忠昭

句中中ビルが横揺れ地震知る
連絡が取れず全滅予感する
三日後に電話通じて一安心
田畑全没家族無事
祈つてゐる罹災家族の冥福を

大阪市 大川 桃花

ブランコに座ると見える遠花火
単身赴任ときどき逢える新鮮さ
ばあちゃん子母より出来る気働き
ワンマン社長家では妻のイエスマン
頼る気を捨てると開いた瓶の蓋

大阪市 鶴田 遠野

子も巣立ち着飾り出したしサイズ
いとしさを老眼鏡で確かめる
堂々と嘘の言い訳讀らない
国の愚策にライフプランを狂わされ
マスコミ発の風評を仕分けする

大阪市 神夏磯 典子

日の流れ水の流れに負けまいぞ
母の日に元気でもらうカーネーション
惚れこんだ日から魔法がかからない
桜見に行けない足が悔しいな
てっぱんのお好み真似て喜ばれ

大阪市 板東 倫子

満開の桜の下で泣けてくる
絶句してこの世の地獄見るテレビ
湯タンポが欲しいと被災地から電話
避難所の味噌汁せめてあたたかく
軍隊と誤解していた自衛隊

大阪市 津守 なぎさ

月一度大笑いする食事会
梅の香にしばし憩いの大阪城
片づけをすませヘルパーまつ独り
ゆずられた席は素直にありがとう
春を待つ心にむごい地震くる

大阪市 原田 すみ子

悪意無いガンバレを聞くプレッシャー

時間という葉あるから生きられる

途中から創作料理へ変身す

頭数揃うまえから盛り上がる

油断した後姿は正直だ

大阪市 岩崎 玲子

過去は過去古都に降り立ち明日探る

いろいろと考え諭す古都の風

新しい護摩木に託す幸

大好きな春が来たから窓磨く

春の陽は勝手にからだ動き出す

大阪市 小泉 ひさ乃

菜の花に五感目覚めて弾む春

真心と励まし添えた義援金

諦めず生きる力へ春が来る

阿吽の仲で困難支え合う

それぞれの筋が通っている頑固

大阪市 岩崎 公誠

阿呆らしい突然ルール変えられる

一生の恥を小出しで使い切る

頂点に立って睨んでいて空虚

追伸を書いて花びら一つ入れ

国難に知恵と度胸と金が要る

大阪市 小糸 昭子

井の中の蛙で終りたくない命

逃げ足の早い人ほど生き残る

ガソリンも牛乳もあるのに路が無い

嬉しいな流れた金庫から卒業書

太陽も地球もどこか変だなあ

大阪市 熊代 菜月

何事も白黒つける悪いくせ

病室の壁に残った涙あと

初恋の人も逝ったと言う便り

赤丸の明日は誰の誕生日

怠け癖ついてしまつてベン止まる

大阪市 榎本 舞夢

耳遠い姑で嫁と仲が良い

まずまずの合格点と僕の妻

遠いけど虫の知らせという絆

瓦礫下夢抱き我が子遠く近く

雪解けの川銀色に春はそこ

大阪市 寺井 弘子

リング箱昭和の香り遠くなり

春の水洗い流した冬のうつ

頬杖をつくとき聞こえる春の音

震災に世界の支援有り難う

完璧なアリバイ崩す靴の減り

池田市 栗田久子

大阪狭山市 矢野 梓

被災地に変わらぬ色で陽は昇る
生命の揺りかご海に背かれる
失望をさせられたのに憎めない
手厳しい人も味方にしておこう
日本へようこそ電線にツバメ

泉佐野市 山本蛙城

被災地へ献句献金句座安堵
川柳を語れと招ばれ嬉しい世
さてどれを断捨離の文字目立つ日々
食を問う爪に縦皺あらわれて
被災地の秩序讀える異国記者

茨木市 藤井正雄

明日逢える寝つきの悪くなる炎
父母の敷くレールに無理が多過ぎる
方言で仲良く飲める美味しい酒
成し遂げる充実感の汗を拭く
後輩に会うが財布が軽すぎる

茨木市 島田誠一

復興へ知恵と我慢の遠い道
人気とりばかりで気骨無い政治
元気良い挨拶響く社の四月
手の荒れは愚かなまでの母の愛
遠くから愚痴をボンボン婿養子

哀しみを癒してくれる桜咲く
ときめきもあつたあの日の桜咲く
花菜漬ほんのり匂う母の味
心までリフレッシュする衣更え
同じミス今日も重ねて暮らしてる

交野市 森本弘風

春うらら万歩計まで汗をかく
雨が降り口実出来た山歩き
自衛隊すぐに出勤大津波
マスコミが騒ぐあの女何者や
のりピーが麻薬の害を中国で

河内長野市 水谷正子

満開の桜並木をランドセル
東北を思い無口に咲く桜
東北に河内の春を送りたい
想い出の花見見物佳き昭和
九月には雄叫び上げろタイガース

河内長野市 山岡富美子

気遣ってひっそりと咲く花街道
物もお金も喪失感癒せない
シーベルトを覚えて不安募らせる
防護服にも義援金にも使命感
花びらを背中に受けて仕事場へ

河内長野市 井上喜醉

列島を新幹線は欲しいまま
津波去る水平線が恐ろしい
核が洩れ歴史が消えていく日本
連休へ親が疲れていく五月
迷わずに今できるのは感謝だけ

河内長野市 植村喜代

テレビ見て辛く消しても辛い日本
あたり前のように今日も陽が昇る
この世を走り抜けて来たようだ
幸せになった頃には何か来る
負けないようにいつまでも夢もとう

河内長野市 坂上淳司

診る前にもう泣かれてる小児科医
精検の妻からサクラサクメール
堅物の親父譲りの真つ四角
角帽のフクちゃん下駄を履いていた
福島 of 四角いビルに棲む魔物

岸和田市 森元ふみよ

想定外弁解ばかり見苦しく
心無い流言蜚語が蔓延す
八十路生き震度九には凍る肝
好物を次々断つて募金箱
春浅い心が凍る被災の地

岸和田市 雪本珠子

主語のない会話通じる古い二人
愛猫が心のケアをしてくれる
穏やかな時間流れる雨の午後
百歳の母の笑顔に和まされ
ありのまま自分の色で生きている

岸和田市 井伊東吉

公園にやつと子の声春休み
校門の桜呼んでる一年生
通院に慣れ要領がわかりだす
鮮明に季節伝える障子窓
復興に踏み出せたのは子の笑顔

岸和田市 原さよ子

受付という字も美事書道展
叱ってるママの目線が温かい
老いてなお人目気にする身づくろい
口下手で胸に収めることばかり
欠点の一つ一つが父に似る

岸和田市 土橋房枝

新世紀もうモノクロが似合わない
おどろい食罪を誰かに裁かせる
物知りの母はテレビの受けうりで
赤ペンで生命線をプラスする
震災のカンパどこまで行ったやら

岸和田市 堤 植代

知らぬまに骨折してたもうい骨
今更に鎧で守る骨大事

パズルしてリフレッシユする老いの脳

桜見も車窓で眺め通りすぎ

地球人なんでこんなにやさしいの

堺市 奥 時雄

遠くばかり見て歩くから蹴躓く

昇進の辞令しつかと帰路急ぐ

株の値の上下に寿命すり減らす

ご一家で励ましながらバイキング

新しいことから飛んでいる記憶

堺市 西村 りつえ

ライバルと密かに競い咲くさくら

何も出来ず春の光が眩しすぎ

ロボットに代理してほし放射能

花の香にざわめきだした春の森

洗濯機下手な詩吟を聞いてくれ

堺市 源田 八千代

余震頻り恐い原発レベル7

事故対策試行錯誤を繰り返す

日本列島何処も安全とは言えぬ

追悼の人を偲んで散る桜

ミニ犬が幅を利かしている歩道

堺市 矢倉 五月

悪じゃない空気が読めぬだけの人
被災者に涙支援の輪に涙

思い切り涙流せるしまい風呂

二度童子親なら甘受出来るけど

先ずは目が喜ぶ満開の桜

堺市 加島 由一

子に嫁が来たら来たらと貯めている

スーパ一のくぎ煮で春を吞んでいる

外食にしようか出前を頼もうか

ブランドは値札を見ずに買っている

腹筋を鍛え演歌に挑んでる

堺市 柿花 和夫

止まり木で心の誤差を修正す

大臣の右へ倣えの作業服

他人より疎い日もある夫婦とや

無念さがこぼれる北の国なまり

鬱のハートに天地無用と貼っておく

堺市 大久保 のん子

聞きながしまあるく生きるこれも齢

筋書きのない人生をどう泳ぐ

歳とれば失うものに慣らされる

心友も畏友もあつて花満つる

遠い日へタイムスリップしたくなる

堺市 萩野像山

四條畷市 吉岡修

ストレスを湯殿で流す名調子

ゆったりも程ほどにして 腰パンツ

踊り好き神も仏もわたくしも

冗談で飲んで生涯友とする

河内音頭回って閉めるクラス会

堺市 遠山唯教

深追いをするとう出口を見失う

仮設では仏にみえるボランテア

放射線こわさの波紋ふとくなる

白山の雪解けにクロユリが咲く

馴れ染めは青いリングに遡る

堺市 山本半銭

津波痕瓦礫の中に神ありや

避難所に赤いリュックの小さい子

わが町の名前があつた事故の記事

うっかりが増えてメモ書きあちこちに

用件のほかに絵を書き一句添え

堺市 大隅克博

「もったいない」そんな日本語消えていく

お宝は白寿に近い母だらう

入院でかためとつた休肝日

子宝という宝には苦勞する

引き落しされて通帳軽くなる

赤ちゃんの欠伸天使に違いない

顔よりもハートだなんて言うとつた

居酒屋の隅で粘っている大正

いつだってぼつと炎になる火種

繕いの針ぐらい持つ元兵士

吹田市 大谷篤子

予定外遂にきました手術の日

一病に神が味方と思つてゐる

外は雨身の上話聞いている

トンネルをやつと抜け出したい景色

愛とむち今日の主治医は辛すぎる

吹田市 須磨活恵

ユーモアが大好き五月の空が好き

一步引くやんわり空気溶けてゆく

二面性深い処で抱いている

好きだから炎になつて逢いにゆく

もう一度亡母に逢いたいあかね雲

吹田市 瀬戸まさよ

形相は憤怒美しかった海

はかなさの言葉そのもの地震国

戦ない国に三重苦の枷が

デパートを三つ回つた頃もある

チラシには駅まで三分私十分

吹田市 山 本 希久子

ワイルドに生きるフランスパン齧り

五月の風集中力が続かない

文庫本持って二階へ籠城す

昭和の味平成の味三世代

年月をかけて熟成する個性

吹田市 木 下 敏 子

長寿国喜ぶべきか考える

狂うたのか拗ねているのかなあ地球

桜咲く言うても怖い事ばかり

私にも出来る節電早寝する

花活けて女ひとりの城守る

吹田市 野 下 之 男

神様も良く被災地を見て欲しい

まあええか妻の後について行く

こんなにも可愛い僕が居たらしい

外人に席を譲られオーサンキュウ

地震など知らぬオウムは上機嫌

吹田市 太 田 昭

夢に見る普段着の亡母いとおしむ

一直線で見詰めた人に背かれる

大器晩成私は喜寿を過ぎたのに

沈黙に慣れ過ぎ夫婦二人なり

レモン搾ればいつも涙にしかならず

高石市 浅 野 房 子

友は皆程よい年で逝きはった

良い方に誤解してはる黙っとこ

日にち葉風邪の去る日を待っている

毎日のノルマがあつて生きられる

ノラ猫がボーイフレンド連れてきた

高槻市 杉 本 義 昭

今声を出すとこです梅の花

あなたとなら桜散るまで見ていたい

ストレスをぼりぼり食べて生きてます

いい人をやめると日々がバラダイス

鍵をかけ今化けている途中でず

高槻市 片 山 かずお

ヘルパーの元気笑顔がいる介護

ケータイにあなたに会える窓がある

ナツメロのおさらいをしてデイへ行く

腕を組み愛が寄り添う型になる

隠す気はないが言わないことがある

高槻市 乙 倉 武 史

人の苦をわが身抓って知る痛さ

割り切って行こう苦もありや楽もある

断捨離で未練心を試される

球春へ老いも忘れて応援歌

残り灯へ老いの才覚本も買い

高槻市 峯村 勲 弘

被災の地「ふるさと」唱うまた唱う

ボランティア出陣前の深呼吸

風評を吹き飛ばそうと桜咲く

毛根を叩いても無理親譲り

路地裏で猫が奏でるセレナーデ

高槻市 佐甲 昭二

口笛を吹けず仲間を外される

荒れ狂う海は妥協を許さない

隣家との絆を保つ低い塀

相槌を打つ魂胆を見抜かれる

老いてなお燃える炎は持っている

高槻市 左右田 泰雄

ハプニングありそな午後の通り雨

ケイタイで風の噂を確かめる

年の功バランス保つのがうまい

愛情のはざままで揺れる泣き黒字

情念の炎を燃やす冬のばら

高槻市 安田 忠子

列島の形を変える大津波

夢なのか東日本の地獄絵図

二階へ行け行方分からぬ父叫ぶ

インタビュ―涙なくして見られない

スイッチの一つで暖をとれる幸

高槻市 井上 照子

大地揺れ津波が攫う地獄絵図

恐しい自然の力只祈る

愚痴だけは言わぬ覚悟の老いの坂

老いた吾鏡は見たしまった怖し

悔んでも吐いた言葉は戻らない

高槻市 富田 美義

ボス席の頓死待つてる猿もいる

無位無冠飾る物なく日向ぼこ

居酒屋で残りのいのち浪費する

安全を掴んでからの無為無策

喜怒哀楽しわの表情使い分け

豊中市 藤井 則彦

目の敵にされて勢いづく花粉

支え合う輪が輪をつくる震災地

見つめ合いながら芽を出す二輪草

ご来賓の話が済むと目を覚まし

花粉情報に照る照る坊主逆に吊る

豊中市 水野 黒兔

震の地の闇から響く呱呱の声

花の雨みちのくの春ひた祈る

いくつもの生還がありさくら咲く

微熱なら一献で効くさあ友よ

臨時休業店員総出汐干狩

豊中市 江見見清

富田林市 片岡智恵子

独り居を告げてお誘い待っている
アドリブを足して本音をはぐらかす
彼岸から大きい父の叱る声
春の芽に先ず雑草が勝ち名乗り
お互いに思い出せないまま黙る

豊中市 松村里江

好きだからNOが怖くて誘えない
フンフンと貸して戻らぬ金となり
バーゲンに早う決めやとお供パバ
連絡は密に無駄足踏まぬよう
パーティーの余韻たのしむ投げキッス

豊中市 松尾美智代

花の下ラジオ体操して至福
さつと母やさしい風が吹いてくる
春の気配山がウフフと笑ってる
朝露にすみれのいのち蘇る
被災地にもさくらの蕾ふくらんで

豊中市 安藤寿美子

赤十字募金私も貧者の一灯を
新聞紙暖房効果もありまして
また余震またまた余震おそろしや
知らないがそれも読んだと言っておく
しんどいと言っても誰も知らん顔

3・11慟哭という涅槃絵図
辛抱強さ規律正しさ世界一
義援金おかねの響きさわやかに
桜咲く顔あげること教えられ
油切れた老体食事の油抜き

富田林市 井上じろう

独り身の米寿超えても雨戸閉め
ハンドルの遊びで動く人の世も
薬より枝雀の話呵呵大笑
すみません嵐を避けて負けて勝つ
遊び人臨機応変才気あり

寝屋川市 富山ルイ子

探し回る家族の絆涙する
余震なお続き地元を思いやる
募金箱通り過ぎずに少しづつ
震災に負けぬ笑顔を見て嬉し
深い縁に結ばれている日本

寝屋川市 森

茜

思い思いに芽吹くボブラの影伸びる
父さんかあさあん さがしさがして吹雪く村
下駄箱にしまい忘れた旅がある
先手打ったつもり尻尾が跳ねている
マシンガントークで叱咤するトップ

寝屋川市 籠 島 恵 子

忙中閑さくら吹雪を愛でている

発色をためす残り火探すよう

疑問符を捨てると楽になるこの世

もう誰も古傷さがすこともない

ブラタナスの芽吹き恋人待つように

寝屋川市 平 松 かすみ

被災地へ世界の神よ来ておくれ

後手後手に歯ざしりしてる私も

被災児のあれこれ思う仕舞い風呂

義援金たしかにお届け申します

眠れ眠れマグマよ眠れ唱えます

寝屋川市 太 田 とし子

高齢者泣くも笑うも指定席

陽が沈む嫁女に貰う湯の加減

宝くじ募金の箱が待っている

絵手紙も花の便りもないポスト

春おぼろ美人でいたい赤い靴

羽曳野市 福 田 悦 子

逆らえぬ津波が牙を剥く怖さ

星空に津波が消した友の顔

ボランティア同胞思う気が焦る

来年は桜に酔うと信じよう

がんばって未来につなぐランドセル

羽曳野市 三 好 専 平

ふるさとをさらっていった大津波

勝負にはいつも八百長付きまとう

飲み過ぎは隠し癌だと打ち明ける

一手指すごとに待ったがしたくなり

蛍の光消えて学園暗くなり

羽曳野市 吉 川 寿 美

災害に追いつかぬ原発よ

此処が踏んぱりどこ日本もわたくしも

人をさす指は不遜な言葉もつ

ジャパン日本この国難をどう裁く

日の本が勇気貰うたカズ・ゴール

羽曳野市 吉 村 久仁雄

距離おくと妻の笑顔が美しい

いい人と知って両手で握手する

病院の廊下で過去が語りかけ

自滅するヒト科へ神はあきれ顔

人間の席はもうないノアの舟

羽曳野市 安芸田 泰 子

啓蟄へ老いもそろそろ春を踏む

花咲いてちやほやされる植木鉢

旧友に会って若さを見比べる

覚めないで亡夫と出会う夢だから

約束を少し悔いてる雨の朝

羽曳野市 徳山みつこ

東大阪市 佐々木満作

楽しみの種をボストに播きに行く
失って知った普通の有難さ

あれ以来軸足を置く古ラジオ

耳打ちをされた会議で石になる

原発が衣を脱いで問うてくる

羽曳野市 永田章司

捨て去った情に理論は勝てるのか

リーダーが必要な時見当らず

原発が大連立を模索させ

想定外試されている日本力

安全の神話にあぐらかいた罪

羽曳野市 酒井一壺

集まって来たのは骨のない男

雪が降る急に会いたい人の声

あいまいな答えで逃げる板ばさみ

また無心そんな気配のする電話

同情を集める仕草生まれ付き

東大阪市 米田水昇

柏手を打って日本の無事祈る

火山帯温泉よいがどうなるか

自然には勝つ街もない科学力

大切なわが家の鍵は娘が握る

小さな手握るおむすび楽しいよ

遠い日のトラウマ未だ消えやらず

人生はああ愉快なり酒旨し

レモンティーはつと一息春うらら

花時計少し遅れて刻をうつ

新顔のぎこちのなさはご愛嬌

東大阪市 中岡妙

先に逝く話黙って聞くな妻

風船よ静かにしほむことは無い

無垢でした若い私がいとおしい

気に入りの服十年も経っている

花の下噂話も満開に

東大阪市 北村賢子

天変地異しみじみ人の愛を見た

悔しさを越え大輪の花咲かす

言葉より愛を語っている瞳

かあさんと繋ぐ手てぶくろはしない

幸せの物差し変える震災後

枚方市 海老池洋

震災地へあれこれ祈ることばかり

原発の影にベクレル・シーベルト

水ぬるみ顔もほころぶ野の仏

はんなりと心も春に衣替え

こんにちはそんな顔して出る新芽

枚方市 伊達 郁夫

お互いに微罪隠してまだ夫婦
再生紙昔の染みが消えぬまま
回り道すこし痺れている右手
トイレには笑顔見たいと言う鏡
一日が過ぎたと思う缶ビール

枚方市 寺川 弘一

長生きをするため禁酒させられる
昨日と同じ暮らしで今日が過ぎていく
風呂上り体重計を忘れない
先見の明で財産遺さない
墓地を買い入る順番決めておく

枚方市 二宮 山久

趣味多忙予定ながめるカレンダー
妻に背を押されて受けた会まとめ
ペアシューズ名もない花に癒される
義援金春よこいこい北の国
桜咲く北国春はまだ遠し

枚方市 二宮 紫鳳

平凡な日々こそ奇跡手を合わす
ヨチヨチと孫も参加の義援金
花冷えの傷あと疼く北の夜
六十路坂幸せ運ぶスニーカー
進級の孫の笑顔に春の膳

枚方市 小林 わこ

ロボットよ緩取りの技できるかい
舞妓さん真白の指に春匂う
マニキュアが光る女とは限らない
いいないいなマドンナだけに許されて
一幕目から突然消えていた主役

枚方市 安達 忠央

原発の次のニュースが怖くなる
咲いたのか散ったか結果まだ来ない
惚れ直しさせる綺麗な別れ際
ユーモアがせちがらい世の潤滑油
無駄な手とみせているのが勝ちを呼び

枚方市 丹後屋 肇

車窓開けて瓦礫の匂い嗅ぐ帰郷
親友の転校涙しゃがみ込む
頻発の余震に開き直る皺
空拳を上げる岬の展望台
原発ににおいつけなければならぬ

藤井寺市 増井 ヨシ枝

指遊びリハビリしてる春の朝
デイサービス八十歳はまだ元氣
蓮花畑寝転んでいる青い空
救われた命トコトン生きて行く
元氣かと亡夫の友が犬に聞く

藤井寺市 太田 扶美代

一日中遊んでくれた花鋏
お茶コーヒ容れて友達帰さない
幻想癖を持つて春の鉛筆
とても愛してますあなたの裏側
十二色賑やかだった頃がある

藤井寺市 高田 美代子

よりよって大安の朝逝った夫
ゴメンネゴメンネ言い足りぬごめんね
何時もいた人がいなくて間がもたぬ
じわじわと寂しくなつて独り言
かわり番こに折れて暮らした五十年

藤井寺市 吉田 喜代子

ああ無惨春が背いた津波痕
忘れてゐる明日は我が身地震国
春の雨新芽あちこち自己主張
あの頃は待ち兼ねていた連休も
くやしいが口が勝手にドッコイショ

藤井寺市 鈴木 いさお

時よ止まれ今日が六十路の最後の日
歳の数ほど恥重ね古希の春
さのう咲き今日散る花の哀れなり
恍惚の父を看取った日の安堵
路郎師に逢いに来ました向島

藤井寺市 若松 雅枝

新人の孫が名刺を嬉しげに
ばあちゃんも時代に副つてEメール
腹八分今日も守れず自己嫌悪
一票を託す候補が見当らぬ
役員になつて服買ひ靴を買ひ

藤井寺市 伊藤 アヤ子

風評に迷わされている私達
天災の被害代償誰が負う
自粛もいいが皆さん元気出そ
寝返りをすれば他人の顔がある
どんな夢みてるだろうか仮の宿

藤井寺市 俣野 登志子

霊園で迷路にはまる代参り
無駄話の中からヒントよく貰う
ビルの谷間で迷い地下道でも迷ひ
我欲はわかる天罰はひどすぎる
テレビ見て涙新聞でも涙

守口市 井上 桂作

徒然草読んで愉しい年となり
本棚を眺めて不死を考える
世の流れやがて民主化エジプトも
絶えまなく流れる大河その歴史
カダフィは時の流れを知らなすぎ

箕面市 出口 セツ子

安全な場所対策練る政府

この国に命預ける不安感

復興の兆し見えない放射能

携帯がやつと通じてホッとする

まだ余震続き気になる子の過労

箕面市 広島 巴子

希望のせ桜前線北上中

満開の桜に心解き放つ

来年も会おうと桜風に舞う

被災地の暦むなし新年度

ボセイドン貴方嫌いにさせないで

八尾市 内海 幸生

葉忌やあの温顔とユーモアと

風みどりまた葉忌にめぐりあう

停電か放射能かを選れという

震災の下で高らか呱呱の声

切り捨てたネギの根っ子が持ついのち

八尾市 寺川 はじむ

いちどでも開けたら癖がつく財布

学卒も八百長相撲には勝てず

家計簿が徒歩を促す原油高

都合よくメディアが拾う街の声

復興へ希望が果立つ被災の子

八尾市 宮崎 シマ子

凭れると柱は強い杖になる

母さんは怒りんぼボク反抗期

バックしても気位だけが残る顔

リトマス紙が変れば結婚して上げる

成仏ができぬか未練か亡夫の夢

大阪府 野田 栄呼

少しずつ角削られて丸くなる

残飯を捨てる平気がわからない

義理人情絡まれわが意閉じ込める

万歩計ががんばり過ぎずがんばろう

バラバラの記憶大事に袋詰め

大阪府 桑田 ゆきの

被災地を思えば粗食も有難い

贅沢を言わぬ子育て自負のママ

井の蛙世相の風を読みたくて

もてなしの新茶しみじみ里心

陽炎が天守も塔も揺らしている

大阪府 初山 隆盛

大津波浴びたさくらがきつと咲く

新入りがプロの風呂び五月病

神苑をざくざく踏めば無に還る

遠方のポストに決めて吉とでる

バツカスのお叱り受ける二日酔い

神戸市 山田 婦美子

心と身ちぐはぐになる老いの脳
自尊心だけは忘れず持ち歩く
赤い服着たい願望捨てました
一人よがりの頭脳線など用がない
若い日の胸の疼きがまだ癒えぬ

神戸市 山口 美穂

カレンダー今年は殊に早うゆく
お魚と目が合ったので買いました
明日あるか分からないけど明日しよう
被災地へかける言葉が見当らぬ
残り時間やはり知らない方がいい

神戸市 木村 貴代子

好きだから地味な暮しに満ち足りて
ポリーナスを待つて買物していたな
娘と孫の生きる時代を憂えてる
甘すぎたソロバンのつけ原発事故
国難に一致協力できぬのか

神戸市 山崎 武彦

裏切らぬ土と暮らして芋を掘る
勝ち負けはやはり死ぬまで解らない
お互いの秘密許して回る独楽
春ですね 妻が手招きしているよ
帯キリリ秘めごと確と守り抜く

神戸市 山口 光久

お化粧が下手のまんまで五十年
眉間の皺はくは頑固と言っている
難しい顔して今日をダメにする
生命線のびろ伸びろと唐辛子
孫のジョークへちんぷんかんぱな深い皺

神戸市 早川 孝子

たんぼぼが支え合ってる海の風
思い出をいっぱい作るわらべうた
花粉舞い春の芝居が幕をあけ
大空にチャンスいっぱい浮かんでる
春を待つ君の背中を孫が押す

神戸市 伊勢田 毅

海峡の女も鯛も気が荒い
ほら吹きがそと素うどん食べている
時代錯誤気づかぬボスを持て余す
なにもない部屋にいっぱい朝日入れ
真白な紙に大きく書く平和

相生市 中塚 礎石

木枯らしへ裸になって身構える
大声で意見出し過ぎあと孤独
強風に手を取り合って折れた葦
病院で寝巻き同士が握手する
往診の腕組む医師が気にかかる

明石市 穂谷和郎

余白まだ残したままで逝けません

たかがクイズされど解けずに眠られぬ

気まぐれな夫の洗濯雨を呼ぶ

三代の茶の間をつなぐ母の味

言い訳のたびに曇ってくる明日

芦屋市 黒田能子

若葉マークの助手席に乘らされる

真正面に大物の席とつてある

きつちりと畳み古着が捨てられる

また明日軽い別れをしてしまう

話すこといっぱい溜めて里帰り

芦屋市 竹山千賀子

はらはらと散り行く花に身を重ね

一日の頓智ボツケに入れておく

嬉しい日心の窓が全開だ

イントロの長い話は気をつける

僅かの差何度も乗ってみる秤

尼崎市 林昭三

命日の仏壇掃除これだけは

ばあちゃんの里の伝説豆狸

引き分けか売り言葉には買い言葉

若かりし頃 泡盛にこてんぱん

初対面先生と呼ぶ無難なり

尼崎市 軸丸勝巳

てっぱんの最後予測の大外れ

黙祷の脳裏東北駆け巡る

大惨禍重なる昭和二十年

エアコンを控え取り出す上つ張り

ご免ねで座席拡がる右左

尼崎市 春城年代

至福の刻よあかつきに読む川柳塔

地震以後涙たやすく溢れだす

招待の白薔薇胸におもはゆい

隅っこであくびなんべん殺したか

そぞろ心を唆かされる桜狩り

尼崎市 山田耕治

むつかしい冗談あたりしんとする

納屋の中みんないらぬものばかり

お土産は留守を頼んだ両隣

われ一人祝う七十四の朝

プランターのトマトをどうぞ仏様

尼崎市 加川靖鬼

一人歩きしたくて伸びる影法師

手を染めてみたい講座が目白押し

適当に息を抜いてる句読点

一切れのレモンで丸くなる紅茶

大器晩成リンゴゆっくり熟れてゆく

伊丹市 山崎 君子

胡蝶蘭留守を頼むよ娘を頼む
お風呂の日嫌でもあとはすっきりと
シクラメン達者でいるかママは留守
丸い月今宵はどこにいるだろう
今年また千里の桜娘と共に

加西市 金川 宣子

青春の華の盛りを遺影とし
遍路道夫と向き合い生き直す
繰り言は言うまい前へ進むのみ
ランドセル防犯ベルと登校中
北へ北桜追っかけするプラン

川西市 西内 朋月

レベル七いつまで続く泥濘ぞ
定年後のらりくらりと日が暮れる
たらの芽を天麩羅にして春を食べ
味のある言葉述べているお歳
アポのない人には会わぬ偉い人

川西市 米原 雪子

合格に満面の笑み父母に告ぐ
国中で痛みを分かち合う募金
思いやりみんなで保つ温かさ
満足度確めながらダイエット
物干しが満艦飾となる帰省

三田市 北野 哲男

カーナビの矢は近道を教えない
廃校の窓光らせて陽が昇る
決断は勝手にしろと言う許し
男下駄爪先歩きして外湯
千の鬼百の仏に慰と姥

三田市 白井 二英

フィクションと思えるような大津波
自動車船が家屋といっしょくた
流される人見えなんなのが救い
予想外自然の無慈悲な暴れ方
人間の力自然に試される

三田市 福田 好文

柳誌来てまずは自分の名を探す
野猿一匹出たとパトカー来る平和
本人より印鑑くれと言う役所
仮装かと思えるほどの厚化粧
啓蟄にまず水虫が目覚ます

三田市 石原 歳子

スピーチの途中で時間切れとなり
歩きたくなるポロシャツを夫に買う
久し振り双眼鏡と土手の道
被災地へ祈り届けと寺の鐘
丸い背も気になるけれどまあまあだ

三田市 久保田 千代

激震に少しいびつな月残る
誘われて川の深さを知ること
ちよつとした機転利かせて褒められる
渡されるティッシュいつでも貰つとく
犬が逝き白いページの日記帳

三田市 田中 章子

本気で叱るうちの子もよその子も
オブラートに包んでおきたいあの言葉
ごゆつくりトイレに花は欠かさない
生きているだけで丸だと思ふ日々
くり返す夫の話を聞く余裕

西宮市 藤本 直

足並みを妻に揃えている平和
こころ賢い男馬鹿になる
長い長い一日だらう揺れ続く
争いは地球に線を引いてから
次の世があれば怖くて生きられぬ

西宮市 秋元 てる

手応えがあるから今朝も跳ね起きる
安全牌あるのかどっしりしてる妻
父の言うそこそこ真面目な男に決め
よく喋るよっぽど淋しい人なんだ
喧嘩腰の物言い老母はまだ元気

西宮市 亀岡 哲子

リンゴの唄に元気貰った日もあった
内緒ごと胸へ納めてから忘れ
パパはもう相手になれぬボール蹴り
オレオレ詐欺に乗らぬソロバン持っている
最後まで頼ってくれていたね 友

西宮市 西口 いわゑ

春風を颯爽と切るピンヒール
青春が華なら老いは勲章だ
いっぱい咲く未練などないように
大夕日亡母を映してくれないか
菜の花よ哀しい人が多すぎる

西宮市 吉井 菜々子

正座して祈るよりほか術がなし
被災地の涙に涙するばかり
涙から支援へ心切り替える
被災地へがんばれなんて言えませんが
失った命を想い鎮む日日

西宮市 山本 義子

地の底にあらうご浄土信じよう
底の浅い秘密だ天はお見とおし
崖っぷち覗きましたよ底ぢから
いかなご予報でぐすねひいて鍋洗う
コインアイス底まで食べておりますの

西脇市 七反田 順子

被災地に拡がる支援温かい

被災地は花束よりも義捐金

初音いずこツバメはすでに飛びこうて

輪切りしたレモンに恋がまといつく

ブーメラン明るい話題乗せて行く

姫路市 古川 奮水

竹の子の天ぶら褒めていい夕餉

上燭に和え物副えてうまい酒

好き勝手嘘も聞える背中越し

絶景の感動話す宿の膳

夕映えの赤さに未練帰宅する

奈良市 米田 恭昌

神よ何故こうまで日本追い詰める

被災地のパン一片に子笑顔

生命力被災の地にも草萌える

神父かて毎夜懺悔をしています

新顔が淀む空気を入れ替える

奈良市 天正 千梢

過去現在未来線香三本立て

いずこから来たとも滝は語らない

男滝女滝とは知らなんだ

疲れたら休みなさいと万歩計

横なぐりの雪紅梅に容赦せず

奈良市 阿部 紀子

紫陽花の香りにむせてお参りを

髪の毛が抜けないように雨を避け

孫たちと思いいづくり励んでる

観光地歴女ガイドが花盛り

老化への骨がキシキシ音がする

奈良市 岩本 浩二

八十路入り後はおまけよケ・セラセラ

不満でも努めて笑顔作ってる

そこそこの暮らしに感謝しています

ちよっかいを本気にされて狼狽える

振り向けば老婆が拳を上げている

奈良市 加門 萌子

余りにもひどい容赦の無い悲劇

乳呑児を思う同年輩案ず

天災が人災を呼ぶ理不尽よ

華美に過ぎた文明日本を自省する

驕ってはいけない人智には限り

奈良市 辻内 げんえい

尖閣を護る神風きつと吹く

厄介な孫だが今日も癒される

あと何年歳を数えて新車買う

僕だけのパワースポット氏神に

悔しいが自然に勝てぬ人の知恵

生駒市 飛 永 ぶりこ

桜吹雪するつと我執解き放す

ふらついた譽め方どうとでも取れる

あんみつの前 辛口の提案が

大盛りで悔しさ飛ばす豆ごはん

春の庭蝶もチャチャチャと浮かれ出す

香芝市 大 内 朝 子

被災地へ善意の華が咲き誇る

年金も娘に会うと太っ腹

逢いたくてあえないもどかしい酒よ

甘えたらへなへな崩れそうわたし

大ピンチきつと掴んでやるチャンス

橿原市 安 土 理 恵

定位置はいつも後の三番目

護身用に奥の手一本隠し持つ

風さえも素通り老いたなとおもう

風変るわたしは向きを変えられぬ

積み上げた過去のくずれていく速さ

橿原市 居 谷 真理子

ご同輩あなたも一輪車で渡る

会議室無口が深くうなずいた

図書館に彼も定年一年生

本能のような笑顔を失った

単線のレールが向かう大夕陽

大和郡山市 坊 農 柳 弘

沈思黙考自分探しの座禪堂

風薫る花橘に師を仰ぐ

爽やかな尊顔雨上がりの羅漢

我武者羅も程々にして喜寿達者

自惚れの真ん中辺にある穿ち

奈良県 渡 辺 富 子

地震以後夫のいびき確かめる

日本の灯台となる人いずこ

放心の街を労り咲くさくら

放射能漏れて魚も人も哭く

被災地に笑いが戻る日を祈る

和歌山市 福 本 英 子

暖房を自粛して飲む葛根湯

神経も無いと困るがこの痛み

亡夫と遊んだ森もだんだん遠くなる

ありがとう言いそびれたの手を合わす

余震続く布団の上で寝る寒さ

和歌山市 坂 部 紀 久 子

誰も居ないが携帯だけが傍に居る

誰も傷つかぬ嘘なら言ってみる

買った菓子戴き物と言って出し

想定外と言う免れる道がある

頑張ろう日本私は節電を

和歌山市 武本 碧

一瞬の本音をキャッチしたカメラ
二所帯の垣根をなくす思いやり
追い風がたまたま吹いただけのこと
よいしょされ前向きになる試着室
手掴みにされてあなたについていく

和歌山市 田中 みね

欠伸されていると気付かぬ長話
ああのどか桜が咲いて桃さいて
花丸をもらい張り切る趣味の会
ハッピーな知らせ届けに春の使者
君のすべてが好きだと聞いたプロポーズ

和歌山市 古久保 和子

山の幸川の恵みとかくれ里
人口比率猿に敵わぬ過疎に住む
渇水のダムに石けりかくれんぼ
薬飲むまでが私のフルコース
それではと酒で湿らす祝い節

和歌山市 松原 寿子

前向きの街ゆるやかに走り出す
こぼれ種土の命に育まれ
百歳にして黒髪の伯母祝う
トンネルを抜けて安堵の若葉風
起ち上がる街に意欲の芽が萌える

和歌山市 柏原 夕胡

まごころは裸のままでも良いのです
おにぎりを食べる幸せだと思ふ
母親は無償の愛という神話
何もかも許して心風いである
肩書きは肩書きだけのものとする

和歌山市 玉置 当代

スカイツリーからの眺めに酔うカメラ
ささやかな幸せふたり粥する
生きているこの幸せを無駄にせぬ
腰痛に椅子はわたしの指定席
平穏な暮らしを奪う春風

和歌山市 喜田 准一

風向きを読んで抜け道曲り角
強かな女くの字の影がある
ウォーキング毎朝続く訳ヒミツ
親と娘のタッグにうまく乗せられる
挨拶か知らぬ振りかで迷う距離

和歌山市 堀 富美子

自己中を削ると春が転げ出す
ちっぽけな私檻から出られない
病んでから子に一步引くへらず口
小賢しい女のうふ気にかかる
同じ轍また踏んでいる妥協癖

和歌山市 松尾和香

花束にほろ酔いの父泣いている

不器用に生きて心に亡夫の影

清流に育つ魚影を守る山

土汚染土に寄り添う影法師

踏まれても雑草魂で生きられる

和歌山市 岩本美智子

大地連動 家族を探す雪衣

天津波人の和までは崩せない

白煙へ誘惑止そう偏西風

放射線溶けこんだ碧海 さかな

大地病む空き巣のごとく忍びこみ

和歌山市 上田紀子

今日生きた笑顔を明日へ溜めておく

原発が風雲急を告げている

平凡は有り難いねと知る地震

五感みな目覚めて春が歌い出す

ずたずたの鎧で明日の夢を追う

鳥取市 鈴木公弘

被災者へ真心そそぐ紙コップ

放射線もらす原発などいらぬ

義務果たすように桜が咲いて散る

汚されぬ背に骨があり先祖あり

固いこと言う私はダメですか

鳥取市 土橋はるお

葛橋保険を賭けてから渡る

大屋根に届く梯子を借りて来る

お隣の垣根を越えるシャボン玉

梅干を毎日ひとつ食うことだ

うぐいすも少しは花粉症らしい

鳥取市 倉益一瑤

馬鹿騒ぎなぜか涙が出てならぬ

淋しいと騒いでしまう癖がある

崖つぶちアンパンマンを呼んでみる

神様よ何を怒っているのです

人間はこんな脆いのか自然

鳥取市 夏目一粹

逆鱗に触れて左遷地さまよった

読まれたか背なに目のあるような妻

ムチ二つアメは一つでまるめられ

隠し味隠しつづけてまざる

自由にはさせぬ心の城までは

鳥取市 岸本孝子

どなたにも心の窓は開けておく

欲という荷を軽くする歳になり

本当の福の神にはまだ会えず

漬物が馴染んだころは底が見え

ゴミ置場狙うカラスも命がけ

鳥取市 吉田 孔美子

パソコンの世話にならない掘りごたつ

新品の形見日傘で旅に出る

屍に咲いたわたしは酔芙蓉

も一度行こうパリのしあわせの水

すず虫も地球が一番と鳴いた

鳥取市 宮脇 道子

地球のファスナー締めて神様お願いね

時をかけ老いの世界に滑り込む

桜咲き被災のニュース消してくれ

物理学者被災の跡に顔並べ

花筏復興の願い乗せ送る

鳥取市 土橋 睦子

勝ち負けの相手が欲しいひとりっ子

これ以上愚痴ると棘を覗かせる

世話好きな虫がいつびきポケットに

摘みすぎて味もなくなる鉢ばかり

生き甲斐に仲間呼びあう昼さがり

鳥取市 永原 昌鼓

しみじみと数えきれない皺を見る

蟠り溶かすお酒を酌み交わす

孫が来て夫の頑固が溶けてゆく

病む身でも亭主関白捨てぬ人

白旗を上げヘルパーに頼り切り

鳥取市 中村 金祥

リードした余裕で坂を登り切る

原発が道なき道を歩いてる

人間の弱さを知った崖つぶち

放射能無色透明無味無臭

ときめきもないのに脈が速くなり

鳥取市 両川 無限

一線を引かれ男がうろたえる

脱線をしたがる僕の影法師

煮え切らぬ男残して陽が沈む

人間に飽きて吠えない犬を飼う

公園に住民票は移せない

鳥取市 福西 茶子

仕分けしてまた仕分けして火の車

大粒の涙は武器にせぬつもり

スクワットするにも突っ支い棒がいる

情けなやワイン一杯つきあえぬ

避難所の秩序ニホンの武士道だ

鳥取市 春木 圭一郎

忙しくしていると悩み消えてゆく

悩みごとあれば家中片づける

誰にでも悩みあるのが正常だ

損だなと思う性格財産だ

悩んだらとことん悩み悩み抜く

鳥取市 福永 ひかり

被災地が晴れの予報でホッとする

募金箱嘘いつわりのないように

貸した耳心配事が増えてくる

会える時會つておこうと同期会

約束を次から次とする桜

鳥取市 平尾 菜美

丸められ神と火の中水の中

義理がたい嫁のうす味ほめ称え

味漫ろ鍵引き継げぬ核家族

気まぐれもたまにや的へと突つ走る

甲冑をほぐすのはの城あかり

鳥取市 有沢 せつ子

保育所のチューリップたちよく笑う

亡き母に似てきた肩と背の線

どきどきと期待で柳誌そつと見る

カットした髪春風にめくられる

身の丈を越えないように世を渡る

鳥取市 鈴木 一弘

やぶ椿そつとかくれてぼたん雪

紅椿くちべにひいて大合唱

ひな祭り米寿園児の客となり

さくら咲きいよいよ故郷あとにする

ひな祭り紅白梅香緋毛氈

鳥取市 田村 邦昭

後日また言いのがれにはいいことは

自分史に得たものはなし悔いばかり

さまよつて掴んだ愛だ離さない

背なかには喜怒哀楽が詰めてある

沈黙の父の背には愛がある

鳥取市 吉田 弘子

復興へ大和魂世界の目

非常時に秩序守つてこそ平和

生きているだけで幸せ家族愛

贅沢に慣れて節電ふと忘れ

思い出を手繰ると夫いつも傍

鳥取市 奥谷 彩子

旅のつれづれ試飲ワインにほほ染める

蒼天に虹生むシャボン孫と吹く

人が好きハート弾ませ今生きる

苦も楽も紡ぎこの世に生かされる

いい人みたいふつくら温い手と握手

鳥取市 西川 和子

平穏な日々が籠っている瓦礫

避難所で感謝されると胸痛む

子供等の無邪気奥にある不安

子供等の健気に勇氣湧いて来る

切なくて辛いニュースはまだ続く

鳥取市 中宇地 秀 四

猪が夜回りをする過疎の村

干涸びた心に沁みる思いやり

もったいないもったいないが檻樓の山

この顔が呑んで踊った人かしら

ニコニコと貧乏神がまぶれつく

鳥取市 加藤 茶 人

津波から高き気にしてビル見上げ

つぶやきがペンより恐い世を変え

説法がどれも効きそな良い響き

見て嗅いで触って四季の日本好き

素材味殺して頼るマヨネーズ

鳥取市 田 中 一 眸

靖国にさまよう霊が集う春

尼僧からほんのり香る梅の花

妻の味母の味にも氣を使う

氣まぐれが爪を研いでるご用心

石垣の謀叛を知らぬ天守閣

鳥取市 池 原 天 馬

大震災文明信じ慟哭す

被災地へ桜前線飛んで来い

歯が浮いた喜寿の今日までよく耐えた

高血圧基準かえられ薬で

薬袋余白をメモに使いきれず

鳥取市 高 浜 勇

赤と青混ざらぬように黄で区切る

美しい海が魔物と化す津波

胸の内軸がぶれてる嫉妬心

耕してくれた世間に種を播く

いい人になるためこころ掘り返す

鳥取市 竹 口 清 信

五分五分の人生だったことに

それでいい結果が出たらそう思う

欲張って損した覚え数えない

数よりも値打ちを決めるのは中身

中味見てからでは返し難く成る

鳥取市 池 澤 大 鯨

名刺には肩書き入れぬシャイな人

泣き女雇われマダム役どころ

馬の足それでも芸は難かしい

わが時俺の匂いに満ちみちて

爪を噛む癖は渴きの病だろ

鳥取市 前 田 孝 子

ひと坪の野菜作りに汗光る

平和ぼけたよな我が家夜が更ける

穏やかに花と語らう庭いじり

リラックスしすぎる人も病氣だと

私には打たれ強さが欠けている

災害に秩序を守る日本人

鳥取市 太田幸枝

高校受験パスした孫の勇み足

狭き門くぐり大きな夢を抱く

孫娘晴の門出の祝唄

ランドセル桜の下で勇んでる

倉吉市 牧野芳光

そこなわぬように蜆に砂吐かす

人生の色に仕上がる卵焼き

刃物研ぐ少し野心も湧いてくる

タダだから〇は何個もつけたげる

死んでいるか生きているかを見る鏡

倉吉市 山中康子

釘付けのテレビに胸が張り裂ける

動揺を押さえて話すアナウンサー

数知れぬ海の遺体に手を合わす

大津波痛いかゆいは消えちゃった

食いぶちを出して余裕の顔になる

米子市 白根ふみ

汚染の海が輝くあした祈るのみ

歯も足もほんとの歳を知っている

合掌のかたちでみんな芽ぶきだす

詳しくはホームページと言われても

雑草を抜くとひと日が癒される

減反の田をお借りしてせりを摘む

花冷えの日はじっくりとカレー煮る

通院の十年医者に褒められる

太陽の相棒になる帽子買う

旅に出る小さな舟を予約する

米子市 高田振作

出雲大社の巫女さん嫁にまだ行かぬ

病気見舞い嘘の上手な人と行く

厚化粧落とし男に戻ります

クラス会若さくらべるいいチャンス

酒と女死ぬまで押せぬ削除キ

鳥取県 佐伯やえ

「川柳理論」一字一語を噛みしめる （新装発売の「川柳理論」を読んで）

「川柳理論」読めば詩囊に血がたぎる

貧しいが消してはならぬ灯を守る

病む伯母へ特効薬となる手紙

無人駅の昔を語る白もくれん

鳥取県 竹信照彦

原発の事故の評価が怪しすぎ

放射能の脅威が薄められている

震災のテレビ見すぎてうなされる

花粉より飛散が怖い放射能

大震災またまた学者評論家

鳥取県 石谷 美恵子

謝って人間らしい顔になり
ひと言も咎めず妻がリードする
ラブレター下書きのままセピア色
好きなものみな敵になる皮下脂肪
細い字で書かれた中味重い文

鳥取県 細田 裕花

せせらぎと緑の田んぼ我が牙城
妹の暮らしの匂うハガキ来る
ごちゃごちゃと女の部屋にある小言
辛抱はいつまで続く空に問う
はめられて自分の位置を見失う

鳥取県 岩崎 和子

ケイタイもネット世界も知らぬまま
おばあさんと言われた事のない私
髪カット パーマも何もしたくない
世情など忘れ見つめる庭の花
思い出は昭和セツない物語

鳥取県 松川 行男

味つけのうるさい客は身内です
料理本持たせただけで嫁にやる
背が丸いそんな姿勢が楽になり
握手ぜめ今日は何人だったかな
両手で握る一票のため固くする

鳥取県 山下 節子

農作業天気予報がリードする
崖っぷちまで追いつめられて目が覚めた
村中が絵出藁屋根葺き替える
思いきり咲いたさくらのいさぎよさ
四季巡る花は律儀に咲いてます

鳥取県 山本 正光

日本地図変えそな震度九津波
天災は人もふる里消す哀話
借景の大山誇りとし暮らす
いつの世も伯耆のかぜは優しいよ
風光る小さな帽子一年生

鳥取県 深田 俱久

津波とはかくなるものか天仰ぐ
避難所へ女神降臨元氣湧く
祈りの手合わせテレビの津波観る
昭和の子傷口なめて笑ってた
傘寿の身たばこが馳走畑仕事

鳥取県 北村 稔

もうちよつと逝きたくないよ えんまさま
煙草屋にたばこないとはやめるかな
もう少し続きをみたいいい夢よ
崖の上飛び込む前に目がさめた
朝帰り母さん何故か笑顔です

松江市 三島 松丘

出雲市 伊藤 玲子

喜寿までは男の意地だ坂登る
七坂を越えて苦楽の味を知る
七十路の胸に流れている銀河
千本の土筆と春を語り合う
生き延びるために散らしているガラス

松江市 小川 注湖

出雲市 小白金 房子

床の軸巻いて季節を春にする
学ぶ気は八十路の今も持っている
はちばちとやれよと電話喜寿の友
古里も昭和も遠く歳を取る
出番です腹に力をまず一歩

松江市 松本文子

出雲市 多久和 敬子

修羅の顔して仏壇に手を合わせる
婆あにならねばこの哀しみは分かるまい
我慢がまん思うようには生きられぬ
ぐさつときた あの人他人だったのだ
その時はその時通帳書類元の位置

松江市 松本 知恵子

出雲市 富田 蘭水

へこんではおられぬ小さい花も咲く
朝一番狂いそれから空回り
人災だ原発事故の後遺症
揺れる日本海に囲まれてた事実
一斉に咲き出す花が背を押す

大津波去ってニヨキニヨキ春芽吹く
孫も子も財布はたいて義援金
大社守られて出雲の地
七度二分曖昧な熱離れない
わたしより素直に恋をしてる猫
四月六日命日偲ぶ花手桶（昭和六十三年）
八十年恩義わすれぬ一行詩
句碑そめて海は無口になって行く
嘘のないくらし仏間の灯と語る
歩行器へちよつと手を貸す春の庭（ひ孫）
二十年前の写真に惚れ惚れす
家計簿の悲鳴聞こえる三四月
母さんの大きな傘が眠ってる
お洒落して出かける義母の医者通い
二十年前の自分に戻りたい
いい夢は皆正夢にしたい欲
お茶うまい今日一日のすべり出し
野菜苗子にかわって愛もらう
先よりも今が大事と誓いたて
原発が倒れはじめて身をあかす

出雲市 岸 桂子

昔も今も空の青さと波の白
少年よピアスの穴は痛まぬか
ど忘れを五十音から拾い出す
ノーマイク今日はお肌の定休日
犬撫でるこの子の母はどこにいる

島根県 持田 多輝子

母のむね針千本の傷いやす
句の見えぬ友の安否が気づかわれ
一杯の水にも人の情け知る
せまき門くぐり抜けたる娘のリボン
人の名がすぐに出てこぬじれつたさ

島根県 伊藤 寿美

流出のビデオ国是の風が吹く
ああ瓦礫佇立の影の白い息
オーバーな自慢話に胡椒振る
伝説になったね野茂のトルネード
ドライフラワーあの日の空は忘れない

倉敷市 撰 喜子

予想せずわが人生をケセラセラ
子の自由うばって梓にはめたがる
ふし穴から見える世界に安堵する
額寄せ知恵を出し合う貧者の灯
生命線まっすぐ伸びている不安

美作市 山本 玉恵

スランブを風が背を押す花唄う
少し女のおごりを見せてシクラメン
物忘れ日毎に増して桜闇
淋しさになかなか溶けぬ角砂糖
引き出しに想いひとつの香を放つ

美作市 福原 悦子

菜の花も開いて亡夫の七回忌
石畳割れ目に生きている花だ
水と火が列島攻める地獄絵図
欠け茶碗遠い過去を捨てきれず
極楽か案内状は届かない

(前月分) 砂川市 大橋 政良

マネキンを見ている春の衣替え
たつぷりと水を欲しがる春の花
節分に掴みそこねた福の神
子育て期終ってみれば味気ない
母ひとり子ひとり女としてひとり

(前月分) 鳥取県 岡川 無限

塗り絵からはみ出したのが僕の夢
矢印の先は戦になつていた
一人居のドアにも春がノックする
シヨベルカーに虫歯一本削られる
何もかも許す勇気のないつらら

(持田多輝子さんの句は74頁にあります)

川柳塔の

川柳讃歌

(78)

木津川 計

恋ころろなくし乾燥注意報

山岡 富美子

「レストラン飯屋屋台と恋進む」(前田辰男)が恋の道筋をよくとらえていました。その伝で気象用語を借りれば、また年齢別の恋を表現せられると右の句で知ったのです。

恋の予感ば波浪警報に始まり、強風注意報を経て台風警報並の高まりになりました。か。人生は短く、もはやときめかず、となりますとカラカラの乾燥注意報が出されるのです。ここはひとつ富美子さん、安土理恵さんを見倣いましょう。前号理恵さんの句です。「もう一度咲きたい愛が発芽する」、えらい!

お逢いしたい追伸にある微熱かな

増井 ヨシ枝

「逢う」と「会う」の大違いです。逢引はしても会引はありません。罪な追伸を手にしたヨシ枝さんは今号「歳としと言わんでほしまだ古稀よ」と、安土理恵さんに負けん若

さですから、憎いミスターXは微熱ほどの軽いジャブでヨシ枝さんの反応を伺いやがったのです。昔、女義太夫の親衛隊どうする連はこんなとき囃し立てました。さて、ヨシ枝さん「どうするどうする」。(陰の声「そんな男、ほっときなはれ」)

やんわりとでもしつかりと伝えられ

米原 雪子

「上方芸能」編集部の女性一人がこう解釈するのです。①ミスターXに寄せる雪子さんの思いはお気の毒に、やんわりとしつかりと断られたのです。②いや、雪子さんはやんわりと微熱程度にミスターXからしつかり思いを告白されたのです。なるほどなあ、さて。僕の解釈です。ミスターXの本命の女性から「あんた、脈ないと思うわ」と男の気持ち伝えられたのです。(また陰の声、「そんなええ加減な男は忘れなはれ」)

特急に抜かれふるさとに降りる

牛尾 緑良

「かにかくに浜民村は恋しかりおもひでの山おもひでの川」(啄木)。故郷はいまも町にならず、市に昇格せず、村のままでなければならぬのです。故郷はどこまでも「兎追いしかの山、こぶな釣りしかの川」ですから、特急の止まる駅などで降りる訳がありません

ん。各停のひなびた駅で降り、一時間待ってバスに乗り、降りて、歩いて、だんだん畑の上のいろりを切った家が実家の筈です。

定年や雲の形に無頓着

高橋 宏臣

かつて見た雲に血が燃えた時代がありました。大木惇夫は「戦友別盆の歌」で「わが征くはバタビヤの街/君はよくバンドンを突け/言うなかれ、君よ、わかれを/見よ、空と水うつところ/黙々と雲は行き、雲はゆけるを」と。司馬遼太郎は、のぼつてゆく坂の上の青い空にかがやく一朵の雲に明治の青春を見たのです。いまや定年、宏臣さんは行雲流水の心境、やつと人間らしくなれました。

捨てるもの捨てたかに冬木立

木本 朱夏

誰かが詠んで「葉を残せる園の冬木立」もあると。病床のジョアンナは煉瓦の壁を這う枯れた蔦の葉が全部落ちたら、わたしも死ぬ運命とさとりします。しかし、落ちない一葉に励まされ、彼女は回復します。その一葉は彼女を生かそうとした老画家が壁に描いた葉だったのです。オー・ヘンリーの「最後の葉」です。以来僕は「最後の葉」を探し続けています。

(「上方芸能」誌発行人)

自選集

小島 蘭 幸

頑張っている妹へ米送る
海を見つめている怒りはありません
選手宣誓とところひとつになる日本
いい電話ばかりかかってくる朝陽
生きた証の爪が歪に伸びてくる

宮 西 弥 生

春の字に弱い熟女の脱ぎっぷり
茶柱の真ん中邪魔者がひとり
太陽に今日一日の身を許す
折れそうな試練支えたのは両手
鉛筆を削りつつける友の数

八十田 洞 庵

碑の歌をさすり読みして大師廟
海越しに見える被災の火が悲し
母の星そこは核などないでしょう
絵馬のこと希望がなえば忘れてる
リハビリに支える母の細い腕

両 川 洋 々

破調句のような人生だが悔いぬ
なあ妻よ俺にや安楽死が似合う
愛一つ枯れて未完の絵が乾く
僕のハートに君が戻る日信じよう
ああ不況生きるハードル越えにくい

板 尾 岳 人

卓袱台を囲む麻生家みな揃い(路郎師五女梨里様死亡)
AKB川柳センス権教室(テレビ東京出演)
喧嘩して仲良くなつて喧嘩する(新婚52年目)
人間を馬鹿だと思ふ人力車
母からの便りツナミのことばかり

奥 田 みつ子

ただ祈る事故の収束ただ祈る
忙中閑のらりくらりと春ひと日
忙しさに流され自分どこ行つた
七十年代最後の年だ 心して
まぼろしの梢目指せば尚高し

河 井 庸 佑

耳元でそつと囁く善と悪
百葉の長と欠かさぬ祖父の酒
単身赴任迎えてくれるのはベット
やる気出すまでゆつくりと待つも策
原点に戻って探る打開策

川上大輪

ひらがながやつぱり似合う春ですね
思い出が時どき蓋を持ち上げる
ひっそりと咲き続けている母である
ドアの音これが私の答です
肩書きは偉いが君は偉くない

木村 あきら

宿敵の辞書に手垢が着いている
ホタルの灯燃えて地球に春巡る
やすらぎの心をくれる六地藏
草千里緑を縫うてゆく鉄路
老翁の日課狂わす通り雨

小西雄々

薰風へ頑張れの声とどけたい
火の橋を渡り女神に会うてきた
惜春へ挽歌気になりピンク着る
菖蒲湯に重い心を浮かばせる
燦燦と暮し年齢には触れぬ

斉藤 荔

プランターに小さな夢を子と育て
少年がぎゅっと握っている新芽
晩年の絵皿のどかな彩を溶く
一粒の汗一粒の実を結ぶ
天地人はかりしない事ばかり

塩満 敏

小燕に土産話を聞きたいな
熊蟬の初鳴き聞いた朝の庭
梅雨入りに故郷の海を思い出し
芋の苗日増しに伸びてきています
彬碑の雑草抜きに行きたいな

新家 完司

神仏はいない証拠の大地震
惨状の臭いがしないテレビジョン
ファミレスの窓から被災地は遠い
浅薄な同情よりも先ず支援
焼酎を少し控えて義捐金

恒松 叮紅

笑い声だけは欠かさぬ老い二人
ど忘れがまたカレンダーめくつて
また動く幸せがある酒一合
階段を数えて上がる老いの足
語りたいような枝ぶり庭の松

津守 柳伸

春うらら仁王のあくび見てしまう
満開を迎えてくれたローカル線
お互いに面倒見あうデイケア
買い溜めはしないさせない土根性
電力の胆に銘じた有り難さ

遠山可住

公園のベンチ二人の春が来る
当用漢字俺の名前が軽うなる
ロボットに歩け歩けと追い出され
ぼろくそに言われ拍手をして帰る
さくら吹雪一人で歩くあほらしさ

都倉求芽

文化とや世の中すべて割れガラス
神木になれぬさくらが人を恋う
はかなさをなによりも知る花吹雪
並木から離れて背のびせぬさくら
さくらから見れば人間の不甲斐なさ

土橋螢

飯食つていのちをつなぐ玉露のむ
啓蟄の如く炬燵にもぐりこむ
老眼に見た太陽は赤かった
死の美学鯛を殺して焼いて食う
威張つても孫とおんなじ背の高さ

中原諷人

野ウサギの自由を奪ってはならぬ
野うさぎもボクも草食系ですよ
ウサギ跳び未だリハビリの森を出す
震度9、うさぎ浚った大津波
蒲の穂のリハビリ赤うさぎの治癒

西出楓楽

天変地異神の気まぐれ酷すぎる
原子の火 牙を剥いたら恐ろしい
大災害 言葉の無力思い知る
頑張れと安易に言っているのか
家計簿に大きく記す義援金

仁部四郎

外国のコメは三桁のヘクタール
三十町のコメのソロバン合いますか
減反のタン学校で習えるか
減反の大豆伍長の墓囲む
総論は瑞穂の国であるべきだ

林瑞枝

蓮華田のじゅうたん選ぶ握り飯
少女羽化明日を夢見て凜と咲き
槌音にいのち漲る若い街
この都市が好きコンパスの中に住む
愛は哀白鳥が飛ぶシベリヤに

前たもつ

人間の強さを知った大津波
田畑まで奪う原発許されぬ
小じんまり自粛してます花の下
景気挽回こんな時こそ金回す
心癒す時間は神の贈りもの

政岡 未延子

今日は動こうがばつと布団はねのける

いの一番中学生がたつ義援

魂が義捐金へと走らせる

原発が怖くて友ら米子まで

助かって欲しく神の名仏の名

三宅 保州

リレーのように医者梯子をして元氣

あなたなどと言うのはホームドラマだけ

その土地の人はならない水あたり

有頂天になり見失う現在地

TPOにに応じて耳を取り替える

第30年度 夜市川柳ご案内

回	兼題	選者	締切
1	曲げる	高瀬 霜石	6月末
2	濡れる	稲村 遊子	7月末
3	耳	矢澤 和女	8月末
4	予測	村上 水筆	9月末
5	どろどろ	古今堂蕉子	10月末
6	海賊	日野 愿	11月末
7	隠す	佐藤 良子	12月末
8	不要	鈴木 公弘	1月末
9	たわごと	古久保和子	2月末
10	田圃	片岡 湖風	3月末
11	強がり	高田美代子	4月末
最終	極	小島 蘭幸	5月20日

温故知新

『菊澤小松園遺句集』より

釣鐘の由来を聞いてから鳴らし

白一色土地の女と差向い

旅人へくらしの棹と見えぬなり

雲は旅人振り返りもせず別れ

九輪水煙塔の静かに黙秘権

水子地蔵のぐるりも春の花が咲き

ふるさとの月はいつでも晴れている

満開の花は年増の美しさ

草の露罪の深さを見せて落ち

月の浮く水を汚してなるものか

人知れず咲いて峠で散るさくら

泥に咲く蓮とはゆかぬ世と悟り

大阪の住所は橋の名で覚え

だまされて見たい妓に逢う法善寺

金のあるうちは大阪よいところ

尾行しているのに道を尋ねられ

欺された同士飲んでる新世界

【昭和62年発行 編集人・河内天笑 菊澤小松園（本名藤三郎）氏は明治37年大阪市生まれ、大正14年川柳作句を始める。昭和16年不朽同会員後川柳塔社同人。川柳塔社副理事長を務め昭和59年没】



西出楓楽選

河内長野市 山室 光弘

平凡な幸を津波が運び去る

ビルの上残った船の地獄絵図

原発は想定外の負の連鎖

目に見えぬ敵に怯えるシーベルト
たむけられたガレキに菊の花哀し
口ずさむ雨にも負けず賢治の詩

鳥取市 津村 律子

おしんの国よ底力信じます

世界の善意ありがたいありがとう

広島悲劇を二度とさせないで

能無しの私も出来る笑顔です

肩に手を触れて勇気を分かち合う

今日の風いつもと違うあったかい

弘前市 高森 一吞

墓場まで持つて行く荷が多過ぎて

スランプの底で搜した近い道

節くれた指勲章に野良の母

世渡りが下手でまあいい握り飯

神の眼の届かぬ袖で涙する

肩の荷がおりたと思や肩に孫

吹田市 蔵田 光子

のびる芽を親の手出しが邪魔をする

努力の芽気長に見よう子を信じ

雑草がところ狭しと芽ぶき出し

事毎に母の言葉を思い出し

震災に春の日ざしがまぶし過ぎ

遠くの子何かあるたび気にかかる

米子市 竹村 紀の治

言い訳をしながら放射能を播く

お楽にと言われて膝が礼を言う

開票率ゼロで当選する不思議

原子炉が本当の貌見せ始め

我慢して聞いてくれている僕の歌

紐のない靴が好きだと腰が言う

健気にも孤軍奮闘善玉菌

河内長野市 梶原弘光

口悪いけどいい人です通つてる

カレンダーカーちゃんの方から埋まる

ちゅうちょなく編曲してる演歌好き

訥訥と被爆体験鬼気迫る

歳重ね四角四面の角が取れ

鳥取市 松原ひとみ

山の幸吹き出す春に里帰り

渋滞が見つけた桜のほころび

この話まとめるとも酒肴

ごほうびはハーブの香り風呂包む

節電にまだ仕舞えない冬衣料

勝算があつて並べる美辞麗句

高槻市 島田千鶴子

電子音に右往左往の台所

ぶりかえす寒さに新芽落ちつかぬ

花屋から季節はめぐり来るらしい

繋がらぬケータイ握りテレビ見る

無事と知りただそれだけで言葉出す

たんたんと被災を語る友の声

兵庫県 上田ひとみ

あの角をまがれば逢えたはずのひと

深呼吸わたしが徐々によみがえる

探しています迷子になった私

見渡してから何か言い出す男

薬指にあうリングが見つからぬ

優しい男で何故わるいんだろう

和歌山市 福井菜摘

読み違うゼロの一つに夢消える

躊躇せず歩くと風に背を押され

子育てに手垢だらけの母の辞書

カラフルな言葉トリックかも知れぬ

気まぐれな心を洗う通り雨

こんがりと幸せ色にパンが焼け

堺市 内藤憲彦

心から復興祈る募金箱

春風を丸く飲んでる鯉のぼり

正体がすでにお顔に書いてある

紫陽花は雨の中でも凜と咲く

台所気圧の谷が通過中

きのうと同じところに居る幸せ

岐阜市 平野あずま

無位無冠生きた証の作句帳

急逝の兄にすまない余命表

コンサート心にビタミン剤届く

ピカソ展美人と思う妻の顔

代名詞ばかりの会話春おぼろ

パソコンの意地悪老いに妥協せず

和歌山市 磯部義雄

いよいよとなつて地デジと御対面
アラフォーの娘のんびり焦る親
半紙からはみ出す元氣子の習字
氷河期に追い打ちかける大津波
マスク取れば美人だろうか花粉症

和歌山市 坂部かずみ

新しい時代を生きて夢が覚め
カーテンを洗いさっぱり春の風
不整脈検査を受けたが平均値
散らしすし春を迎えた台所
おにぎりを持って女の花見会

和歌山市 土屋起世子

春うらら皴を伸ばして薄化粧
私を癒す程よい風に会う
思ひ出をたつぷり食べて達者です
一人住む壁に娘の注意書
人工の風が隙間へ吹いてくる

和歌山県 森下よりこ

終章は差引きゼロで締め括る
風に乗って行方定めぬ放射能
ちよっと儉約災害寄付へ回します
ゼロ金利だから年金命綱
亡き人を思い一途に咲くさくら

岩出市 藤原ほのか

新緑が私の心まるくする
巡り来る出で湯の里も桜色
湯煙にほんのり染まる君の影
大地揺れ無情の雨に立ち竦む
花言葉認め今日の色にする

岩出市 村中悦男

寄る年に見合った夢を抱く二人
常備品気付いた時は品が切れ
小さな背なな小躍りをするランドセル
汗ごとに膚着一枚ぬぐ加齢
妻笑う声は妙薬かもしれぬ

海南市 小谷小雪

紫の袷紗に包むおよろこび
君もまた目が命だね桜鯛
いそいそとついて行き手ぶらで帰る
平凡なお茶を二人でありがたい
開けすぎも閉めきりだけでも辛い窓

紀の川市 宇野幹子

齧られた脛が泣いてる骨粗鬆
オクターブ声が浮いてる受賞式
にわか雨もつれた愛へ降りしきる
やさ男湿気た煎餅かむように
春愁の微熱が過去を恋しがる

紀の川市 北山 絹子

親離れ子離れそれでいて平和
過労死へ無情の雨が降りしきる
メルヘンの世界で餅をつくうさぎ
土壇場で風に度胸を試される
客の来る予感花瓶にばらを挿す

紀の川市 辻内 次根

偶然があると信じて生きている
震災の恐怖の予感夜の闇
晴れてくる金子みすゞの詩集から
空を見て春の日差しで洗う顔
白い雲ばくが少年だった頃

田辺市 大峠 可動

風も初夏庭から庭の花に逢う
春雷はピカソの挽歌風を裂く
合掌の指駆け抜ける友の顔
我が性も神々のもの無に返す
神々よ二度と津波は下さるな

鳥取市 大前 安子

黒髪の時代もあった鏡撫で
川遊び魚の邪魔をしたことも
生きてこそ素朴な風が温かい
踏ん張ればまだ登れるぞ前の山
蜘蛛の尻一張りごとに風に揺れ

鳥取市 山口 千代子

短命を惜しまれ散って行く桜
老木も命の限り花咲かす
大阪で歳を忘れて若返り
保険証棄持ったか娘の迎え
長生きが幸か不幸か世の惨事

米子市 生田 寒之

諦めぬ奴には勝てない神仏
三代も続いて婿をとる果報
この歳になれば道楽身を助け
支援するためにどんちゃん騒ぎする
鎮魂のサイレンの下影長し

米子市 後藤 宏之

昔日のことが突然あふれ出し
悪口をわざと聞こえるように言い
普段から準備してあるほめ言葉
ぐるぐると回って内緒が本人に
一日で桜いくつもはしごする

米子市 後藤 美恵子

春の精やつと土から踊り出る
五分咲きが好きで早目の花見する
ひとり居の二度寝たのしむ春の床
アツブリケ虫喰い隠す花が咲く
マヨネーズ出し切る朝の爽快さ

米子市 田村 周子

米子市 山本 ふみ子

水仙が去年の不作とりかえし

震災のテレビ釘づけ不安感

孫たちの巣立ち迎えて梅が咲く

似合い難いつかくるだる幸せが

いいチャンス棒にふらずに掴みたい

米子市 中原 章子

震災にも天を恨まぬ言葉述べ

無責任想定外で後手になり

山椒がたけのこ来いと待っている

少しずつ心臓に毛が生えてきた

切り抜きの熟語覚えるのも日課

米子市 成田 公一

終楽章テンポゆったり願います

ほめ言葉なくて無言のまま過ぐす

アイドルが腕まくりして育児論

偶然を期待し今日も同じ道

親を見て親とは別の方に行く

米子市 見山 温子

植木鉢こわしたボール拾えない

手術の朝嫁がもたせる守り札

孤独より笑いの渦に入りこむ

別棟の秘密を孫が暴露する

焼き魚二人で一つ丁度いい

傷口を舐め合っている同病者

折れそうな心に副木して生きる

春風に浮かれさまよう桜土堤

気紛れに始めた趣味にのめり込む

トゲトゲの言葉丸めて呑み込んだ

米子市 湯浅 久司

諦めたつもりの未練持っている

相談はないが結果は聞いている

愚痴聞かす犬が散歩をよくねだる

修理代嵩む時計の形見分け

体力で乗り切ることはしたくない

鳥取県 飯野 菖子

叶うなら足腰鍛え白寿まで

襟卷きを外して春の陽をもらう

深呼吸吸春の息吹が聞こえます

刺をもつばらも一度は咲き匂う

卒業のない川柳に嵌まつてる

鳥取県 大塚 美代子

地を蹴ってくる鉄棒空を舞う

一杯の酒で友情取り戻す

御褒美をあてに手伝い申し出る

来年も歩くつもりの靴を買う

春だから少し派手目の服を着る

松江市 相見 柳歩

雲南市 武島 ちよえ

ひたすらに仏を目指し歩くだけ
奇跡です二本の脚で歩くこと

迫られて焦る草食系男子

被災地へ向けて努力の貯金箱

ボランティア仏に一步近づいた

松江市 福岡 左余

大空の身ぶるいはたん雪が舞う

地下足袋をはけばいきいき鎌が待ち

心して言ったつもりが突きささり

たて前が本気になって押し寄せる

相性はどうあれ闘志燃えさかり

松江市 山根 邦代

臍曲がり素直に聞けばいいものを

母の字を丸く書いてる七回忌

自然にはさからえぬとは言うものの

小さいがおつりを入れる義援箱

桜散る被災地思ふかのように

雲南市 菅田 かつ子

五分咲きの急に周りが姦しい

ふさふさと無いのに同じ散髪代

ジーパンを買ったがヒップ入らない

選別に外れた莓甘いこと

苦しさへ心ばかりの募金箱

テレビから白寿のパワー頂いた

福祉という温い囲いの中に居る

いちにちに何度言うやらありがとう

枯木にも花を咲かせた頃があり

決断がつかず仏に問うている

美作市 小林 妻子

米の飯感謝をせずに食べていた

墓だけを残して分家居なくなる

南も北も荒れて居所ない日本

あほな事言うている間に歳重ね

正解がないから続く川柳だ

広島市 岸本 清

震災に役目いとわぬボランティア

人の世と川の流れはわがままで

疲れたら嘘をつかない鏡見る

星見詰め宇宙の謎が深くなる

いい人を演じていると肩が凝る

竹原市 國實 力

お日柄もよし こくりこくりと法話

酒呑んで変わる素直な人だらう

鮮やかな言い訳ひとり悦に入る

お土産の上げ底知っていて不満

眼科歯科なぜ老人科つくらない

竹原市 若年幸子

キッチンもハミングはずむ春うらら

独り居の何時のまにやら爪が伸び

被災地へ議員の影が見当たらぬ

選挙戦程の熱意を被災地へ

峠越えその先の先期待する

竹原市 六田半徳

原発はまず安全の確認を

予想外ソウテイガイがこだまする

諸外国災害支援頼もしく

選抜の球児態度もいさぎ良い

さあ立とう力合わせて新日本

阿波市 三浦千津子

はっとけぬ質です直ぐに深入りし

風を切るようにはゆかぬベダル漕ぐ

客扱いせぬ持て成しが温かい

新商品セールへ少し試し買い

ハードルを軽く飛び越す五月晴れ

大洲市 花岡順子

春うらら右脳左脳も休みです

お喋りと言う充電がたまに要る

原発のシナリオ津波書いてない

原発の中でマグマが溢れ出す

脱サラを待つ両親の住む田舎

今治市 渡邊伊津志

断りの理由を探す人嫌い

ものさしで計れぬ程に受けた恩

美しささつちり決める黒い線

泣き処掴んで無理を承知させ

広い海船には船の航路あり

香南市 桑名孝雄

大和魂きつと復興してみせる

麦と兵隊ふるさと恋しかったらろ

近江路へお江探しに孫達と

かわらけが門をくぐった竹生島

急坂を孫に負けじと彦根城

福岡県 豊田愛

図書館も駅も近くて足向かず

外見は元氣中身はパーツ切れ

棘のある言葉を丸くして返す

ギブアップ重なる雑魚の生き上手

断捨離を言いつつ今に未練抱く

福岡県 本田さくら

桜満開津波震災知らぬげに

川柳を導いた師の太い眉

釣糸にかかるもんかと魚笑う

出勤時妻が糸屑さりげなく

三ヶ月エコー未来の孫をみる

唐津市 岩崎 實

古い二人どちらも共にヨイコラシヨ

山桜あかず眺めて春うらら

青天の窓辺花びら舞いながら

雑草に負けられぬとて草を抜く

放射能目には見えない魔ものだね

唐津市 北村 松風

ビール注ぐ秘訣は三分の泡の栓

昼の湯に年金の首浮んでる

土壇場になれば度胸は妻が上

食材の味がそのまま漁師鍋

あなたの分も長生きします手を合す

唐津市 吉富 節子

うす煙待つてましたと週刊誌

嘘ばれて泡をくつてる目が泳ぐ

横道にそれて人間太くなり

復興に強い絆の日が昇る

歳聞いて化粧セールス電話切る

山鹿市 三谷 たん吉

原発に通用しない想定外

技術者の恥すべき言葉想定外

掠奪はないが買いだめ大はやり

この国で誇れるものはなんなんだ

何ごともなかったような青い空

シドニー 坂上 のり子

原発のもろさ無気味な煙吐く

原爆に泣いた日本じゃなかったか

隠すから余計知りたくなる不安

ついにもう蓋してられぬ世界の目

ロボットよ何をしている出番だら

札幌市 佐藤 登美子

眠りから覚めて微笑むネコヤナギ

酔っ払い無口な父が堰を切る

朝帰りとはける夫へ灸を据え

惚けてみるだれが一番困るやら

昔むかし神話の里にいたカッパ

弘前市 稲見 則彦

吹く風も緩急つけて機嫌とる

クラス会友がすっかり老けて見え

一雨に踊るいのちのブランター

料理教室おしゃべりの味笑い添え

メタボ進行ゆるいズボンが丁度良い

塩竈市 木田 比呂朗

原発とオール電化を見比べる

津波などなかったように今日も晴れ

訓練はした筈だった危機管理

終わらない余震のような妻の愚痴

エビローグ塞翁が馬顔を出す

東京都 高岡 弥生

富山市 有澤 嘉晃

停電が教えてくれる月灯り

権力が停電区域照らして

子はサッカーある日突然親離れ

終わりになき子の心配は幸せか

ニッポンの昔生活出来たらな

昭島市 野口 忠

分校の桜ようやく目を覚ます

成績は二の次まずは丈夫な子

一浪は覚悟ピッチが上がるな

定年後クワと地下足袋様になり

野良へ出るときには外す腕時計

横浜市 川島 良子

一番にきてくれたのはキミでした

前向きに生きてる友は要介護

復興へ今わたくしにできること

被災地もサクラ吹雪が舞っている

節電でやっと人間らしく生き

佐渡市 高野 不二

忘れた名三日がかりで思い出す

年金が辛かった日を慰める

頑張れとテレビに話しかけている

停電の暮し気にしたまま眠る

旅行したよりもくわしくなった地理

卓抜の運命線を信じたい

停電にオール電化は役立たず

ブリ大根昔話を入れて煮る

景気判断うさぎの耳が垂れてくる

仕舞うのが得意の妻がよく探す

静岡市 渡辺 芳子

地球儀の小さな日本すごい国

義援金でハダカになって議員さん

津波力いとも小さき人間よ

全世界思いやり満つ地球

日本中笑顔になれる日待ちに待つ

豊橋市 藤田 千休

はんなりと所作も雅な京ことば

満腹の翻意うながす三の膳

饗応の皿に盛られた下心

蜜蜂とともに春追う花紀行

陽春を浴びたかろうに一番茶

八幡市 今井 万紗子

何となく虫が好かないだけのこと

耳底に亡母の十八番の数え唄

遺すものないがやっぱり書いておく

三月の日めくりのまま亡母のへや

相槌を打ったばかりに指を切る

京都市 清水英旺

雲水の顔も柔かな春の道

クリスマスローズ妻の丹精いま盛り

悔しさがつのる遺影のVサイン

被爆国が自ら被爆する皮肉

出来ること救済箱にワンコイン

大阪市 安藤 なつこ

花も見て下さいみんな元氣出そ

この国が大好きですと桜咲く

美しい自然おそろしい自然

便利さに馴れてしまった不自由さ

大地震後の円高がわからない

大阪市 太田 としお

母さんは大好きやけどよく怒る

母さんは僕の弱味を握ってる

子供等はすぐに母さん側につく

母さんは僕の心を読めるらし

母さんが居なくなったらどうしよう

大阪市 笠嶋 恵美

義理堅く友の画展に行く絆

タカラヅカ母娘ではまる夢の時

千年の歴史をさらう大津波

法然像にしゃべりたくなる笑いと愛

退屈を修行とするかお念仏

大阪市 高杉 力

震災は物指し変えるチャンスかも

あれも欲しこれも欲しいは止めました

思い切り性格出てるテニスです

若いねと褒められたのは素振りだけ

カラオケは営業時代の歌ばかり

大阪市 平井 露芳

蜜吸うて小鳥が先に花散らす

華道部も春はやっぱ桜です

ブレークのけんか大揺れ大津波

サブリメント氾濫してる長寿国

松島や続く二の句が出て来ない

大阪市 前川 善之

放射能花粉も飛ばす春の風

原子害世界の知恵を絞り出す

復興に世界が見てる日本力

満開の桜地震は知らぬ顔

ばけ予防語り合うのがよいらしい

大阪市 松田 聡

優しさが連鎖反応する被災

被災地を思えばさくら楽しめず

あたりまえが有難くなる空気水

震災で生かされている重さ知る

飛んでいる花粉見えそう日本晴

池田市 上山堅坊

河内長野市 谷

久美子

陽の匂い溜めた布団へ潜り込む
多数派へ手を挙げておく無関心
辞書なしになかなか書けぬ送り仮名
学校のしがらみずっと温かい
僕の秘密載せても売れぬ週刊誌

泉佐野市 稲葉 洋

豊漁も津波も同じ海の様
自然への畏怖に平伏す無力感
ヒーローはいらぬ数多の生が惜し
なに故に神は万余の命召す
心有らば桜よかの地なくさめよ

柏原市 森吉 留里恵

メルヘンの扉を開く朧月
近寄れば香りで罪を隠す薔薇
憧れた自由不自由連れて来る
幸せになりたくて転がる林檎
骨太の夢だ大事に花咲かそ

河内長野市 木見谷 孝代

頬伝う涙に幾度もらい泣き
越えられぬ母の眼差し気働き
割ばう着つけて料理に気が入る
リフォームの袖に温もり残ってる
就活の入社辞令を抱きしめる

過ぎ去ればあんなに青い海なのに
苦しみを越える明日はきつと来る
涙拭き明日を生きる子に涙
おばちゃんの気迫はワゴンセルの日
球児達気迫は春と夏の陣

河内長野市 針生 和代

車間距離あつて夫婦という絆
何という話は無いが春炬燵
熱々の茶粥を食べて出る元氣
隠し事何にもなくて無二の友
被災地に心からする応援歌

河内長野市 松岡 篤

平成の若者になんてキビ面
良く言えば丁寧だけど意味不明
スケジュール病院通い優先に
床屋さん眠らせまいと喋り出す
夫婦共血圧測る歳になり

岸和田市 増田 隆昭

被災地へ続々届く善意の輪
被災所の子等の笑顔にホッとする
下戸の友と別れてからの立呑み屋
母の化身か蝶がひらひら墓参り
咲き切って満足そうに散る桜

堺市 近藤 治子

勢いがほしくて助走しています

リハーサル無しでこの世の舞台踏む

信じてる言いつつ不安打ち消せず

口べたは父にもらったDNA

口数で娘の気持おしはかる

堺市 澤井 敏治

出演者だけの大口大笑い

檸檬には和服の君がよく似合う

道頓堀の雨にルージュの夢を見る

酒止める言うてあれから二百日

お兄ちゃんと言われ我慢の年子の子

堺市 羽田野 洋介

いいもんだたまにひとりで飲む酒も

もう今さらすることもないやせがまん

前向きと口で言うほど進まない

こつこつ分かれれば後はすすいと

一夜漬け後はよろしく神頼み

高槻市 初代 正彦

都合よく恍ける葉おまへんか

久しぶりネクタイ締めて若葉風

神様に悩みもそつと供えとく

来客を隣家もちゃんと知っている

狭くても心安らぐ家の風呂

高槻市 田中 由美子

余命表のコースに花が咲いている

マンネリの暮しに欲しい練りわざび

遠くてもスープは冷めぬ愛がある

うれしさに皿のプリンの揺れ止まぬ

溺れるほど物があるのに飢えている

豊中市 荒巻 夢

平凡の幸せ思い知る津波

春の香を撒き散らしつつくぎ煮焚く

オバアチャン言われて周りそつと見る

神様の御配慮だろう物忘れ

逝った子よバースディーにはスイトビー

豊中市 池田 純子

日常をなぜに大波持ち帰る

母に似た娘は頑固ちよつと抜け

喜びも悲しみも知り桜咲く

母と観たしだれ桜に逢いに来た

頬に散る桜は今を謳歌して

豊中市 源田 啓生

みちのくにそれでも伸びる路の臺

当り前それが貴重と思ひ知る

通じない電話関東遠い距離

涙目で見上げる空に花が舞う

頑張つてか細いけれど貧者の灯

富田林市 関 よしみ

ひと言の波紋広がる川おもて
狙われる淋しい人のホームページ
やりくりは下手だが家族仲が良い
置いてきた影が透明になった
前向きとスロークライフで生きてゆく

富田林市 山野 寿之

老人会古希はまだまだ青二才
転ぶたび小さな石を握ってる
紫陽花は涙の色を塗り変える
一言を括ると愛が見えてくる
曲がり角戸惑いばかり積んである

寝屋川市 岡本 勲

花も実も枯れた二人が手をつなぐ
逃げぬようケータイ持たせ放し飼いの喧嘩先手取っても妻に負け
はちばちと行こうと決めた我が余生
顔の皺ふえて変わらぬ少女趣味

寝屋川市 小谷 滋彦

夫婦とて波長の合わぬ時もあり
横臥して畳一帖おらが城
論されて己の殻を割って出る
マネキンも脱がせて春の衣替え
なに狂う母なる海よお静かに

羽曳野市 宇都宮 ちづる

笑顔しか想い出せない友が逝く
この桜花見ないで散った友惜しむ
幸せだ普段通りの朝が来た
被災地の子の笑顔から希望の灯
ブレイトの上で地震に備えてる

東大阪市 西田 いくひろ

造幣局の桜自慢の顔で咲く
一人旅すると気ままで出てしまう
子の笑顔見ると元気をもらう古希
隠し事するとそわそわしてしまう
ひと休みすると新たな知恵が湧く

箕面市 寺井 柳童

避難所に天使のように子の笑顔
初雪に新燃岳は悲を隠す
初雪に列が乱れる園児たち
投票へ気分壮快花の道
今年の字早くも決り想定外

八尾市 赤木 妙子

炊き上がる御飯平和だなと思う
父にねだった一度っきりの肩車
ボケ封じのお守りありがとうと受け
苦労した一つ一つが我が捻り
クスリ八種まるで私はモルモット

八尾市 山根 妙子

降るような星空里で身に浴びる

日の流れ速くなるのに歩がおくれ

早や秋の旅案内が届く春

抱っこひもお洒落なパパに似合ってる

半世紀文箱の底のプロマイド

大阪府 小栢 こずえ

陽が沈み家族揃って安堵する

ときめきを忘れないつか暮れていく

自分では言わないつもり同じ事

心配をかけぬ暮しも思いやり

介護するゆとり出来たら親は無く

神戸市 山根 弘子

好奇心作り話に引込まれ

ふる里の友の便りに春はじけ

雪だるま朝はキラキラ涙ぐみ

大物になれと背を押す春の風

母の手料理愛のひと味そえてある

尼崎市 小池 幸子

常識に温度差あつてよく採める

わがままに生きて余生の夢絞る

地震に津波予期せぬ事態原発も

二人で一人補いあつて共白髪

陽の恵み布団にもらう夜の温み

尼崎市 田原 一兆

茶柱が斜めになつて迷つてゐる

やじろ兵衛が羨ましくなる倦怠期

栄枯盛衰桜はいつも潔い

何でもないそれ聞きたくて癌検査

夢だけは何は無くても持つてたい

加東市 安達 厚

ぬくい日に土筆を摘んで春食べる

いい出会いそれを支えに生きてきた

異常より順調ですは物忘れ

畦道で農の前途を話しあい

おりおりの小鳥と語る野菜畑

加東市 岩本 美緒子

地震津波さらに原発世が縮む

曰く医師書画の人みな長生きす

気前よくお節介屋の娘は長女

弥生卯月花鳥の画帖一つ成す

身近な花今年も八十坂写生する

加東市 黒崎 美紗子

年忘れカラオケ歌う腰ものび

カラオケのリズムにのつて小半日

苗物を植える計画土準備

挨拶の通学生の元気よい

よい音で飛ぶマトはずれゴルフ球

篠山市 酒井 真由

鬱々と瓦礫の街に雪が舞う

いまさらにいのちの重さ天よ地よ

人に希望を人に力を焚火の輪

神を畏怖せよと原子炉自爆せり

方舟はあった少年と祖母に

三田市 尾崎 一子

こぼれたら拾ってくれる小さな手

紙と筆いつもボツケの中にある

ばあちゃんの手をひく背中押す家族

復興へ希望のあかり桜咲く

避難所の無邪気な笑顔いじらしい

三田市 雑賀 一泉

ネット社会追いつめられる独裁者

携帯に押し出し食らう相撲取

如何せん今さら好きと言われても

この電気原発からか子に聞かれ

アルバムを繰れば我が家の揃いぶみ

宝塚市 丸山 孔一

食べ放題飲み放題に眼を逸らす

体脂肪量れる体重計を買う

眼も耳もアバウトとなり春朧

ひたすらに穴を掘ってはみたものの

思い出は春の小川の猫柳

奈良市 大久保 真澄

核持たぬ国の原子炉核と化す

厄介な人に厄介がられてる

不夜城のような巷でエコ談義

ブランドをまといつて野菜値切らはる

還暦を過ぎても残る青臭さ

奈良市 尾畑 なを江

思い出はすべて頭に詰めておく

涸れてたと思つた涙あふれ出た

回想が得意技です一人ぼち

立ち止まる勇気があればやりなおす

悔い重ね歩いた道の曲がりよう

奈良市 矢野 良一

お馴染は路地の外れの小さい店

言わぬとも心伝わる眼の温み

やはり歳下りが怖い坂の道

春時雨傘差し掛けて友が出来

春陽気外へ連れてと万歩計

奈良県 谷川 憲

M9が豊かな国を吹っ飛ばし

原発の見えぬ恐怖にただ祈る

原発に想定外という未熟

ゴミ出しの日をよく知っているカラス

老いた街介護の車鉢合わせ

(憲司改め)

鳥取市 近藤 秋星

原発事故いつ果てるやらめど立たぬ
インフルがたちまちホーム席捲し
震災孤児何と哀しい身の上ぞ
食事しながら花見が出来るわが苑は

鳥取市 坂本 とも湖

復興へ政府のリード生ぬるい
独り居の恵比須顔して凜と立つ
春闘のスタート切った花粉症
春の風老母へ寄り添う温かさ

鳥取市 山岡 紀子

ナースコール押せば笑顔がとんでくる
笑顔っていいなあ病い忘れさせ
とっときの笑顔おんなの打算なり
復興へ若い力が立ち上がる

倉吉市 倉繁 泰輔

五十年前に出合つて傘寿来る
禁煙を誓うが酒はそのままに
目標の平均寿命すでに越え
想像を絶する津波ただ啞然

倉吉市 藤井 美津恵

日足伸び散歩も遠く足運ぶ
暖かいぬくもり感じ虫も出る
春めいて日増しに草も伸びのびと
雨降りは咲いた花まで下を向く

倉吉市 前田 喜美子

原発事故計りしれない国の傷
放射線作物すべて廃棄させ
衣食住足りても動く欲の虫
足る程に手足の爪がよく伸びる

境港市 中井 虎尾

停電でオール電化の悲劇知る
あの人に酒が言わせる政治論
党マーク示す民主は二つの陽
命がけ見えない敵の放射能

米子市 小塩 智加恵

親孝行する子が育つ子沢山
東北の海辺ごつそり地獄絵図
我慢強い大和魂見せどころ
脳少しゆるんできても酒を飲む

米子市 加藤 正二

恐れない平均寿命越えたから
ストレッチピンピンコロリ夢つなく
前向きに余生楽しく生きてやる
千年の恵まれた世に落し穴

米子市 野川 宣子

分け合った水が絆を強くする
湧き水と暮らした村が消えている
一本気が憎まれ役を買って出る
いいニュース適にあるから生きられる

鳥取県 岡村孝明

予想外津波に神も呆然と
空高く飛んでくれよとトキ放つ
未知の道ミスを恐れずつき進む
眼帯とれ淡い光に感謝する

鳥取県 加賀田志延

変身のチャンスをくれる誤変換
託老し一息ついた友来たる
バリアフリーしても二階は下りてこぬ
危機管理バリアフリーに鈍くなる

鳥取県 下田茂登子

山間の春いつ来ることか今日も雪
孤独とは自問自答で日を送る
男盛りの息子は独り暮らしする
トラブルの相手は箸棒かからない

鳥取県 田口清帆

老いてなお嫁のリードに逆らえず
八十の杖に届いた校便
東北の地震被害甚大崖つぶち
知事県議選挙ブームわく握手

鳥取県 橋谷静江

畑仕事歳に似合つた事をする
今日の事忘れ明日へ元気だす
手を合わせ遠くにいても孫のこと
孫からのメール私を熱くする

鳥取県 吉野いさお

割勘で損を知らない二段腹
玄関に覚えの悪い犬が居る
息拔きの加減を学ぶ老いの坂
生き過ぎて香典代で損をする

松江市 岡本幸枝

疲れてるだろう軒がいとおいしい
大役を終えて老化がしのび寄る
あくびして熊も冬眠から覚める
ママにかせ移してランドセル走る

松江市 錦織禮子

行く末を見守るしかないレベル七
ぬくぬくの衣食住レベルを下げる
青空と桜早乙女神事に出合う
宍道湖も真つ黒になる大嵐

松江市 松浦登志子

笑顔から始まるんだよ何時だって
無造作に植えた球根咲き誇る
一人では長い道でも二人では
寒い日と灯油の残り気にかかる

雲南市 福岡博利

冬眠のできる蛙のうらやまし
上向いて歩けがどうも身につかず
孫二人原発おそれ逃げてきた
生きて居て津波のこわさ身にしみる

安来市 原 煩惱児

山鹿市 米加田 恭代

故郷の山に登るところ満つ
たつぷりと摘んだ野草孫にとて
雪を観て花見とは洒落にもならず
地震災害無くて出雲は神の国

竹原市 土井 輝恵

メルボルン 藤原 ポン吉

貉です一家五人に修羅もある
玄関の鏡が鬼門なある程
情厚く断捨離なんて出来ません
捨てられた球根空を目指すなり

宇部市 高山 清子

弘前市 高橋 洋子

条件が良すぎてはまる落し穴
男らしく育てたつもり恐妻家
雨降れど地固まらぬと嘆く友
聞える振り時々してはする介護

四国中央市 篠原 久

福島県 七ツ森 客山

さくら風通して部屋を春にする
独り居の雨戸を叩くやまじ風
まだ青い石段転げ落ちた毯
合鍵をきっぱり返し恋終る

北九州市 小松 紀子

東京都 井上 つよし

微力でも東日本を支えたい
ホーホケキョホケキョただ今練習中
女五人自分の葬儀で盛り上がる
お土産です向こう三軒おすそ分け

復興を見守って欲しい戦中派
暗やみが孤独と不安連れてくる
避難所へ気力体力届けたい
リーダーのいない国民不安です
初めから汚染されてた原子力
震災の塵もはらえぬ首相の手
安全を計る物差し紛いもの
まず笑い歌い声かけ春を呼ぶ
水仙の花の角度で子を論し
嫁にゆく父によく似た人の許
小耳にはさむ噂話は当たるもの
胸底の修羅は畳んで空元気
味噌汁のしみた座卓に通される
美辞麗句ウンと知ってて綺麗です
おしっこがたまって話それっきり
老朽の家が地震をかいぐる
しめやかに花見楽しむ上野山
原発の安全神話騒気楼
ハイテクの小細工嗤う大鯨
長電話言い忘れありまた電話

日野市 大竹 一 良

寒くとも心とまる被災びと

天災に心あつまる温かさ

病院の放射線量知った今

長年の刺が抜けたか老いの道

横浜市 巖 田 かず枝

被災地に何か出来ぬか探す日々

被災地のお腹も胸も満たしたい

天災とだれも責めずに祈るのみ

日本から世界の皆にありがとう

大山市 奥 村 百合江

たくさん強い余震に気が萎える

例外なく老化現象遠慮せず

歯列よりせめて守るよ自分の歯

自衛隊消防警察見直した

江南市 脇 田 雅 美

後ろから見て女性かと思つてた

病床に免許証切れ悔しがる

遮断機の降りる予告にひと休み

振り向けば真直ぐの道笑つてる

大阪市 浅 井 公 平

今年また老いも楽しむ春の酒

年老いた夫婦といえど行きちがい

句作りにあるきあるいて何もなし

顔一つ売ったおかげで今がある

大阪市 小林 杖 香

一病に救われて今ここに在る

いかなごを炊きつ思ひは瀬戸の海

ばちばちと土筆顔出し水温む

はじらいとしたたかさあるいい女

大阪市 吉 川 弘 泰

女子会のビール重ねてうさばらし

フルムーン新幹線で桜島

露天風呂うらやましげに流れ星

時雨来て路傍の仏笑みこぼし

大阪市 吉 田 知 之

補聴器の取扱いにひと苦勞

忘れても知らん顔する年の功

追悼文思い乱れてまとまらず

行きずりに子供がくれる笑み嬉し

泉大津市 助 川 和 美

まっててや死ぬ時言うで愛してる

黒田節さすが部長と新社員

洋服を脱ぎ捨て夫パジャマ党

この人の名なんだったつつけ老い二人

河内長野市 内 海 綾 乃

自衛隊が救助の手助け有難い

電気水は命に続いて大事です

むつかしいね誰でも出来る思いやり

戦争思う人体に害放射線

宅配で届く中味は母の愛

河内長野市 木太久 正一

タンポポの黄色あちこち自己主張

わが庭に島根の牡丹元氣よし

愛犬に慰められる老夫婦

河内長野市 黒岩 靖博

瓦礫から老女救った自衛隊

大津波根こそぎ取ってゴミの山

青春の味はレモンにてんこもり

かあさんに白旗あげて許し乞う

河内長野市 辻村 ヒロ

青春の歌なら今も得意です

父はまだ四角いままに生きている

あの人に伝えてほしい花言葉

恋心口紅の色変えてみる

河内長野市 八木 加修子

かたづけぬ事の多さに焦り出す

心配を愚痴でごまかしレモン切る

婚活中かぐやの姫も臺が立つ

節電は暮らし昔にもどすだけ

河内長野市 山本 エミ

両肩を叩く人居る飲み仲間

立ち読みを睨むハタキが寄って来る

お日様に家族を並べ干す蒲団

春ですよ冷凍室の鏡餅

ママの口けずり取りたい反抗期

岸和田市 中岡 香代

生活にピンとキリあり無限大

手ごわいと努力をせずに諦める

隅っこではこりが積もる招き猫

豊中市 石橋 優明

黒髪や桜はらりと吐息つく

車内放送今朝の声には憂いあり

原子炉に成仏せよとただ祈る

あきつしまただ鎮まれと手を合わせる

羽曳野市 磯本 洋一

三人の入学揃い火の車

花便り三寒四温役目終え

就活を終えた親子がコップ酒

車椅子花の便りに頬ゆるむ

羽曳野市 安本 美喜

戦場より酷いと叫ぶ救助隊

もの言わぬ草木こころ添えてみる

卒業証書家で受け取る寂しさよ

知事さんは秀吉みたいになつてきた

阪南市 坂口 公子

スイートピー心の中をやんわりと

物みんな宝でちよつと片付かぬ

蟄居する身へ助け舟娘が二人

何時の間にか衣更えする春の山

枚方市 小川 良吉

震災で聖徳の和が今も生き

震災も北国の春癒される

震災で枝野氏ひとり汗かいて

震災と朝ドラ重ね泣けてくる

枚方市 河田 洋子

ブランド品自分に買って誕生日

夢だけは持ち続けたい老いの意地

腕よりもクラブのせいと五打を打ち

赤札に弱い自分に喝いれる

枚方市 坂本 ミヨノ

バイトして札の重みを流す汗

店新装美人ガールで花盛り

山里が干えびのよう桜咲く

乱れ咲く句の札下がる通り抜け

八尾市 田邊 浩三

ポイ捨てをじっと見詰める子の瞳

大トラも山の神には尻尾巻く

花粉舞うマスコゴール宇宙人

独り言言って頼った引つ叩く

八尾市 前田 紀雄

演じるは易し成り切るのは難し

震災に選挙花見も控え目に

古希過ぎて想定外に身が縮む

頑張ろうオールジャパンで国難に

大阪府 高木 道子

陸奥をドミノ倒しにした津波

ひっそりと寺道椿吹き溜まり

黄泉路へと老犬ゆっくりかくれんぼ

神々に試されている力瘤

大阪府 中井 記久乃

そよ風と桜と供に散歩する

北国の春は遠いがきつと来る

山彦も聞こえぬ里も水清く

八重桜次は私とスタンバイ

大阪府 西川 冷子

極寒に草も怖じけて芽が遅い

災害地ガレキと化した貴重品

散歩道大型犬に道ゆずる

足湯して世間話に花が咲く

大阪府 畑 中節子

くすりより介護の言葉効を見せ

入浴剤入れてわくわく旅気分

野菜畑土の味見は欠かせない

春風にパンジーの群れよく喋る

大阪府 若月 祐作

新聞にやたらちらしが折り込まれ

重箱の隅に本音が溜ってる

天災の後を追っかけ放射能

最年長今年も乾盃音頭とる（八十八老）

神戸市 玄 番 美恵子

美酒に酔い秘めてたべール脱げてゆく
這い這いの迷いはなくて母の膝
みちのくに春待つ風はすぐそこに
天災になすすべもなく天仰ぐ

神戸市 輿 水 弘

亡き妻と走る孫の背押している
渡らずに悔やんだ虹の橋がある
チヨコくれた妻の本気度値踏みする
噛むほどに玄米の味懐かしい

神戸市 白 川 淑 子

好奇心満たす出費が止まらない
職退いて二度寝の至福トドになる
紀伊国屋前待ち合わせした友は逝く
歩いたよ写メール届く至福時

尼崎市 市 坪 武 臣

惨すぎる地震に津波原発も
ウィットに富んだ御方の話し振り
年金で面目保つ義理と情
記念日をすっかり忘れ済まない気

川西市 日野岡 和 之

東北の桜誰がため咲いて散る
角がとれ丸くなります古希の坂
誤字脱字多いが優し母の文
くじけないこん気にげん気のもん

篠山市 石 田 久 子

優しさを一パイ抱いて嫁に行き
想い出す浴衣でオシメ作った日
子の夢へそっと背中を押してやる
飲みこんだ言葉を流す仕舞風呂

篠山市 沢 山 啓 子

手を握る久方振りの他人の手
明日死ぬと知れば逢いたい人ひとり
抱いている五臓六腑は神のもの
ふつつつと不如意飲み込むドクダミ茶

篠山市 谷 田 多 美 子

波に消えた人の涙よ花吹雪
川向う桜の土手に笑い声
春休み曾孫来るのを待つ歳に
終焉は子に見守られありがとう

篠山市 永 井 か ほ る

草餅に作っておくれよもぎ出る
抱いた息子教えられたり叱られる
チリ紙も宝の様な戦事中
広告の白い裏面メモ帳に

篠山市 藤 井 美 智 子

老い生きるプラス思考を明日も抱く
まだいけるロマンさがして老いの旅
祈る無事朝のおつとめ欠かさない
肉筆の手紙はどこか温かい

お願い

川柳塔への投句（川柳塔・水煙抄・愛染帖・一路集・檸檬抄・初歩教室）は、毎月15日必着で締切っています。土、日、祭日は前倒しになります。

老境にあの手この手の防衛策人間に見えぬ自然の裏部分健気にも悲しみ隠す被災の子五七五指折り防ぐ認知症

橋本市 石田 隆彦

ちりも積もればの思いで義援金生きてれば何とかなると上を向く悲しみに情けを寄せてボランティア耐える被災地に情けの雨あられ

西宮市 株元 玲子

逃げ足を鍛える海が近いから申告書ムダな抵抗して帰る寝相にも性格が出るいやだなあ殺し文句酒の勢い借りている

西宮市 泉水 牙子

万歩計雨が降ってるひと休み買物を少し減らしてする支援万歩計少し足りぬと足踏みす灯油買う最後最後と運ぶ足

三田市 辻 開子

竹原川柳会 創立55周年記念川柳大会

日時 8月28日（日）9時30分開場
会場 ホテル 大広苑（TEL.0846-22-2970）
（JR呉線 竹原駅下車 徒歩15分）

事前投句（欠席投句可）各題2句

投句締切日 7月31日

「母塔」 森中 恵美子 選
「塔酒」 河内 天笑 選
「酒」 小島 蘭 幸 選

投句料 千円 作品発表誌呈

専用又はB5紙に6句連記

投句先 〒725-0022 竹原市本町3-3-7

古田比呂子 宛て TEL 0846-22-4010

当日出句（欠席投句拝辞）各題2句 11時30分締切

「紙光」 三角 浦 宏 選
「石小」 本 華 峰 選
「花野」 真 備 雄 選
「海弘」 津 秋 の 選
「西出」 楓 楽 選

会費 2,000円（昼食・発表誌呈）

お問い合わせ 小島 蘭幸 TEL 0846-22-6626

〒725-0022 竹原市本町1-14-3

宿泊日は7月31日迄に連絡下さ（温泉有り）

主催 竹原川柳会

川柳塔

（つづき）

友からの便りクセ字ですぐ解る
赤ちゃんのうた あずさみちよ
前奏のひびくドラの音出羽三山
月々の訪看さんに手を合せ

（前月分）島根県 持田 多輝子

麻生路郎句抄

(句集『旅人とその後の作品』から)

不死鳥

前書きのある句

筑川・布施博士医学施設として訪独

往診にしてはナチスの遥なる

洗塵・石崎博士北市民病院長に榮転

喜びの電話院長室へ継ぎ

近衛公に大命降下

おもむろに笏でまねいた組閣なり

第二次内閣誕生

近衛さん背負ひ直した重さ也

村田省蔵氏の鉄・通大臣に就任を祝して

その船出けむりも見えず雲もなし

村田さん大きな銅鑼を聞く日なり

小林一三氏商相就任

引継ぎの少し会社が大き過ぎ

風見章氏に贈る

頼むよと司法大臣磊落だ

西園寺公を悼む

折も折大番頭に亡くなられ

園公のことよ興津の鯛の鯛

丹路居

新築へもうスリッパは春の音

在外の同胞に

箸の国刺身の国を忘るるな

越舟大人を悼む

三七日へああ松風の音すなり

芳一氏逝く

官舎の灯今はむなしくまたたくか

日の御子御降誕にあやかりて

伏屋にも一月廿日男の子

勅題

寝転ぶ癖の僕に海上雲遠し

北みきを君応召

君も征くか足もとから鳥が立つように

愛子を喪へる高尾兄に

君の子が書けば羅馬字砂手本

片山首相に捧ぐ

さあ動きますと片山運転手

淀通信病院薬局長に榮転の没食子君に

又飲みにくくよと君を送るなり

生々庵母堂を偲ぶ

一周忌雲をとうしてなつかしむ

『麻生路郎読本』

—ふたりの風色—

淡路放生
あわじほうせい

頁をめくっていると、たまたま須崎豆秋の『河豚の毒素』という短文が目についた。これが嬉しい。要約すると、

——友達と千日前でフグを食べていたところ急に胸が悪くなる。毒にやられた。と早合点した彼は、何がなんでも路郎先生だけには今生の訣れをと、木枯しの吹きすさぶ夜の十三間道路を駆けまろびつ、ヘドを吐きながら玉出のお宅にかけつける。

「何じやい豆秋青い顔して」

実はしかじかとわけをいう。「一杯やれ癒るわ」と笑う師のことばに、末期の水のつもりで呑んだのだが、何の変哲もなく命に別条なかった——と。

これだけの中に、二人の人物のようなものと、師弟のよろしさが簡潔に語られている。そして何より、へ院長があかん言うてる独逸語で、の豆秋の句に通じるおかしさがある。

人物といえば、この本の中で二、三の人が麻生路郎の性格にふれている。が大同小異、ここは河野春三のみを抜粋しておこう。

——人は彼を狷介で、人を容れない頑固で偏狭な性格の持ち主であるという。それゆえ有為の青年が彼に近づいても、すぐに反発して背いてゆくことを繰り返しているという。——略——しかし、まこと片意地でいい出したら損得を考えずに青筋を立てる彼ではあるが、心の底は常に孤独であり、常に友情や愛情に飢えていた人間であった。

(詩性と大衆の中で P 358)

と書かれるような人が、川柳と川柳界のために、自分の生涯を賭けたのである。そう思つて、口絵やアルバムの写真をよく見ると、辛くなるほど、不愛想でしかめつらの顔が多い。自分にさえも妥協しないという頑固が、肩肘はつた容貌にすけている。

その中で、表紙に見るセピア色の写真だけは別人のようだ。憂いをふくんだまなざしに、力のぬけた素のやさしさがある。ぐつと結んだ口元はふくらみがでて、若いころの尖った線が消え、内面の自己を放つて風格をかもしだしているように見える。

川柳、川柳、とひた走つて、家族やまわりを顧みなかつ

た男の顔に隠されていたものが、やっと表にあらわれたと見てもよいだろう。

そして川柳だが、これは巧い。何んでもござれである。薪割り名人がスパスバ薪を割ったように、これが川柳だという山をききしている。がそこに喉にひっかつた小骨のようなものが残らないでもない。麻生路郎のような大家にこれが川柳だという芸達者な巧い句を求めているないからである。

凡聖一如元旦のころ知る
古くとも僕には仁義禮智信

六十一まだ情熱は燃えに燃え

これらの句を、先の河野春三は同じ文章の中で、——路郎自身も佳句と信じて色紙にも染筆し、門下生も「路郎先生の傑作」としてあげている句、——としながらも、ねんごろな理由とともに否定している。いやそうであろう。花道で六方を踏んでいる派手さはあるが、内容は浅いと思われる。

寝ころべば畳一帖ふさぐのみ

さらに、この人口に膾炙して位を得ている句も、へ起きて半畳寝て一畳天下取つても二合半〜というような俗謡があつてみれば残念というほかはない。

はくが求めている川柳は、向う受けのする、ことばがひとり走っているようなものではない。むしろ、それとは反

対の位置にあつて、平凡に生きる人間が朝夕の暮しの中で吐く、つぶやきがそのまま句になつたような理屈のない作品。地味でも懐しさを感じさせてくれるものを評価したい。たとえば、

燈下管制そこへ大きな月がでた

この句などはどうであろう。はくが麻生路郎の名前をはじめて知つたときの作品である。以後四十数年たつが、これほど人間の愚かさ、自然の大きさを詠んだ月にであつたことがない。思いが作為を押えて見事である。美や真実は、構えたことばや冗舌からは生まれまいということであろう。

俺に似よ俺に似るなと子を思ひ

この句も人に知られた作品である。へ思ひの一言によつて、自負と屈折する性癖を、わが子への愛につつまこんで切ない。だが先の句にくらべると、どこかに大上段にふりかぶつた氣負いが見えかくれるのは否めない。

浴槽へずり立つたは皆わが子 霞 乃

これは路郎夫人の作品である。なんとも欲のない鈍くさい句である。しかし、鈍ではあるが、このあつけらかんとしためでたさがいい。この手ばなしぶりにほれほれすることばに肉体があり生きている。夫婦が同じ子供を詠んでも目線の異なるのは当然だが、やはり性格の違いがここに

ある。

ところで、葎乃という女性はどうな人だったのだろうか。彼女自身が、自分を語っているところがある。

——人間嫌いの私が客に接することの難しさは川柳家の誰もが知っていられる筈。店をあげる前は、何杯かの洋酒をあふってからにします。

——私は昔から四方からのサービスずくめで育ってきたので路郎はそれのため直すために苦労したことでしょう。

——「どうしてあんなにのんびりした気持になれるのだろうか」と思ったのが路郎が私に対する興味の第一歩でありました。

(麻生路郎物語18—キング喫茶店— P 281 282)

これは東野大八の文章に出てくる葎乃の手紙の中の一節だが、この人は喜怒哀楽の少ない内向的な女性のようなのだ。

酒とろりとろり大空のころかも

酔眼朦朧の路郎の句に李白の詩を贈ろう。

山中にて幽人と対酌して 吉川幸次郎 訳

兩人 対酌すれば山花開く

一杯一杯又一杯

我は酔うて眠らんと欲す君は且く去れ

明朝 意有らば 琴を抱いて来たれ

うどん屋の酒は足から醒めそうな 葎乃

路郎の句にこの句を付けてみた。とろりとろりの酔いが

醒めれば、うどん屋だったという趣向である。ここでもばくは葎乃の感性に驚く。誰かほかに、うどん屋の酒からこんな素晴らしい詩を詠んだ人がいたのだろうか。蛇足ながら、醒めそうなが醒めてくるならどうだろう。ここが天性の詩人と凡人の違いである。ところで酒ならほかに、飲んでほし やめても欲しい酒をつぎ 葎乃

という知られた句があるが、この句を付けなかったのは、へ飲んでほし プラスへやめても欲しい イコールへ酒をつぎの計算と情にからだところがイヤだったからである。

福寿草松にしたがいそろかしこ 葎乃

ここでは、無口で人嫌いの葎乃がデンと座っている。句は、ただ称名すればよい。

敷かれてやるひまもなかりしに金婚か

と置いてみる。へ金婚かの語感が、へ福寿草の句ともども、へ高砂やの祝言能にひろがって、まためでたい。句は、亭主関白の路郎が、ありったけの思いをこめて、自問自答しているのである。このいいわけめいたところにはにかみがあっている。

金婚といえは、昭和38年の秋ごろから、路郎の喜寿と合せての祝賀行事が盛大に行われる計画がたてられていたが、翌年春になって健康を理由に本人が辞退している。

このころの写真がアルバムに収められている。その裏に

メモが書かれていた。

——一九六二年七月十日／七十四回誕生日記念／自祝
乾杯自宅にて／麻生路郎／ご馳走はいただきました／大鯛
を中心に／有難うございました／生々庵さま／小石奥さま
——。浴衣にくつろぐ路郎と葭乃が、料理を前に向いあつて酒杯をあげている。目を伏せている路郎が、見ようによれば淋しそうな、或はホツとしているようにも見える。

麻生路郎は川柳の鬼であつた。

川柳という大事を前に、頑として節を曲げぬ生きざまは、多くの敵を作り、壮絶な闘いがあつた。

家庭にあつては夫婦の間に九人の子供をもうけ四人の子をつぎつぎに失っている。葭乃をして、「こども地獄」といわしめる暮らしの中で、彼女もまた、多くの川柳人と交り、出入りする門下生の世話をする毎日であれば、身体の休まることがない日常であつたことだろう。

そして路郎は、ありあまる才智の前に幾多の職を得ては捨て、ついには、「川柳職業人宣言」を公おひやけにするのである。そこに経済的な裏づけが、あつたかなかつたか、想像するだに恐いものがある。背水の陣をしいたのである。

ここに、

君見たまえ波菰草が伸びてゐる

と置く。もう声を荒げることはない。俗事を超越して句が立っているのではないか。

昭和四十年七月七日、麻生路郎逝く、享年七十七歳。
辞世の句がある。

しがみつくほどのこの世でなかりけり
臨終が冬ならゝいるは“おくりで逝かんかな
雲の峯という手もありさらばさらばです

淡路放生プロフィール

- 昭和17年 香川県生
〳 47〳 (番傘) 本社同人
〳 50〳 (川柳展望) 創刊参加会員
平成3〳 (槐) 俳誌創刊同人参加
〳 5〳 第3回(槐賞) 受賞の後、無鑑査同人
〳 10〳 四国歩き遍路 第一回目42日
〳 11〳 第二回目38日
遍路の地縁を得て高知県十和村に農家を借り晴耕
雨読。その間(柚子庵句会)を起ち上げ、村の人
たちと共に愉しむこと一年二ヶ月
昭和50〳 朝日新聞香川版(香川柳壇)新設選者
平成15〳 産経新聞香川版(産経川柳)選者
〳 16〳 香川県農協広報紙キラリ(JA川柳倶楽部)選者
〳 〳 多度津町広報紙(多度津川柳)選者
〳 23〳 等を経て現在、無所属
句集に〔淡路放生川柳集〕俳句集〔眞魚〕

共選欄

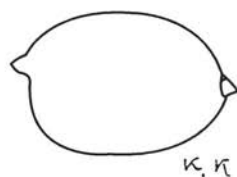
檸檬

檬

抄

(薰風書、カットとも)

(投句 七三〇句)



「時代」 三宅保州選

原発の時代と言った人黙る
原子力の時代に炭を焼いている
千年に一度の時代生きている
千年に一度のなえにあう時代
災害のない幸せが今ほしい
九条を守り通してきた時代
反戦の歌は時代を超えびびく
すいとんが粋なメニユーになる時代
若者の時代断捨離駆使をする
断捨離の時代に映すゴミ屋敷
渡り鳥マスクをつけてやって来る
混沌の時代マスクが欠かせない
文明の時代に鬼が跋扈する
若者の罪も時代の所為にする
さわやかな青空 孤独死が続く

三田市	北野	哲男
西予市	黒田	茂代
鳥取県	斉尾	くにこ
和泉市	横山	捷也
篠山市	永井	かほる
神戸市	伊勢田	毅
大阪市	岩崎	公誠
芦屋市	竹山	千賀子
大阪府	桑田	ゆきの
寝屋川市	平松	かすみ
弘前市	今	愁女
鳥取県	細田	裕花
豊中市	水野	黒兎
唐津市	仁部	四郎
弘前市	高瀬	霜石

「時代」 山本希久子選

地デジ地デジ時代の波が押し寄せる
ケイタイを持たず時代の外にいる
心を取り戻す節約の時代
変わらねば未知の時代が追ってくる
地球儀も大きな穴があく時代
駆け抜ける時代 踏くことはかり
ああ平成父と言う影薄くなる
モノクロの時代は家でした葬儀
若者の罪も時代の所為にする
激動の昭和を生きたど根性
苦労重ねた明治生まれに芯がある
時代かな耳に馴染んだ家族葬
原爆と竹槍喧嘩した時代
高下駄の青春時代よく転び
古希近く今はなると花の時

鳥取市	永原	昌鼓
堺市	近藤	治子
八王子市	播本	充子
松江市	三島	淞丘
大阪市	榎本	日の出
吹田市	須磨	活恵
鳥取市	吉田	弘子
京都市	榎本	宏子
唐津市	仁部	四郎
東大阪市	佐々木	満作
高知市	小川	てるみ
鳥取市	岸本	孝子
池田市	上山	堅坊
鳥取市	夏目	一粋
豊中市	松尾	美智代

世の中がどう変わろうと桜咲く
 ジョークジョーク少し遅れて父笑う
 スカートの丈に時代を教えられ
 よく似合う時代遅れのワンピース
 十年もしまっておくとまた流行る
 流行を追った時代は若かった
 男性も育児休暇という時代
 イクメンが持てはやされるのも時代
 時代物で値打ちはゼロと言う家宝
 世界遺産はつと時代の風に逢う
 デジタルの時代を覗く鼻眼鏡
 眼鏡買う先の時代を読むために
 下膨れ持った時代に居たかった
 ふくよかな飛鳥美人に和まされ
 アンティークと横文字で売る時代の
 時代劇の殿と総理を見比べる
 時代劇映画で生きる流れ橋
 時代劇のある日は早く戸をしめる
 般若の土俵の鬼が撒飛ばす
 仁王さまいつからそこに立たれしや
 時代越えまだ六曜に縛られる
 時代だとあきらめている戦中派
 時々時代は時代のせいにして生きる

大和高田市	鍛原 千里
札幌市	小沢 淳
堺市	柿花 和夫
高槻市	安田 忠子
篠山市	沢山 啓子
高知市	小川てるみ
愛知県	早川 遡行
鳥取市	福西 茶子
西宮市	亀岡 哲子
鳥取市	中村 金祥
松江市	三島 淞丘
枚方市	伊達 都夫
大阪市	坂 裕之
堺市	源田八千代
米子市	後藤美恵子
大阪市	神夏磯典子
寝屋川市	岡本 勲
鳥取県	佐伯 やえ
生駒市	飛水ふりこ
西宮市	山本 義子
鳥取県	吉野いさお
鳥取市	田村 邦昭
寝屋川市	籠島 恵子

掘り出した壺は時代の貌をして
 便利さと恐ろしが同居する時代
 これからの時代を子等どう生きる
 運の悪いことは時代のせいにする
 2011目に見えぬ敵やつて来る
 いつの時代もお金があるの言うのです
 九十年どの時代にも友が居た
 ようもまあ時代時代のカンニング
 時代の故だろうか心病んでいる
 吹き荒れる時代の風を身にまとう
 キッチンで時代おくれの豆を煎る
 卵焼き贅沢だった時代
 宇宙まで行ける時代に大津波
 昭和平成どう語られる百年後
 縄文の時代にもどり素で生きる
 忍と情習った古き良き時代
 戦時中の暗さ思えば堪えられる
 男性も育児休暇という時代
 ネット時代から漏れていく高齢者
 風呂敷包み解けば時代の風匂う
 孝行は時代錯誤と子らが言う
 豊かさを求め過ぎたを知る時代
 同じ時代を生きて同じに笑いあう

神戸市	山口 光久
箕面市	出口セツ子
西宮市	亀岡 哲子
橿原市	安土 理恵
弘前市	高瀬 霜石
鳥取市	倉益 一瑤
西宮市	秋元 てる
西宮市	緒方美津子
松江市	松本 文子
岩出市	藤原ほのか
堺市	志田 千代
田辺市	岡本 昇
吹田市	木下 敏子
河内長野市	村上 直樹
西宮市	山本 義子
大阪市	板東 倫子
東かがわ市	清川 玲子
愛知県	早川 遡行
高槻市	片山かずお
大阪府	米澤 俣子
福島県	七ツ森客山
シドニー	坂上のり子
芦屋市	黒田 能子

運の悪いことは時代のせいにする
 そんな時代もあったねとなる歴史
 君に会い君に恋したい時代
 昭和にはやっぱり戻りたくはない
 国破れ国が栄えてきた昭和
 町を出るこんな時代が来ようとは
 風呂敷包み解けば時代の風匂う
 キッチンで時代の流れ読んでいる
 何かある度に言われる新時代
 まっすぐに前だけ向いていた時代
 駆けぬけた時代は今も煌めいて
 昭和史の中から飛んできた螢
 気がつけば時代を生きて来た敬語
 不遇時代一緒に生きた四分音符
 生きるため吠えた時代もありました
 これからは交通事故もある宇宙
 青虫の時代は言わぬ蝶の舞い
 辛抱の時代が根っこ太くする
 無駄めしの時代があつて今がある

秀句

和歌山市	香芝市	大内	朝子
鳥取市	堀	富美子	
岸本	孝子		
高浜	勇		
加島	由一		
志田	千代		
荻野	像山		
津村	律子		
米澤	飯子		
福井	菜摘		
村上	玄也		
上田ひとみ			
藤原ほか			
土橋	螢		
宮西	弥生		
太田扶美代			
渡辺	富子		
小林	わこ		
武本	碧		
小谷	小雪		
高田	振作		

若者が恥を文化に変えていく
 赤ちゃんから借金持っている時代
 コミカルに時代の空気読む時代
 世の中がどう変ろうと桜咲く
 反戦の歌は時代を超えひびく
 平成に時代遅れが居ても良い
 時代には背を向け鎌を打っている
 しつかりと両手で握っていた時代
 人は皆生きる時代を選べない
 昭和平成時代の片隅を生きて
 ありがとう時代を越えていい言葉
 にんげんの真の強さを問う時代
 いい時代だった修繕屋があつた
 辛抱の時代が根っこ太くする
 しがらみを捨てて時代の波に乗る
 飽食の隣に孤食住む時代
 呑み込まれた街が時代を模索する
 ゴールまで時代の風にふわり乗る
 上向いて歩く時代の風受けて

秀句

京都市	清水	英旺
紀の川市	北山	絹子
尼崎市	長浜	美龍
豊中市	江見	見清
大阪市	古今堂	恵子
鳥取県	斉尾	くにこ
大和高田市	鍛原	千里
大阪市	岩崎	公誠
河内長野市	松岡	篤
米子市	政岡	未延子
大阪市	谷口	義
米子市	中原	章子
和歌山県	森下	よりこ
米子市	吉田	陽子
西宮市	片山	忠
藤井寺市	太田扶美代	
海南市	小谷	小雪
尼崎市	小池	幸子
鳥取県	田口	清帆
西宮市	泉水	冴子
香芝市	大内	朝子
鳥取県	石谷美恵子	



堀端三男氏を偲ぶ

牛尾 緑 良

「川柳わかやま九十六号（昭和五十三年七月）に、中島正博君の紹介で入会させて貰ってから丁度百号を経過した」と句文集『あおい海』第二集にある。小学校の校長先生を退職されてからの参加でしたが、その経歴と人柄から当時の主幹・野村太茂津氏の片腕として吟社の運営にも深く関わられました。

平成元年、和歌山市制百周年記念川柳大会が開催され、企画者のひとりとして大会をまとめていただいた功績を忘れることが出来ません。というのも選者は岩倉天彦、大矢十郎、北山紀世、菅井智水庵、高松康勝、野村太茂津、淵田寛一、南出陽一といった県下各吟社の代表で一家言を持つ皆さんだったからです。大会は二百人近い参加で大成功だったことは言うまでもありませんでした。

また、平成四年には和歌山市で第十六回全日本川柳大会が野村太茂津氏を実行委員長に

事前投句一五〇九名、当日出席者七四七名の盛会裏に終了できたのは、教研集会などで大会開催のノウハウを持つ三男氏の手腕無くしては考えられませんでした。

その後、D51と言われた太茂津先生の信条と反するものがあり会の運営からは手を引かれましたが、発送や会計監査など影の部分で会を支え、会員の信頼を得て慕われていました。

「もう少し上手になってもと思うのだが、さっぱり向上のあとがない。能力が無い上に勉強もさっぱりしないのだから仕方がない（句文集より）」と言いながら、

ついて行く気だから文句ありつつたけ何よりの誤算は妻が先に逝くなど印象に残る句を詠まれています。

句会の常席は最後列、兼題などを書いた黒板の文字が見えなくなったら出席しないとい

うのが口癖で、最後までそれを通されました。各地の句会には積極的に参加され、全日本大会には同人を引率する形で各地に足跡を残され、大会連続十年表彰を目指しておられましたが途切れて残念がられていました。本社会会へも英子さん、三喜夫さん、和香さんなど皆勤賞を競っておられた時期もありました。

そのむかし、三百部を越す句報発送の封筒は三男さんの達筆が名物でした。発送後の英子さん心づくしのコーヒータイムでの阪神談義に本当の息抜きを見た気がしています。

遺 句 抄

返事するように仏の灯がゆれる
定位置に母居るだけで輪がなむ
生かされて感謝感謝の米寿です
井当はにぎりて競う老人会
エビで鯛釣った夢見て運が向く
苦節十年やつとシングル取れました
シナリオ通り行く程世間甘くない
今年こそという目標は持っていない

命日 平成23年3月20日

法名 英徳院善岳三教居士

享年93歳 合掌

愛染帖

新家 完司 選

岸和田市 中岡 香代

電球を付け替えるとき要る夫

(評)何かと目障りな存在だが、力仕事や電球を替えるときには要る。普段は留守で、必要な時だけひよこつと居てくれるのがベスト。

藤井寺市 鈴木いさお

延命処置「する」を「しない」に書き換える

(評)生きられるだけ生きたい」という願望が、「そこまでして生きることはない」という心境に至ったのは、やはり「歳」のせいか？

堺市 志田 千代

連れ合いのバナシバナシを追っかける

(評)脱ぎっぱなし、開けっぱなし、読みっぱなし、置きっぱなし。奥さまがいなければ散らかり放題。最後は「死につばなし」だ。

高槻市 片山かずお

譲られて背中を丸くして座る

(評)譲ってくれた人の厚意を無にするのは失礼。だが、恥ずかしいような、肩身が狭いような気分。まだ慣れていないからだろう。

海南市 堂上 泰女

被災地へ蟻一匹の支援金

(評)何かお役に立ちたい。が、何も出来ない。支援という言葉も恥ずかしいほどの額ではあるが、今、私に出来る精一杯の気持である。

東かがわ市 川崎ひかり

被災地のツバメよどこで巣を作る

(評)この度の大震災で被害を受けたのは人間

だけではない。目指していた軒が無くなっていたら、ツバメたちはどうするのだろうか？

福島県 七ツ森客山

この土地を捨てろと言うか放射線

弘前市 福士 慕情

原発の煙不安を噴き上げる

塩竈市 木田比呂朗

陋屋がほんとになった大地震

弘前市 高森 一吞

あの浪がガレキの山を生み出した

日高市 根岸 方子

ロウソクの明かりに頼る誕生日

鳥取県 竹信 昭彦

眠らせぬ大震災の生中継

八尾市 高杉 千歩

何をする気にもなれず呆然とテレビ

大阪市 板東 倫子

放射線拡散の地に雪しきり

香南市 桑名 孝雄

被災地に不撓不屈の旧友数多

シドニー 坂上のり子

春が来る野の花よ咲け被災地に

寝屋川市 富山ルイ子

避難所の人慰めて桜咲く

枚方市 丹後屋 肇

壊滅の土手に辛夷が咲いている

大和高田市 鍛原 千里

被災地へ気がねしながら桜咲く

愛染帖

新家 完司 選

さくらからさくらで歳をとっている
(評)「ああ、またひとつ、歳を重ねたか……」
という感慨は、新年や誕生日よりも桜。さて、
あと幾度ほど巡り合えるのだろうか？

昨年と同じところで桜を見る
堺市 加島 由一

(評)仲間と賑やかに楽しむ宴も悪くはないが、
独りしむじみ見るのは格別。春を告げる桜ほ
ど、様々な想いを抱かせてくれる花はない。

大阪府 畑中 節子

種芋を四キ口買って春始動

(評)四月の声を聞くと種芋が種苗店に並ぶ。
土いじりも楽しいが、収穫を喜んでくれる人
を思い浮かべると心が弾む。元気の春。

河内長野市 坂上 淳司

オペ前はケキヨ退院後ホーホケキヨ

(評)ウグイスも上手に歌えるようになった。
と、同時に「修理完了」した作者の気分も、
まさに「ホーホケキヨ！」なのだ。

西宮市 片山 忠

病歴をしつこく話す元氣者

スミマセンだけなら寝言でも言える

横原市 居合真理子

老歌手のはらはらさせて歌いきる

いただきますごちそうさまのない食事

寝屋川市 小谷 滋彦

踏切をドワツと渡る春一番

さつそうと薫風背負うランドセル

和歌山市 古久保和子

どこを押してもキュッキュッキュと鳴る少女

千円札囲のように募金箱

鳥取県 加賀田志延

夕焼けの空は太陽のため息

アラ還はホップステップだけで止す

西宮市 藤本 直

菓子玩具だけでは釣れぬ孫となり

寝て起きて食ってまた寝てすみません

大阪府 米澤 俣子

東北の地図に詳しくなりました

大災害無かったように咲く桜

羽曳野市 徳山みつこ

原発とそろそろ別れ話など

元氣な内にほれ断捨離とやらを

尼崎市 春城 年代

よそさんが起き出さした音で起き

よそさんはもう寝はったな灯が消えた

河内長野市 八木加修子

末っ子は叱られる前走つてる

かあさんの匂いが残る春シヨール

藤井寺市 太田扶美代

ひとりには出来ぬ張り切つてるお人

やつかいなモノです良心の欠片

大阪市 岩崎 公誠

満員の電車の仲間みんな雑魚

壊れたら東大卒も棄てられる

堺市 矢倉 五月

事あればわたし老女と書かれそう

赤ん坊のしつかりしてる腹時計

松江市 三島 淞丘

相性が諦めなのかまだ夫婦

もういいかいまだだよーとのんでいる

兵庫県 上田ひとみ

甲羅干しカメラより上手い自信あり

どんどんと亭主の帰りはやくなる

岸和田市 増田 隆昭

普段着で行ける呑み屋で灰汁を抜く

年金がなくてつまらぬ奇数月

大阪市 谷口 義

おばあさんは大抵その辺にいる

ドリンクを飲んで靴下二枚履く

大洲市 花岡 順子

鏡よカガミ私も捨てたもんでない

につこりと鏡に笑ひ出掛けます

海南市 三宅 保州

引き出しで泣いてる未整理の写真

大粒の涙わたくしには合わぬ

鳥取市 福西 茶子

嫁いだ娘の声がきこえる雛飾り

びつしりと桜で埋めるテリトリ

和歌山市 木本 朱夏

年寄りもあてにされてる選挙戦

注射したお陰で風邪も引かなんだ

浜松市 岡田 史郎

鬱椿様薔薇を書いたら漢字通

悪知恵にスツと騙される浅知恵

河内長野市 村上 直樹

叱った子の親に先生叱られる

二日前忘れ遠い日鮮やかに

京都市 松本としこ

気配りはもういいですよ昼の月

天を味方にお一人様を生きのびる

大阪市 古今堂蕉子

最後まで癌とボケから逃げてやる

お一人さま一個へ三回並ぶ

豊中市 松尾美智代

伊達 郁夫

大内 朝子

寺川 弘一

播本 充子

八王子市

柏原市 森吉留里恵
神神の名より最期はお母さん

大阪市 小谷 集一
嫌なことちゃんと断るのも礼儀

米子市 白根 ふみ
テキパキと働く方がバートだろ

堺市 村上 玄也
忘れ物した振りをして逃げ帰る

大阪市 柴本ばつは
住みこち良好果立ちやや遅れ

鳥取市 土橋 螢
人間だから恥ずかしい事もする

尼崎市 長浜 美籠
わつと菜の花心機一転することに

大阪市 吉村 一風
物差しをまた変えている青い空

奈良県 渡辺 富子
五年後のわたしイメージできません

大阪市 太田としお
今のうち逢いたい人に逢いに行く

鳥取市 倉益 一瑠
夫婦らしくなってきました万歩計

大和郡山市 坊農 柳弘
よろめかず媚びず虚飾の輪を抜ける

豊中市 荒卷 夢
テレビとの会話も楽しひとりの日

神戸市 山口 光久
満開の桜に免じ無礼講

豊中市 水野 黒兎
捨てられぬ昭和の錆びた肥後守

三田市 上垣キヨミ
病氣かと聞かれ氣付いたノーマイク

和歌山市 喜田 准一
呆けた振りしている訳でないらしい

鳥取市 有沢せつ子
外出をしない日倍も竹を踏む

吹田市 太田 昭
ナムアミダブツ唱え点滴落ちてゆく

岸和田市 雪本 珠子
倦怠期同じ歩幅が崩れたす

明石市 糀谷 和郎
クイズ解けすつきり入る仕舞い風呂

加西市 金川 宣子
老いの坂下る自分に気づく日日

寝屋川市 岡本 勲
定年後ゴミの仕分けも板につき

堺市 西村りつえ
暗い春少し茶髪で若返る

唐津市 山口 高明
初恋は義姉さんだと言えぬ歳

枚方市 小林 わこ
写真は嫌い友の引き立て役ばかり

富田林市 山野 寿之
黄昏て平凡がいい箸膳

和歌山県 森下よりこ
足腰が痛みとうとうおばあさん

河内長野市 梶原 弘光
腰痛体操種類多くて手に付かず

神戸市 山田婦美子
焼栗をむく真剣な指の先

三田市 北野 哲男
ご立派な祖父の戒名皆知らず

藤井寺市 俣野登志子
番大も熟睡してる春うつらら

鳥取市 土橋はるお
千鳥足一本橋は渡れまい

奈良市 加門 萌子
イケメンの隣ドキドキまだ若い

米子市 後藤 宏之
賽銭を一円玉で派手にまく

大阪市 大川 桃花
湯水のごとくなんでもうすく死語になる

札幌市 三浦 強一
肩書きは後期高齢ですわたり

和歌山市 田中 みね
頭かかえて悩むほど無い遺産分け

豊中市 石橋 優明
高いびき扉開くたび口を閉じ

鳥取県 細田 裕花
写メールで君の風景画が届く

大阪市 津守 柳伸
ありがたうの形で靴は揃えられ

大阪市 奥村 五月
お話と茶菓子目当ての趣味の会

八尾市 村上ミツ子
ちどり足案外転ばないものだ

米子市 高田 振作
すまんすまん呆けた呆けたとこまかして

西宮市 泉水 冨子
才能と思うやんちゃな子の粘り

神戸市 早川 孝子
足踏みはわたしらしさを作り出す

神戸市 奥水 弘
駆け引きの出る幕がない我が家計

堺市 近藤 治子
この世からあの世へ朝のご挨拶

宇部市 平田 実男
失敗を恐れぬことも芸の内

箕面市 広島 巴子
瞑想の岩盤浴で夢の国

池田市 上山 堅坊
次々と宝を探す茶碗蒸し

大阪市 笠嶋 恵美
逆境が歳を経るほど生きてくる

鳥取市 吉田 弘子
へそくりの出番孫への義援金

大阪市 坂 裕之
あの頃は良かったと言ふ歳になる

神戸市 田中 章子
夫の顔わたしの顔の鏡です

篠山市 田増 純子
冷蔵庫が叱ってくれる閉め忘れ

河内長野市 針生 和代
週一度電話訪問する息子

大阪市 榎本日の出
武器で得た平和は武器が取りにくる

米子市 加藤 正二
年毎に智恵の在庫が目減りする

弘前市 今 愁女
文明の利器股に挟んでカンニング

熊本県 高野 宵草
バスよりも電車が好きと本開く

倉敷市 撰 喜子
子の帰省ご飯多めに炊いておく

堺市 山本 半銭
花芽からずっと見守り今日の宴

大阪府 初山 隆盛
やんわりとあなた引き出す酒をつぐ

和歌山市 武本 碧
身中の虫ときどき対峙する

寝屋川市 森 茜
なにことも無しと日記につづる幸

八尾市 田邊 浩三
孫連れてゴミを拾いに公園へ

大阪市 津村志華子
接点がだんだん薄くなる身内

鳥取市 岸本 宏章
事故減らす役目もあったネズミ捕り

富田林市 中井 アキ
好きだから斜め横から見えています

和歌山市 磯部 義雄
あと二年百寿を手繰り寄せる母

西宮市 緒方美津子
脱ぎっぱなしを見て見ぬふりは難しい

和歌山市 福本 英子
茶粥炊く肩の力を抜いて春

奈良市 矢野 良一
春うらら桜見がてら知事選挙

藤井寺市 津田シルク
行きずりのお花見たこ焼などを買う

東大阪市 西田いくろ
鯉のぼり団地サイズが跳ねている

奈良市 尾畑なを江
羽衣の松に二十歳の忘れもの

羽曳野市 永田 章司
シャツ出しを真似るシルバー不様なり

池田市 栗田 久子
がんばれというむずかしいタイミニング

河内長野市 松岡 篤
カウンター奥に長居の馴染み客

大阪府 小栢こずえ
生き甲斐に当たらぬくじを買っている

紀の川市 辻内 次根
甘ければいいですばくの赤ワイン

八尾市 宮崎シマ子
平行線の恋抱いている八十歳

東かがわ市 木村あきら
熨斗袋下心まで包み込む

誹風柳多留一篇研究 70

伊吹和男・山田昭夫
増田忠彦・山口由昭
小栗清吾
清 博美

546 師匠さまめき穴のあるはしらなり

伊吹 古川柳に登場する手習の師匠や儒学の先生は、教養はあるのだが懐中はおく淋しいということになっている。だからその住居は、柱と柱を繋ぐための貫を通そうと思つて間違つて穴をあけた柱がそのまま使われているような、安普請である。

師匠さま我居る所はへりを付 二三20

—手習子を使う覺は、縁のない粗末な野郎覺

師匠様と疊斗りやろうなり 安六宮2

—前髪を剃り落とした成人の野郎頭の師匠さ

まど野郎覺

山田 礎も言われるように、寺子屋の師匠様は貧乏が相場。そのため教室に、

師匠様一軒つ、きに店をかり 傍四5

当然壁は取り払うのだが、柱は抜くわけにはゆかない。

師匠様じゃまなはしらが三本 安八札10
その柱には横木を通した貫穴がそのまま、というのでしよう。

小栗 山田説の如く考えていました。
清 賛。

547 間男のきられた所に瓜のかわ

伊吹 あん天にすべるを見れハ瓜のかわ 九4
のように凍結した道ならともかく、滑るはずのない炎天下での瓜の皮。まして逃げるのに一所懸命の間男は、気付かず瓜の皮を踏んで、追い駆けてきた亭主に斬られることになる。

間男ハセ中がいつちふか手なり 安元義4

清 賛。

548 あさつてハお初月ツ忌と後の月

伊吹 延享四年(一七九)八月十五日、江戸城殿中大広間において細川越中守宗孝は、家紋の九曜星と九曜巴を見間違えられて、板倉修理勝該によつて斬りつけられて死亡した。勝該は、自分を廃嫡させようとしていた、本家の佐渡守勝清に斬りつけたつもりだった。主題句は、この誤紋の刃傷事件を詠んだもの。史実によれば宗孝の死亡は翌十六日のようだが、その九月の十三夜の後の月に明後日は宗孝のお初月忌だと、細川の家中や家族の者たちが言っただろうという想像句。

月あきるかにしてはしハ隠したり 一一35
名月に九曜のきへる不慮な事 三四25

増田 賛。翌年以降は月見の遊宴もなし。
清 賛。

549 主人相知らず四ツからすへの事

伊吹 唐の賀知章の詩『題袁氏別業』の「主人不相識 偶坐為林泉」からの文句取り。別業は別荘で、漢詩は、顔なじみのない袁氏のその林泉のある庭を誉めている。主題句にお

いては、世間の商家の主人たちは、その奉公人である番頭や手代の夜の十時以降の行動を知らしめない、と詠んでいる。

主人相しらずはんとうげい者なり 三二九

山口 賛。

深川へ四つに来るのハさんがたけ

明六義三

清 賛。

550 御ぞうさんていらに居なとちよきを出し

伊吹 お草さんは、草履取のことで、主人の草履を持つて供をする下僕。吉原に向う主人と一緒に猪牙に乗った草履取なのだが、なにしろ乗り慣れないから危なっかしい。そのため猪牙舟の船頭は、重心を低くしていなさいと草履取に注意をして、舟を出す。

いそくちよき御ぞうなんだかぶつかへり

天元義一

小栗 賛。「たいらに」の語義(①らくに。あぐらをかけ、膝をくずして安坐せよと勧める時にいう語。②ゆつくりと。『江戸語の辞典』に従えば、「そんなに緊張してコチコチになつていないで、楽な姿勢でいな」といっているようにもとれるが。

二ツ三ツくくと舟頭おたいらに 明七校二

清 賛。

551 くゞり戸が明くつけ込ム夜かこかき

伊吹 夜遅くに潜り戸が開いて人が出て来ると、これは遊里行きに違いないと見当をつけた四つ手の駕籠昇が近寄り、「お安くしときますから」などと言って付け入ってくる。お店者の夜遊びと限定できるのだろうか。別に亭主やどら息子であつてもおかしくないと思う。

くゞりからくゞりへ番頭ハは入り

天二礼三

山田 賛。お店者とは限るまい。要は内証で出掛ける人。

小栗 礎説・山田説。誠にものともなれど、潜戸から出るのは、大戸が閉った夜更ということだから、川柳の約束としては、皆が寝し

ずまつた後に這い出るお店者としてよいように思う。

清 賛。

552 かんざしをかせともいわずすいとぬき

伊吹 恋人同士の仕種。娘の簪を若者が馴れ

た手付きで貸せとも言わずにすつと抜いて、それで頭などを搔いている図。お互い親しい者同士だから出来る動作である。

かんざしを借てかゆくもないにかき

第一七

小栗 賛。「ずい」との方が、句の感じに合うか。

清 賛。

553 六尺に迄ちそうする念んはらし

伊吹 六尺は駕籠昇で、念晴らしは疑念を払うこと。重病人を回復させることが出来ないかと、法眼のような名医に診察をお願いした。だからその医者は勿論のこと、医者への乗り物を担いで来た六尺にまでこの馳走を出す。

毛せんの入いしやを呼念んはらし

明五礼三

念んはらし法りの眼で見て貰ひ

六二二

山口 賛。例句を見ると「念晴らし」は祈祷のようなことだろうか。

小栗 賛。「念晴らし」は礎説の通り。近所の医者の見立てでは心許ないので、セカンドオピニオンとして法眼様のご診察を仰ぐのである。

清 賛。

茂る

平田 実男選



また恋を若葉が茂る頃に捨て
千年も茂った樹々を呑む津波
草だけが茂る津波の去った跡
被災地に青葉茂れる春よ来い
生垣が茂りお隣り遠くする
お隣りの空家草木の好き勝手
竹林が茂り田畑を食いつぶす
一寸目を離せば茂る庭の草
ふるさとの母校に記念樹が茂る
茂る日も枯れる日もある人も木も
ジャングルに命預けた過去を持つ
若葉から青葉と森が深くなる
茂みから飛び立つ鳥も春の色
廃線の軌条に茂る夏の草
廃校を知らぬ記念樹生い茂る
茶摘み歌若葉が茂る初夏の風
病気かな隣の庭が荒れている
神の住む森も呑み込む大津波
後継ぎが絶えて雑草茂る庭
あの時の返事でしょいか草茂る
喧騒の茂みで悪の芽が伸びる
記念樹が茂って孫も十五歳

四郎 典子 (片) 忠 翁 いさお アキ 蜂 朗 孝 子 (常) 美智代 唯 教 一 兆 勝 視 強 一 婦 美子 穀 (吉) 寿 美 奮 水 霜 石 一 風 玄 也 日の出 扶美代 せつ子

北陸に樹の茂る日を折るのみ
海草が茂る平和な海がある
かけ算のごとく茂っていく若葉
震災へめげずに若葉生い茂る
嫁いだ子その地に馴染み枝茂る
里山の茂みを歩く安堵感
公園の死角になつている茂み
根こそぎに倒れたままの葉の茂り
雑草も茂れば緑眼に優し
桜井の別れが口をつく青葉
雑草が茂るどころか生えぬかも
思い出の葛で埋った甲子園
我を捨てた根つこが若葉茂らせる
里山が茂って消えた人の声
蘇れ夏草茂る被災の地
佳
一面に茂る緑に湧く勇氣
枝ぶりも自然に茂る様が好き
人生の最終章で茂ります
夏草が覆う昭和の忠魂碑
記念樹は茂り私は枯れてゆく
人
こつこつと積んで茂ってゆく器
地
老いてなお心に茂るものを持つ
天
参道の樹々の茂みに神宿る
軸
兎小屋だけ茂っている絆

志華子 昌 鼓 (山) 節 子 裕 花 直 美千代 美千子 まみ子 孝 雄 正 彦 哲 男 碧 次 根 敏 治 准 一 美紗子 くにこ あずま 寿 之 朝 子 キヨミ 若松雅枝

暇そうなの私狙って役が来る
それぞれの役目果して路つたなく
被災地へ涙こらえてインタビュ
肩書きが多過ぎたのかのけぞって
窓際に居るが私は知恵袋
ロボットが役目譲れと肩たたく
職退いて主夫の役目が板につき
子や孫に迷惑かけぬのが役目
宴会に欠かせぬ役目僕ビエロ
死ぬまでは聞き役します妻の愚痴
役目柄最前線でタクト振る
責任者役目を忘れては困る
子育てを終えた両手が淋しがる
役目終え鴨居にかかる三ツ揃い
下積み役目は舞台裏にある
肩書きはないが役目はたんとある
役目など疾うに忘れた議員席
押しつけられた会長は名誉職
婆ちゃんにある語り部という役目
やつかぬ役目になると名を呼ばれ
秘書という役目のひとつ罪被る
根回しで振り分けられていた役目

美智代 忠 子 政 勝 一 呑 篤 毅 雅 明 典 子 寿 之 和 郎 (七) 順 子 圭 一郎 修 子 婦 美子 (花) 順 子 寒 之 留里恵 螢 (志) 千 代 敏 治 准 一



石谷美恵子選

役目

真つ先に逃げ出したのは火付け役

家族の和母の役目と決めている

会長という名で会の世話係り

主役ではないが僕には父の役

主婦と言う役目は愛の雑役婦

大役を断り切れず五里霧中

夕焼けこやけ役目果して人となる

役受けてやっとな地元の人となる

大役を終えて広がる青い空

一本の藁にもそれなりの役目

生涯を医師とし過疎に根を下ろす

招待状行けばパンザイする役目

ネジ一つちゃんと役目は果して

お互いのつかい棒になるふたり

楯になる母あり楯にする母も

軽がんと受けたお役目背に重い

産卵を終えて骸となった蛙

代役で虹をつかんでいた端役

深く退く日役目を果す花

きつちりと役目果している濃過紙

最後までひとり芝居という役目

失って気付く大きな菌の役目

聞き役も笑わせ役もして介護

特別な役目でないが何でも屋

軸

天

地

人

充子

山節子

妻子女

かず子

倫子

葉摘

一粹

さだき

セツ子

碧

茂代

くに子

善信

霜石

茶子

(山)紀子

(山)いさお

せつ子

(宮)弥生

美龍

ふみ

黒兎

太田扶美代

川

片岡智恵子選



橋の名は残っているが川がない

ふる里に心を洗う川がある

日暮れまで鮒つ子追った日の小川

この川を渡れば逢えるかもしれない

巣立つ子に川の広さを教えねば

世渡りの川で溺れている河童

川底で流れずにいた丸い石

春の川土手の桜と対話する

川の字になって介護の母と寝る

船頭の洪い小唄で川下り

蛇行して川はだんだん丸くなる

雪景色小川に春が覗いてる

焦らずに歩く川風からエール

川石が庭師の技で甦る

人間の重荷を軽くする小川

飢餓に喘ぐ民衆がいる川向う

したたかな川で学んだ人情味

ひと雨で川はゲリラを見せつける

気まぐれな川で蛇行を繰り返す

親子でも越すに越せない川がある

森林のしずくが生んでいる大河

直角に名前が変わる街の川

花筏歴史が沈む吉野川

人間の英知を試す暴れ川

夢賢い夢を流した郷の川

脈を打つ真つ赤な静と動の川

生きて行く川の流れに寄り添って

悠然と流れて母のような川

前向きな話が好きな春の川

本流も知らずに雑魚は生きている

子の意見川幅広げ聞いてやる

ゆつたりと民話浮いてる里の川

せせらぎで生まれ河口で丸い石

川底で苦むす石にある悩み

老いの身へ川の流れが速くなる

玉川の水さざめいて桜桃忌

川の深さ子にはじっくり教えよう

佳

紆余曲折川の流れにまかせよう

冒険の川へお椀の舟で出る

雪解けの川は大河の顔になる

さよならの口笛川の風に遇う

源流を辿ればピュアな岩清水

人

まだ欲がある流れつく川がある

一滴が大河目指して動き出す

地

欲少し削ると川が流れ出す

軸

しばらくは海に馴染めぬ川の水

志華子

みつこ

堅坊

唯教

美智代

男

充子

(志)千代

正雄

菜摘

キヨミ

千鶴子

ミツ子

ばっは

光久

幹子

霜石

慕情

螢

弘一

芳生

岳水

武本

碧

初歩教室

題 — 口

鈴木公弘

限られた音字数の中で伝統的な手法により、あるいは新感覚を駆使して自己主張を行う（相手＝読み手に感情を伝える）ことは、そう簡単ではありません。今回もどんな場面について何を言おうとしているのか、必ずしもその内面を察知できる（理解できる）句が多くなかったような気がします。

【もう少し整えてほしかった句】

原口うるさかつた今有難い母に礼 綾乃
添口うるさかつた母の指導に感謝する
原口ずさむ歌も様さま三世代 野宣子
添三世代それぞれ歌口ずさむ
原足りません鉛玉一つ口止め料 白淑子
添失敗の口止め料に鉛ひとつ
原口締めているのにこの目しやべりそう 律子
添口閉めていてもこの眼が喋りそう
原ボトルの口開く楽しみ咽が鳴る とも湖
添ボトルの口開けて楽しい咽が鳴る
原転がってきた噂話は馬耳東風 俵玲子

添転がってきた噂話を聞き流す
悪意ある人は「転がってきた噂話を膨らます」と描くかもしれませんね。

原干涉が過ぎて子の個性つぶす口 宮俊子
添子への口過ぎて個性を奪い取る
原大集会先ず非常口確かめる 孝明
添集会のまず非常口確かめる
この句の「非常口」を「逃げ口上」と考えれば、かなり面白い着想と言えます。
原口で言ううらの考えおそろしく 記久乃
添口の裏まだ出てこない鬼が住む
原学識者想定外と逃げ口上
添想定外と言って識者は逃げている
原もう時効こもる口恋散つた花 ミヨノ
添口こもる恋も時効になりました
原あと一口もつたいたなくて糖尿病 こそえ
添「もつたいたない」裏に糖尿病が棲む
原口出せば時代後れのことはかり 中章子
添口出せば時代遅れなことばかり
原開いた口想定外とすり抜ける 正二
添口開けるたびに想定外という
原気色悪う無口の妻がよく喋る 滋彦
添何かある無口な妻がよく喋る
原飯事のママはやっぱり口達者 久美子
添茶飯事のママはやっぱりよく喋る
原口チャック嫁と婿には好かれたい 登美子

添口謹んで嫁と婿には好かれたい
原日本中無口にさせた大震災 道子
添日本を無口にさせた大津波
原口伝から貰う用心忘れがち
添口伝から貰った注意書き忘れ
原重い口猪口にキスして甘くなる 安子
添重い口猪口にキスして軽くなる
原仲人はいのことばかり言ってくる 久子
添仲人人口にいいことばかり詰めてくる
原明日があるなとかなると口癖に 武臣
添明日はあすなとかなると繰り返す
原原発に不満が漏らす口々に 紀雄
添原発の不満が口を失らせる
原口たたく信用されている私 治子
他人に信用されることは良いことです。しかし、自慢話は嫌味に通じます。目線を高くしない川柳を目指してください。
原口開けて寝ている子等に花吹雪 冷子
拙吟として「口開けて寝ている……に……」という作りを発表したら、すぐに真似をされた経験があります。類似句があつたらしいことだけは覚えておいてください。
原悪口を伝わるように言いふらし 宏之
上5と下5とが一对になる作り方です。これは良い手です。ただ、この句の上5はそのまま中7に繋がる作りでもありますので「悪

口が」としても良いと思います。

原旨いめし口一杯の幸せを

清

添旨いめし口いっぱいいの幸をくれ(呉れ)

原赤字なお家計簿蛇口閉め切れず 孔 一

添蛇口なお漏れて家計の赤続く

原泥棒に入る手口を教えられ

一 泉

添泥棒に侵入口を諭される

原句の解釈は二三通りも三通りもありまし

う。おそらく泥棒に弱点を突かれたという句

にしたかったのだと思います。

【入選句】

専用車絶えずに続く話し声

洋 一

電車の何両目かの風景ですね。お乗りにな

ったのですか?ダメですよ。

悪口は自分に帰るブーメラン(憲司改メ) 憲

むだ口を叩く相手もいない僕

英 男

川柳作りに没頭できる良い環境です。

へらず口たいて買ってカスつかみ 元

句に弱味を作るため、できれば「減らず口

たいて買ってカス掴み」と、漢字表記して

はいかがでしょうか。

誰よりも負けていないわ口達者

美紗子

初キッス淡い雪降る帰り道

(倫則 彦

口笛が吹けず口だけとんがらす

美知江

儲け話一口乗った落とし穴

エ ミ

「きれいだね」マスクの顔にみえる世辞 百合江

情けない口先だけの正義感

宏 造

源流を大きく抱いている河口

義 雄

おりこうねまわらぬ口でご挨拶

加修子

幼子への情の句ですから「ご挨拶」も思い

切って平仮名にすると、もつと優しさが表現

できるかと思っています。

無口でもあ・うんでわかる夫婦する 開 子

気心が知れて無口でいる二人

堅 坊

ダイヤ婚幾度か別れ口にした

智加恵

原発事故どうも本音が言えぬらし

のり子

口々に文句言うのは簡単よ

(蘭 弥 生

今日こそは話すと決めた紅を引く

よしみ

口数が少なくなつて老ける耳

弘 泰

「老ける耳」は流れます。口数の減少と老

化を確実に結び付けられるものを引き合いに

して使いましょう。

袖口にマジックの種見え隠れ

(俊)美恵子

春来たがまだつかめない職の口

ひとみ

「春なのにまだ触れない職の口」

ふみ子

手も口も出さず金だけ出してやる

弘 光

大口を叩いたあとは気がふさぐ

憲 彦

還付税妻が口開け待っていた

憲 彦

「：待っている」なら、もつと臨場感が出

ます。

人生の出口探して森の中

敏 治

思えばこそ口に出せない事もある

菜 摘

耳許へどうぞまたねと熱い息

一 兆

調子良い出任せばかり酔うてます

惠 美

【佳句】

口約束信じる子ども裏切れぬ

孝 代

来年ね雛のお口をそつと撫で

妙 子

ここだけの話口止めなどしない

真 澄

いつまでも達者な口と褒められる

起世子

口車乗ったふりして知恵比べ

正 彦

裏口はお金次第で開くことも

篤

頑張れが禁句と知つて口喋む

寒 之

二枚舌口が歪になつてくる

幹 子

あの口は他人を批判ばかりする

秋 星

言われて気付く口元のご飯粒

真 由

【今月の推せん句】

口一杯頬張つていて満たされず 森吉留里恵

欲とはこんなものでしょうか。

お食い初め家族みんなの口が開く 尾崎 一子

気体の笑顔、笑い声がみえます。

口だけは老いずよく食べよく喋る 畑中 節子

極めつけの句。無神経のなれの果て、とで

も申しましようか。否、長生きの秘訣でしょ

う。ただしメタボにはお気をつけください。

【私の句】

下剋上たつた一つの口持つて

風呂食う寝るこれだけ言える口がある

(登載漏れ方は役員が添削して返却します)

秀句鑑賞

同人吟 中居善信

―5月号から―

今回、同人吟の秀句鑑賞の依頼を頂きありがたく思っているところです。数年前に一度

の経験はありますが、原稿が届きますとどうしても緊張を致します。一句一句丁寧に読ませて頂きました。

川柳とは何か。これについてはいろいろな方達がいろいろと言われて居ますが、終局的には人間を詠む文芸と言う事でしょう。

集句一六八〇句を読ませて頂きました。皆さんの句に対する熱い思いを感じております。選びました句は少し偏った選になってい

るかとも思いますがお許し下さい。

信号の赤が律義に赤になる

牛尾 緑良

赤青黄色を繰り返す信号。何にも疑う余地は無いのだが。それを少しおどけて時々は順番を間違えたらどうかと言っている。

愚直に生きるのは疲れるだろう。時々肩の力を抜いたらどうか、赤の後に黄色があつた

アルデンテくらいのは芯はもっている

木本 朱夏

アルデンテを辞書でひくと「歯ごたえのある食感。パスタのゆで加減のちょうどよい程度」とある。置き換えるとはこれは人間の生きざまである。自己主張し過ぎると嫌味になるかと言うて芯の無いのもどうしたものか。なんとなく一目置かす程度の芯はあるに越した事は無い。

シクラメン冬の独りをなくさめる

斉尾 くにこ

さらりと詠んで「冬の独りをなくさめる」と言うがちつとも寂しさは見えてこない。きつと幸せなんだよね。白いシクラメンなのか、または紅色なのか。何となく優雅な暮らしが見える。

二人なら少しはしゃいで雪の中

居谷 真理子

これは豪雪地帯ではない、十一・二十センチまでの雪だろう。お父さんと二人なのか、友だちと二人なのか。たまに降る雪は楽しい。

大変な時には肩を組めばいい

岸本 孝子

今回の東北大震災は目を覆いたくなる。家をこなごなにして押し寄せる津波。押し流される自動車。そして漁船。こんな惨事の中で人の流される画面がないのには助かる。スマトラ沖の津波には子供が波に吞まれていた。あの衝撃は今でも忘れられない。

踏み絵だとしても決心変わらない

福永 ひかり

職場でこんな思いを何度も経験をした。近所付き合ひの中でもこんな思いをする時もある。踏み絵は人それぞれに違うにしても嫌な思いはみんな同じであろう。出来るだけ妥協をしておこうとは思うのだが。それでも許せない事がある。

どきどきする郵便物がたまに来る

松本文子

月末になると塔の届くのをどきどきしながら待っている。

塔の巻頭から自分を探す。早めに名前が出てくるとホッとする。取って頂いている句を確かめる。納得すること、何で?と思う時もある。こう言ったら「私は後ろから探す」と言った人が居た。

どきどきと待っているのは同じなのだが。

十二支の留めをつとめております

谷口 義

子、丑、寅と繰ってみる。最後が亥となる。たいした話では無いのだが、単に亥年に生まれただけの話を勿体ぶって「留めをつとめる」と言われると笑わずにはおれない。並の頭ではこうは詠めん。

セルスの電話お相手してあげる

古久保 和子

「中居さんですか、〇〇と申します」と電話が掛かる。「いらん」と返事をする。「私まだ用件を言ってますんが」と言う。

この頃この類の電話がよく掛かる。コールセンターが出来てからは、昼も夜も無い。和子さんは偉い。そうですかそうですかと聞いてあげる。最後にはちゃんとお断りをするのだから。

雨の日は少しみだらに髪を梳く

岸 桂子

この句も笑ってしまった。雨の日に何でみだらなの。そんな事言うのがおかしい。少しおどけているだけの話。

わびすけが咲いて電話をしたくなり

坂部 紀久子

庭の片隅の佐助が咲いているのに気がついた友達の顔をふと思う。電話でもしよう。

ふる里へ帰りたくなる花見酒

土橋 睦子

昭和20年代、30年代後半にかけては戦後の復興期であった。その頃に中学高校を卒業した友達は就職列車に揺られて都会へ都会へと出て行った。僕は長男だったから農業を継ぐ為に田舎に残った。都会へ行った友達は何かにつけて故郷を思った事だろう。

かなしいな好きになれない人がいる

宮尾 みのり

夢食う虫も好き好きと言うが、何となく虫の好かない人がいる。

みのりさんは僕の先生だからよく判る。頭が良くて勝気で、一十年前上のお姉ちゃんもはつぽつ〇〇オウお互い物分かりが良くなつた。

水が水色に光るふる里いとおしむ

佐伯 やえ

わびすけの句も、花見酒の句も、この句も同じパターン。句ではあるが、取って取ったのは表現の巧さを見て頂きたかったからである。句を作る姿勢が同じなのです。

ややひたむきに自分を見つめている。句の表現も無理のない表現にこだわっている。ここまで来るにはベテランと言われるだけの年月が積まれているものと思う。

のんびりに罪悪感の戦前派

三浦 強一

その通りなのです。僕は戦中派と言うべきでしょうか？終戦が小二の時である。

食べ物の無い時代、着るものの無い時代。遊ぶ物の無い時代。ただ働くだけの時代。

だがこの時代には人の情けが沢山あった。働けば働いただけのお金が稼げた。娯楽は映画とサイクリング。この時代の人間はじっとしておれないのです。

菓子パンをこどもの顔で食べている

播本 充子

なんと平和なことか。菓子パンを子供の顔で食べられる。これほど嬉しいことはない。今回の東北震災は自然の恐ろしさと人間の愚かさを教えてくれた。原発の後始末は何時終るのであろうか。孫曾孫の時代まで尾を引く恐れがある。菓子パンをこどもの顔で食べられる時代を祈らずにはおれない。

風呂の湯があふれて済まぬ震災地

川端 一歩

走りません私も歳をとりました

高田 美代子

あと何句かに二重丸を付けていたのだが紙面が足りなくなつた。句は平明な句ばかりを取つてある。これでいいのかと思ひながら。

—水煙抄

秀句鑑賞

—5月号から

高橋 岳水

家計簿に載せると無駄が見えてくる

花岡 順子

この度の東日本大震災後の購買行動には、常軌を逸するものがあつた。「買い溜め」「不要不急のものを買う」のは、デマに踊らされた迷える羊の様相であつた。家計簿を吟味する必要がある。

加護を享けやと八十路に辿りつく

前田 弘恵

人生は自力ばかりでなく、他者からの恩恵によつて成り立つものであるという感謝の念を吐露されておる。

無欲にはなれそうもなく二兎を追う

大久保 真澄

幸福への近道はなかなか見つかりません。身の丈にあった目標を一つずつクリアして行くことが大事。

ページ繰る指をどきどきさせる本

福井 菜摘

活字離れが叫ばれて久しくなりますが、物語の展開にハラハラ・ドキドキしながら時を忘れて読書する幸せを伝えたい。

お互いが当てにしている突っ張り棒

野川 宣子

夫婦とは、お互いにもたれ合う一対の棒だと思ふ。

忘れてはならぬ記憶に紐つける

山本 ふみ子

どなたでも高齢になると、度忘れが強くなります。大事なことは身の回りのものに置き換えるか、日記にでも認めておこう。

髪と爪伸びてひと月消えて行き

武島 ちよえ

高齢になるほど時の経つのが早く感じます。私たちには、生きる証に川柳があります。

一円は無いと困るが拾わない

岸本 清

一円硬貨は、わが国の基本貨幣単位だから大事に扱おう。塵も積もれば山となる。

口惜しさは日記の中に仕舞いこむ

豊田 愛

負けは負けと認めて、捲土重來の踏み台にしたいものである。

思慮深くなつたあの日の赤っ恥

高橋 洋子

赤恥をかいいたり、失敗を繰り返しながら感得したものは、生涯の宝となるだろう。

民衆のマグマ独裁押し倒す

平野 あずま

中東の多くの国で繰り返されている独裁者と民衆の対立。民意が反映される形で早く終息して欲しい。原油高騰の一因である。

一駅を歩く春色スニーカー

白川 淑子

春たけなわ、季節にマッチした色の運動靴を履いて颯爽と歩めば、運動不足解消とダイエットにもなりましょう。

ほどほどの酔いが明日のエネルギー

稲見 則彦

適量のお酒は百薬の長といわれる。事実、心身のストレスを癒してくれます。善玉コレステロールで見ると。嗜まれる人の方が多いそうです。しかし、飲み過ぎは避けましょう。ぐっすり眠って明日も頑張ろう。

苦勞人らしい気配りあつたかい

高森 一吞

今回の東日本大震災の惨状を毎日テレビで拝見し、心が痛みます。自然の威力の前には人智とはなんともかえないものでしょう。心の中は見えませんが、心配りは見えます。目に見える形で復興に関わろう。



八百長選、人情選

私事になりますが、このたび「川柳の理論と実践」という本を出しました。すでに読まれた方はお気付きかもしれませんが、「せんりゅう飛行船」のNo 4、No 5に書きましましたことも、その本で詳しく述べています。

今後は、できるだけ重複せぬように心がけますが、「理論と実践」は、皆さんにお伝えしたいことをほとんど網羅していますので、記載している内容から離れて新しいことを書くのは至難です。多少の重複はご容赦ください。

また、「理論と実践」の中の「ここが分らない」とか、「私の考えは違う」というようなご意見がありましたら、お聞かせください。そのことを材料にしてこのコーナーで再検証しても有意義ではないかと思っています。

さて、今回は「選者と選のありかた」について考えてみます。大会後の懇親会などで、「Aさんの選では必ずBさんが三才に選ばれる。今日もそうだった」というような話を耳にすることがあります。私自身も「ちよつと変だな？」と思うことがありますので、そのように感じている人は大勢いることでしょう。

しかし、Aさんとしては、「予断を持たず、厳正且つ公平に選をする」ことを信条としているかもしれません。にもかかわらず、Bさんの句を高位に抜くのは、いわゆる「波長が合う」ということでしょうか。人生観や価値観、そして川柳観などに共通性がある場合、そこから生まれた作品に

共感することは大いに有り得ます。このように、選者が潔白であることも多々ありますので、単純に「依怙蝨眞」などと邪推するのは慎みたいものです。

もちろん、川柳界といえども清廉潔白人ばかりではないでしょう。作品の質のみを判断すべき選において、私情を優先させる人がいるかもしれません。

八百長と人情相撲は違う

村上ミツ子

四月号の「愛染帖」で取り上げた作品です。その評で、「相談して転ぶのが八百長。相手を思い遣って力を抜くのが人情相撲。人情相撲は『心の中』のことなので誰にも分らない」と書きました。

川柳大会の選では、右の「八百長」は考えられません。もしも、Bさんが「この句を出します」とか「この句ではどうでしょうか」などと、Aさんに依頼や相談することがありましたら、その瞬間にAさんから軽蔑されるでしょう。そのような馬鹿げた人がいるとは考えられません。

問題は「人情相撲」に相当する「人情選」です。これは有り得るでしょう。すなわち、筆跡によつて作者を判断して、作品の質以上の高位に推すことは有り得ます。なぜ有り得るのでしょうか？ それは、「人情相撲」と同じように、「私の心の中のことなので、誰にも分らない」と浅はかな考えをする選者がいるからです。

しかし、それは大変な間違いです。賢明な読者が嘘ごとの句を見破るのと同じように、賢明な川柳作家は人情選を見破ります。煩惱と雑念にまみれた私たちですが、せめて、選のときだけでも明鏡止水の心境になりたいものです。

『麻生路郎読本』余滴

(3) 米子支部創立記念

山陰川柳大会

桑原道夫

川柳雑誌米子支部松露川柳会は、昭和30年1月15日(土)、同人15名、会員60名で発足し、2月1日に「川柳 松露」の創刊号が発行された。



「川柳 松露」創刊号表紙

松露川柳会が創立したことを祝う路郎の書簡を紹介しておこう。

「川柳雑誌米子支部松露川柳会が誕生したことを心からよろこんでいます／一度蹴起した以上何處までも初志を貫徹さ／れ山陰文化のために実を挙げられたいよ／／これか

らであることを深く支部同人一同／が覚悟すべきだと存じます／一月十七日夜／麻生路郎

「川柳雑誌」昭和30年3月号(No.334)の「柳界展望」に、川柳米子支部創立記念山陰川柳大会の広告記事が掲載されている。

▲日時三月六日(日曜)筆者註)午後一時—五時▲場所皆生温泉友恭寮大広間▲兼題(各題三句厳守)お世辞(路郎選)濡れる(緑之助選)趣味(八歩選)ポスター(山川児選)売残り(日満選)席題当日発表△柳話麻生路郎師△会費五〇円△投句料三〇円△記念写真五〇円△投句先米子市道笑町一ノ三四、三鴨笑笑苑(以下略)「

「川柳雑誌」同年5月号の「各地柳壇」に、井上戯耕が、路郎選「お世辞」の入選句62句を報告している。何句か抄出しておく。

流行らないドクターお世辞だけ上手

雄々

世辞のない顔恩給がついている 八歩

水臭いお世辞は抜ききの君と僕 代仕男

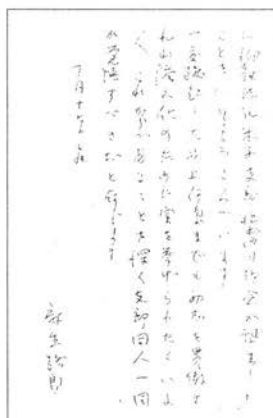
スタンドのお世辞鶴匠の紐に似る 戯耕

背の子へお世辞あびせてさようなら

独仙

新婚のお世辞の過ぎたのに気づき

緑之助



路郎の書簡

お世辞にも来いと言えない生活むき

美笑

落選をしてもお世辞の中に立ち 路郎

記念川柳大会の路郎の思い出話「川柳と衣鉢相伝」を小西雄々氏が書いて下さった。

麻生路郎先生をお迎えして、昭和三十年三月六日川柳大会を開催した。その前日の午後五時過ぎ、三鴨笑笑氏と私はブラットで、駅前には「歡迎川柳雑誌社主宰麻生路郎師」と大書した花輪を飾り、同人約十名が待つ中、下り急行いずも号は到着、特徴ある温顔の先生は元氣な足どりで下車され、すぐ車で明日の大会会場である皆生温泉へ。車中で「花輪と懐かしい諸君に迎えられスターの気持にな

った」と、喜びを伝えられた。

ホテルでは先生と美笑氏と私の三人で夕食会を催し、そのあと一緒に温泉に入り、小休止して先生のお話を拝聴した。

先生は川柳の社会化と初心者の指導および発表機関という使命の旗印の下に「川柳雑誌」を発刊されたことから、話題は広く深くユーモアを交えて、川柳こそ真理探究と社会批評の文学であることを強調され、鋭い観察眼が川柳上達に必要であると語られた。

また、感受性のある作家を育てるため、選者も勉強せねばならず、没の句を認めさせようと各誌に投句するより、どこが悪いかわかる方が賢明であると、選者にも初心者にも有意義な話は尽きず、日付が変わっても続いた。

当時まだ若かった私は忙しい勤務の中、川柳への情熱の火を燃やし続け、今日に至っていますが、時折その言葉を思い出し、川柳の仲間伝えていきます。

写真資料提供は、すべて小西雄々氏。平成14年の鳥取県西部地震（M7.3）で、二階が壊滅し多くの柳誌をなくしたが、「川柳雑誌」と「川柳松露」は無事だったそうだ。下の写真など五十数年前のものであり、出席者の名前を時間をかけて思い出して下さった。



川雑米子支部創立記念山陰川柳大会

●印は、当時不朽洞会員であった人。一列目左から、●木村三雷波、●勝谷山川児、●尼緑之助、●三鴨美笑、路郎、●大西八歩、●河村日満、●杉山湖山、●森本法泉子。二列目、左から二人目から西垣青香、木村蜂人、二人において●藤井明朗、原章坊。三列目左から井上戯耕、二人において山根素瓢、素瓢と眼鏡の人の間が●久家代仕男。右から小谷節枝、倉久城、青戸悠児、三人において小林孤呂児、孤呂児と眼鏡の人の間が谷無閑。最後列左端から●小西雄々、多田千柳、湯原一机、速水陽子、三人において木村紅帆。右から遠藤笑水、松本舎人、松本水鏡、●神庭詩郎、福代天邪鬼、古谷風塵、一人において●田中蛙眠子。

本社五月句会

五月六日（金）午後五時
アウイーナ大坂

五月句会はゴールデンウィーク明けの6日参加者108名（投句9名を含む）にて開催された。初出席は加藤俊宣さん（京都市）。先ず先日亡くなった麻生路郎師の五女、西村梨里さんへ黙祷を捧げて始まった。

お話は木本夏さん。「花ものがたり」と題して、花にまつわるさまざまなエピソードや、川柳・俳句・詩などを紹介された。

佐藤春夫と谷崎潤一郎の花（千代子夫人）をめぐる「細君譲渡事件」のこと、日本では花といえば桜だが、古代ではウメであり、万葉集には桜の三倍もウメが詠まれていたこと、桜を詠んだ芭蕉の句の数々、子規の「鶏頭の十四 五本もありぬべし」をめぐる「鶏頭論争」のこと等々。最後に、路郎師、薫風師の花を詠んだ句を花の種類別に頻度を紹介してお話を締めくくられた。

月間賞は、檀原市の居合真理子さん。（司会―美籠・善純（協取り―蕉子・真理子）（受付―ふりこ・すみ子）（清記―勝弘）

席題 「捨てる」 岩崎 公誠選

捨てるつもりがないのに津波持つていく
最後まで捨てないでねと言つてある
捨てられて学んだ恋が今の妻
屑籠に捨てた昨日が騒ぎ出す
ふるさとは捨ててもよくを忘れない
国のためお金を捨てにゆく競馬
捨てるのが惜しく少しも片付かぬ
捨てるなんてモッタイナイとゴミの山
思い出が捨てたい物を捨てさせぬ
ブライドを捨てると心寒くなる
捨てるもの捨てたら風になりますか
妻と揉め先を越された捨てゼリフ
捨ててきた昔に未練つりのりだす
男性を捨てても残る喉仏
その時は捨てて逃げてと言つてある
地震から身辺整理しています
ところてんつると女捨てました
捨てて石がじわりじわりと効いてくる
墓残る故郷を捨てた悔いがある
意地捨てて男も老いて花咲かす
自尊心捨てたら見えるものがある
存在感消える煩惱捨ててから
悲しみは捨てられませんか瓦礫の地
もやもやを捨てる勇気がない私
バーゲンの値札は捨ててプレゼント

寿子 美智代 忠昭 無限 敏治 哲男
ルイ子 靖鬼 賢子 哲子 朱夏 昌紀 時雄 善純
扶美代 舞夢 アキ 一步 哲男 一風 昌紀 楓楽 昭
美花 玄也

何もかも捨ててあなたの腕の中
ごみ袋熱い想いは捨てられぬ
父祖の地を捨てて我慢の仮設小屋
ストライク紙を丸めて籠へ捨て
老い独り頑固を捨てて子に縋る
バーバなんか嫌い二歳の捨てゼリフ
悲しみを捨てる大きな深呼吸
住
呼び捨ての友一人減り二人減り
捨てられる前に必ず捨ててやる
シルクロードの涯へ未練を捨ててきた
鈍行の旅でトラウマ捨ててに行く
曲り角あたりに嘘を捨てて来た
人
これ以上捨てれば自分が残らない
捨てるほどお金があつて愛に飢え
地
菜の花の海に驕りを捨ててくる
天
軸
親を捨てても捨て生きたる野良の猫
兼題 「角度」 森村 美花選
それぞれの角度があつて五十年
ギリギリの角度で自分とりもどす
真心が角度変えたら見えきた
美しい角度でお辞儀しますか

弘風 富美子 いさお 正雄 唯教 蕉子 能子
滋彦 理恵 いさお ばつは よしみ 紀雄 楓楽 いわゑ
雅明 千里 千里 蘭幸

急角度もう原発はお断り

二つ折りの深謝へ命戻らない

わたくしの光と陰を知る角度

負けるまい病魔の死角捜してる

ぶち当たり角度変えと聞くと道

嫌な時は角度を変えてみる夫

帯締めをきりり斜めにしめて初夏

歳ともまあるくなつてきた角度

しかる時父は四角い顔になり

ベレー帽斜めに被つた自称画家

大空よ仰ぐ角度は無量大

三角にこだわりがある握り飯

悲しみの中45度の鯉のぼり

斜めから夕日こぼれる散歩道

角度変えて見たら美人に写る筈

逆立ちをすれば世間はこんなもの

地上から指示するはやぶさの角度

美しい君の笑顔はこの角度

三十度左を向いた好奇心

寂聴の風は角度もなくやさし

白い目が死角の位置でわたし見る

後期高齢傾いたまま生きてます

360度瓦礫にされたわが町よ

鋭角で切り込む妻の言葉尻

ライバルのジョーク鋭角に胸を射る

新入社先ずはお辞儀の角度から

直樹

賢子

富美子

深雪

朝子

理恵

よしみ

能子

美智子

保州

義子

富美子

よしみ

朋月

靖鬼

朱夏

賢子

弘風

修

弥生

(A)千代

希久子

深雪

淑子

楓楽

哲男

鋭角に生きてハンドルきしませる

晩節に若い角度で虹を見る

佳

少年の視野は三百六十度

ジュニアフレンドの角度にも幸あふれ

許す角度にコーヒー茶碗二つ置く

課長との角度なくなる屋台酒

津軽三味冬の角度を抱いている

人

測量士が角度測っている空気

地

アングルを変えたと海が風いでいた

天

光射す角度へひとは立ち上がる

軸

裏を衝く君の意見が光つて

兼題 「バランス」

藤井 正雄選

やしろべえ時々指で突いてやる

天秤に常に乗せてるアメとムチ

社会でのバランス取れず五月病

美しい声にバランス崩される

人の世のバランス狂う火のいくさ

平和主義とつつかずのヤジロペー

アンバランスのふたりととも仲がいい

バランスで呼ばれただけの燕尾服

蕉子

唯教

楓楽

美籠

希久子

正雄

寿之

太朗

朱夏

朝子

弘一

弘一

ふりこ

アキ

弥生

恭昌

美花

誠一

左足庇うと右足が拗ねる

佳

富美子

敏治

恭昌

いわゑ

朱夏

波乗りが下手で重心低く住む

表向きはバランス取れている夫婦

我慢したバランス実り金婚へ

生活のバランス壊す大地震

おもて裏バランス崩さない仮面

ピサの斜塔駆けそうなま七百年

バランスに飽き歩きたいヤジロペー

わたくしの元気ない日は妻はしゃぐ

シーソーの端を支える父の影

好投をすると打線が湿りがち

先頭を行くバランスは崩せない

バランスがとれてる母のまぜご飯

シーソーの支点に愛の芯がある

ピカソを観ると脳のバランス崩れ出す

バランスよく食べて老化に立ち向かう

二人してバランス取って八合目

足して引いてバランス保てます二人

愛情を天秤に掛け塩加減

金持ちのクセに貧乏ゆすりする

鯉のぼり上手に今日の風を読む

青汁を飲んでバランスとる五体

バランスの崩れを花に支えられ

浪費家の娘に始末家の婿が来た

八方に気配りすぎて胃が痛む

佳

左足庇うと右足が拗ねる

よしみ

善純

東吉

舞夢

美籠

淳司

黒兎

一風

哲夫

玄也

日の出

瑠美子

よしみ

昭

楓楽

紀子

理恵

弘風

誠一

蕉子

朱夏

いゝゑ

恭昌

敏治

富美子

ウーロン茶並べバランスとる幹事

耕 治

バランスを斜めから見る面白さ

滋 彦

バランスは申し分ないオール3

保 州

ベストバランスチャベルの鐘が遠き通る

森 子

人

想定外にバランス崩す日本地図

宏 子

地

バランスの見事ダヴィンチの絵呀える

朝 子

天

精神のバランス賢治から学ぶ

朝 子

軸

バランスが悪い定年後の歩幅

兼題 「狡 い」 池

森子選

原発の安全説いて遠く住む

哲 男

被災後は中国産と言う業者

(奥)五 月

割り勘になると騒いで倍は飲む

正 雄

怠け癖わたしの中の狡い虫

能 子

さくらんぼ小粒は底に並べられ

(久)千 代

向い風除けて二番手走ってる

耕 治

春の夜をその気にさせて逃げた風

朱 夏

真つ先に逃げて味方を楯とする

舞 夢

聞く耳と聞かない耳を持つている

無 限

横入りの大人見ている小さな目

たもつ

狡いあ座では中庸通さはる

ふりこ

どちらにも味方はしない風見鶏

扶美代

狡いと言うな少し賢いだけなのだ

昭

暇と金たつぷり持つて笑つてる

日の出

成り行きを見ながら意見裏返す

准 一

言い訳の引き出したんともつてはる

蕉 子

火達磨にならない位置で吠えている

富美子

イエスマン心の中は覗かせぬ

弘 一

ウエディングベル巧みな異と知らぬまま

美 籠

男と女狡いと思ひ合つてゐる

楓 楽

狡賢いのはもう一人の私

善 純

最初はグーあいつはきつとバーを出す

まつお

花の首狡い話に揺れている

楓 楽

記憶にはございませんを言い通す

(忠)千 代

後出して勝つてしまつた日の呵責

淳 司

場の空気よんであとから手をあげる

好

賛成も反対もせず風を読む

集 一

ずるいのは私本気で逃げている

ア キ

生きる為の狡さだ許すことにする

ダン吉

狡い嘘うまくつければもう大人

好

本心は包んで笑顔続けてる

ア キ

鏡から狡くないかと訊いてくる

見 清

佳

ときどきは嘘も薬味につかいます

富美子

本当の近道だけは教えない

郁 夫

狡いですがラストダンスを私と

哲 夫

ある時は弱い女になりますます

見 清

後出しのグーを責めてるチョキである

よしみ

みんなにいい顔するのでマドンナは狡い

蘭 幸

真ん中に割つて入つた隙間風

寿 之

地

ずる休みして大空に叱られる

無 限

天

範疇に宿す狡さも優しさも

無 限

軸

兼題 「迫 る」 村上 玄也選

真実に迫るとペンはすぐ折れる

千 里

核心に迫るとすべて先送り

雅 明

だからと暮らしたんだん死期迫る

房 子

万感に迫る郷土の津波跡

誠 一

締切りが迫りエンジンかかりだす

修

見通しの甘さへ厚い壁迫る

寿 子

迫りくる老いに抗う古桶の汗

いさお

琴線に触れる手前にある気迫

柳 弘

核心に迫ると波が高くなる

ダン吉

迫られて逃げ腰になる古希のラブ

敏 治

腹蹴つて拳式を迫るお腹の子

克 己

散り際のさくらに決断迫られる

(久)千 代

競りへ出す牛へ別れのビール抜く

哲 男

さし迫つて欲しいと思うものがない

俣 子

迫る青こばれてきそう五月晴

直 樹

目の前に迫る唇お受けする

弘 風

遺言に書いていてねと迫られる
危機迫る妻が正座で待っている

戦場のカメラが迫る人の業

真相に迫って傷を深くする

煮えたるハートが迫る崖つぶち

押し売りへ妻の氣迫が勝っている

終止符に迫られてから騒ぎ出す

絵文字見てやりわり迫る妻の勘

ひよつとこの愛に迫ってゆく阿亀

核心が迫ると椅子が揺れてくる

煮え切らぬ私に迫る妻のひじ

迫られてみるのも悪くない試練

核心に迫る男の面構え

迫真の演技に逃げてゆく情け

想い出が切なく迫る花言葉

頂点へ迫る手段を間違える

寂しさが迫る強がり言ってから

佳

夢にまで追いかけてくる棒グラフ

闇魔から身支度せよと迫られる

それとなく本音に迫る聞き上手

切羽詰まれば走る飛び越す木に登る

幸せにするのと正座で迫られる

人

禁煙を汚れた肺に促され

地

耕治

集一

見清

楓楽

ばっは

准一

公誠

誠一

アキ

郁夫

一風

美龍

柳弘

唯教

朱夏

まつお

楓楽

保州

紀雄

好

哲子

正雄

人

千代

幸せにするのと迫った過去がある

天

古都晩鐘明日香に迫りくる読経

軸

ちよつかいを出して結婚迫られる

兼題 「物腰」

小島

蘭幸選

コスモスのような物腰でした母

物腰はやらこうてもイケズです

余生ですすたすら腰を低くする

被災者と同じ目線で皇后さま

恥も汗もかいて物腰変わったね

不細工やもん物腰は氣をつけてます

親に似ぬ娘の物腰のやわらかさ

物腰も妻に似て来た嫁仕切る

かつこうだけつけて棒読みする謝罪

三猿に徹し二世帯悪無し

おだやかでない物腰でやって来る

アルバムに亡母の物腰まだ褪せず

影までが柔らかくなる丸くなる

物腰のまるさ苦労したんだね

ふわつとしたその物腰に惚れました

物腰に修業の跡が伺える

鍛錬を積んで物腰柔らかに

物腰はわたくし流に生きている

安全です安全ですと言っていた

集一

弥生

房子

誠一

堅坊

寿美

わこ

深雪

美智子

一風

茂

義

ばっは

求芽

隆彦

朝子

扶美代

克己

紀子

いわゑ

勝弘

お育ちが見える明るい受け答え

行住坐臥腰の低さは三代目

物腰から家庭の空気まで読める

物腰が柔らかくなって逝きはった

見て学ばない物腰の根本

鷹揚な物腰貯めてはるらしい

物腰もあんたはみんな優しくおす

物腰は低いけどつか陰がある

物腰のよさ学歴も職歴も

初体面もう物腰で負けている

ソフトな物腰春風抱いている

ものごしのひとつふたつは祖母ゆずり

ソーイングセット美しき物腰

佳

薄化粧ささり座つてささり立つ

おしとやか美女より美女のオネエサマ

物腰の低さへ神さまが宿る

呉服屋の物腰すし屋には向かぬ

丁寧なお辞儀譲れぬものを抱く

人

偉丈夫でなければならぬ仁王様

地

両殿下の物腰に救われている

天

海が見たか御夫妻のあの黙れを

軸

居谷真理子

みつ子

森子

みつ子

寿之

見清

楓楽

寿之

敏治

弥生

いわゑ

希久子

朱夏

扶美代

真理子

直樹

森子

茂

富美子

保州

人

千代

天

海

居谷真理子

告白

毎月24日締切・35句以内厳守
掲載は原稿到着順となります。
編集部

竹原川柳会(広島)

古田

太虚報

まだ高く跳べる気がする春の風
夢掴む弥生の空の大ジャンプ
人生は一二三でジャンプする
春ですなメダカもジャンプしたくなる
春佳き日ジャンプして待つランドセル
ジャンプしたつもりも弥陀の掌
ホップステップジャンプ双生児の娘が嫁ぐ
家計簿に姑がだまっつて足してくれ
まだ早い生命線をプラスする
まだこれからだ交わす盃喜寿祝い
絵葉書に一句をプラス春の旅
今の私に笑顔をプラスして生きる
もう半歩半歩をプラス夢を積む
てっぱんの恋の告白色模様
告白をしないまんまで発つホーム
告白をしてたら今は虹の道
負けたままです告白をした日から
昭和の告白真ん中あたりレクイエム
告白をしてチューリップうつむいた

あゆみ 淑子 現代 栄恵 慶子 静風 笑子 敬子 節生 伊三子 千代美 蘭幸 幸子 半徳 房子 汎美 一路 輝恵 比呂子

ただ二人愛の告白太宇宙
父母義父母揃って賑やかな仏間
誰よりも春を待つ赤い靴
上を向いて歩く明日はまた来るよ
つくしんぼ二本わんぱくに育て
言葉には裏も表も色もある

和歌山三幸川柳会 武本

丸椅子が逆立ちしてる準備中
今日もサドル無い自転車漕いでいる
木の椅子に座ったころの志
急がねば私の座る椅子がない
人間の軽さ知ってるパイプ椅子
椅子の向き変われば意見裏返る
あこがれた椅子が意外に寒かった
勝ち取った椅子で謝罪の初仕事
背もたれを外して自立したい椅子
日和見の椅子がぐらぐら揺れている
反り返る自慢話に飽きた椅子
折り合いのつかない椅子が軋み出す
まだ口は達者な母の車椅子
椅子の位置替えて直った不登校
座椅子から落ちた形でする昼寝
ハイレムの椅子は男のユートピア
痛む足庇ってくれる椅子は友
一夫多妻想像だけで腹が立つ
元彼のすまの庭の三輪車
憶測の噂が罷り通り出す
浮き雲を追って極楽ふと思う

民恵 厚子 栄香 千枝 史子 力 碧報

町子 豊 朱夏 絹子 和子 准一 みね 純子 八重子 美花 章子 理恵 義雄 孝子 かすみ 桂香 房代 正美 俣子 昇 菜摘

膨らんだ蕾と語る花の彩
譲られた席で想像する家庭
拳骨の中へ眠らす鬼の数
鬼の目の涙も涸れる不況風
いい顔になった仕事の鬼の数
看護師が日により鬼や慈母に見え
ぬるい茶で心の鬼を鎮めてる
リストラを告げる私は鬼の役

川柳塔おっぱい(香川) 川崎ひかり報

鬼も居て世間はうまく回ってる
巢立した部屋の掃除がまだできず
フォトフレーム別れてないと塵はらう
夏炬冬扇私もやがて燃えるゴミ
満塁を大掃除するホームラン
体内の掃除もせよと言うカルテ
路地裏にストレス埋める縄のれん
無心に咲き無心に散った路地の花
軋む音朝刊太郎は路地を行く
あの道も此の路地も好き故郷の道
一人つつ話しに入る路地の角
路地裏を通れば昭和魅る
心地よい春風受けて路地を行く
バス停も近くて便利路地住まい
叱られて泣いて飛び出た路地の裏
手の平を見せて自慢の生命線
つかむ手に蛸がすいつくからみつく

川柳塔打吹(鳥取) 野口 節子報

イセ 起世子 幹子 碧 次根 東吉 富武 夢子 当代 喜久子 保子 嘉平 美枝子 八重子 放任 弘 賢 はつ恵 よしみ いさむ あきら ひかり 楨元 重忠

介護には素手のぬくもり伝えた
知恵さかり親からもう手八丁
仲良しでいる距離手さぐりで測る
目標に向かうたんびにつつまずく
子の寝顔はげみに登る棒グラフ
私はね今日の目標寝て過す

貴恵
勝譽
くにこ

目標にした偶像がころげ落ち
目標が賞味切れしてきた寿命
目標は川の流れに沿ひ生きる
一年の計が決まらぬままに春
どの指も目標通り動いてる
はめてあげるともつと綺麗に咲く桜

泰山
善江
玲坊

勝ち負けは男を磨く研磨材
逃げの手を勝負の目には入れてある
白鵬に勝った横綱になれる
必勝を願ひ勝負のガイナール
農作業土の匂いに癒される
雪が解け土の中から路のとう

美知江
照彦
道子

喜びを土からもう農作業
腐葉土に命を懸ける菊作り
土ほぐす素手にはんわか陽が温い
親も子も無心にさせる泥わやく
嘘ばかりいっばい吐いて土になる
田植えした田んぼに家が建っていた

義人
節子
美ツ千

手を掛けた土を信じて種を蒔く
春を待つ新芽が土を盛り上げる
減多には日の目を見ない土踏ます

和子
滋
紀の治

春を待つ新芽が土を盛り上げる
減多には日の目を見ない土踏ます

美代子
たけ代
公恵

太陽が土の野心をふくらます
母という土から生まれ母の色

芳光
三津子

城北川柳会(大阪)

伊達 郁夫報

大切な人の笑顔にすくわれる
還暦の息子はのほの暖かし

美智子

7号の服大切に置いてます
捨て切れぬ鏡まもって坂下る

栄子

春息吹くあちこち剥ける雪化粧
ラスト迄諦めないとい決めました

千恵子

小道具も異色自慢の京料理
化粧して賞味期限に蓋をする

千加

八百長に化粧回しが泣いている
母元氣バロメーターの薄化粧

とし子

正直な答を返すコンバクト
孫共の入学祝悲鳴上げ

隆充

山崎豊子異色作家だと思ふ
ラストだから二花ぐらい咲かせたい

寿子

思い遣るころろ大事と子に教え
大切に育んでます人の縁

東吉

化粧塩麴事の鯛の尾が跳ねる
暗黒の時代に光る鶴彬

ルイ子

体重計壊したい日もございます
牛の群おや一匹は熊らしい

勝弘

孤独死が残して行つた畳絵図
九回の裏で男の値が決まる

満作

アンパンのヘソヘラストを飾る梅
大切にしている腐れ縁

克己

シングルマザー子には見せない夜の顔

正風

弘風

宏

集一

野鶴

和夫

賢子

老いたれと言えど横座にかく胡坐
人生の楽な近道知る手毬

川柳塔みちのく(青森) 小寺 花峯報

佳句地十選 (5月号から)

永原昌鼓

寒空に吹かれ迷わぬ風の糸

千代美

いい味が出ている九十歳の皺

完司

笑顔という宝は惜しみなく使う

美花

幸を呼ぶ心の窓は開けておく

七朗

雑音に惑わされぬ独楽の芯

一風

カラオケへいくといきいきする音痴

留里恵

タンポポの綿毛チャンスに乗っていく

無限

子育ての頃はいっばいあつた夢

いわゑ

天災が哀しみ色に塗りつぶす

美穂

ひと芝居打って見舞の客帰る

典弘

大切な返事ひと晩寝させよう

柳弘

置き去りにしていませんかと和の心

志華子

生かされて今年も友と花の下

一歩

大切な人のためなら火の中も

仁

結末を読まずに歩む蟻の列

直樹

ハイボールわが青春が甦る

倫子

ニートから異色の作家が現われた

たもつ

枕元に置いて寝ているランドセル

朝子

いいことがあるさうだから坂のぼる

修

花好きの母のラストはひなの宵

朝子

古希すぎて近道はせず日々好日
もくもく焼香続く突然死

舞扇をかざして踊る喜寿の人

近道はいらないいつもマイペース

少年の瞳に舞い込んださくらんぼ

舞う程に津波おしよせ町おそ

すなりと胡坐に入る下心

かあさんの胡坐に寄ってくる子猫

現代子正座はできぬ長い足

座布団へあぐらも慈悲のほとけの眼

ビールスを運んで嫌な渡り鳥

脳天の湯気が妥協を拒んでる

成功に近道はなし自己鍛錬

極楽の近道弥陀の掌に絶る

手胡坐でものを言うてる反抗期

川柳らくだの会(鳥取) 岸本

ありったけ肩書付けて名刺出す

溪流釣り今年も逢えた友と稚魚

公園に子等の声なく草茂る

七十五日噂話も川流れ

よく茂った杉が花粉を溜めている

代役はどこにもいない僕の母

人の世と川の流れはわがまた

村の役すんで明日は引き継ぎ日

ふるさとの遊んだ川が浅くなり

贅沢が魚も住めぬ川にする

時ならぬ雪にふるえるおひなさま

大海を信じて川は流れゆく

信子

つとむ

初枝

ひとし

芳生

隼人

則彦

ふさゑ

愁女

花匠

井蛙

黙人

岳水

慕情

効

大鯰

寿賀子

都

玲子

宏章

紀子

清

富貴子

せつ子

仁子

孝子

邦昭

川柳塔唐津(佐賀)

仁部 四郎報

失って分かる女房の有難味

商談もデートも昼食釜めし屋

素朴さの魅力愛しい蔵椿

老いの役ゴミ捨てそれに風呂洗い

1の2のAのBのが子の住所

尻尾振りつつああ嫌だあ嫌だ

高知川柳社(高知)

小川てるみ報

鬼の目に涙を誘う人の情

鬼の面美酒の前では恵比寿さま

垣根越しボールを睨む鬼瓦

八百長メール土俵の鬼も青くなり

まだ鬼が来いとは言わぬ渡し舟

まず一献上手に鬼の骨を抜く

心中の鬼へ朝夕般若経

豆つぶて黙して受ける鬼の自負

川柳ふうもん吟社(鳥取) 夏目

一稔報

僕が修羅抜ける出口で神よ待て

謝って人間らしい顔になり

生と死の運命を分ける崖つづち

崖つづちやつばり金が要るようだ

蛇口をひねりはしりに流す今日の鬱

悲しみが詰まる新聞紙が重い

飯の世の出口ひと口水を飲む

添乗員土産物屋にリードする

リーダーの資質今こそ問われてる

お互いにリードしされて今日がある

子は巣立ちのはしりの椅子も二つだけ

農作業天気予報がリードする

忍び足妻が出口で仁王立ち

誰がする地球汚さぬいいリード

老々介護出口は見えず今日も暮れ

崖つづち無一文から這い上る

コンマの差リードしたから金メダル

心配をするから愚痴がボロリ出る

大ナマス暴れて日本屋つぶち

二枚戸は出口入口鍵が決め

白足袋を女の誇りこめて干す

税務署も知らぬ出口が一つある

未練あるこの世出口はまだ要らぬ

非常口想定外に間に合わず

崖つづちここが男の見せどころ

不景気のトンネル出口まだ見えず

俺カエル出口あるけど出たくない

出口に監視カメラのあるお店

上司とてリード上手と限らない

二次会はカラオケ好きが賛否問う

老いてなお嫁のリードに逆らえず

妻リードされて喜ぶ夫もいる

リタイヤをして毎日が日曜日

はぐれ鳥今崖つづちだと思ふ

孝二

あしび

節子

凱柳

清信

茂登子

雅女

重忠

千代

回春子

菊香

とも湖

穀

房江

善徳

秀四

昌鼓

稔

蟹郎

妻子

はつ江

行男

清帆

由美子

弘康

一稔

富柳会(大阪)

古田

千華報

真心を送る小さいな小さな箱

佳子

送つては迎えて春の学問所
菟弱に叱られました志の無さ
それぞれの道に踏み出す十華の子

星凍てし流れる雲に身を隠す
亡母の夢生きてあげたし水仙花
あやとりと話し尽して送る駅

唾グクリ椿の首が落ちる時
ベルバラの世界を帰る炊事する
曲り角見送る背にありがとう

送つてく傘の中には愛ひとつ
三日坊主の夢はいつでも多色刷り
指切りを信じて送る風の駅

先生に告白して送る男の子
母は猿父は夢ごと食べられる
人形でいた半生は親がいた

ハンカチに包むとロマンさくら色
仕送りの封は亡父に見せてから
完全に燃焼しても残る灰

人生は酒とロマンと無二の友
母の愛きつしり詰めて宅急便
手許にはロマンの欠けただけ残る

赤い恋深く沈めた日の覚悟
埋み火を煽って未来ひるがえる
耕した土で芽が出る日のロマン

ローズ川柳会兵庫

木村貴代子報

ソロバンは抜きで楽しい集いです
はなやかに喋って食べて若返る
人知越えビル屋上に船を置く

欣之 登子 彦次 壽峰 深雪 アキ 高鷲 伸雄 千恵 寿之 信子 鬼焼 武人 奏子 千華 美代子 紅紫朗 七朗 田鶴子 操 惠 華 よしみ 森子

ソロバンに合わせ仕事わんさある
有り難うだけは出し惜しみ止めた
そろばん勘定大事心売らぬよう
父の遺言彼屋会はにきやかがいい
杖ついて居ても心ははなやかに

八尾市民川柳会大阪 富西 宮西 弥生報

天災は忘れた頃の落し穴
もう一度咲こうと思う津波あと
過去捨てて白紙の明日へ出直そう
白紙にはもどらぬ愛が零する
古里はとわにわたしの拠り所

原発の依存は白紙に戻さなきゃ
呱呱の声夢も希望も春よ春
夕焼けも担いで帰る老農夫
魂まで探れないから続いてる
特別の春へ崩れてゆく五官

なんとか成る何とかしようとききてる
ふる里へ億い昭和の一行詩
被災地へ情けを積もう春よ咲け
ブライトを脱いだらしょうもないわたし
白紙から生まれ白紙になる命

まだ白紙派遣期限がもう切れる
引き潮はきれいな思い出まで流す
有難う父の背和む介護の手
昔なつかし釜めしがある道の駅
体格は立派ですけどフリーター

川柳さやま兵庫

遠山 可住報

年代 てる みつ子 義子 藍 柳伸 秋子 いさお 扶美代 五柳 紀雄 留里恵 耀一 あかり 賢子 寿鶴 華 朝子 欣之 草風 弥生 久子 美緒子 二英

やっと今大地に触れる試歩の杖
流された小石に角の無い老後
就職のきまつた背広頼もしい
泣き虫が出世頭のクラス会
人と人つなぐクロネコペリカンも

漬け物の汁も付いてる母のメモ
集団で海越えてくる和食好き
グルメ好き苦手料理も少し減る
宅配便仏さんにもおすそ分け
メモ片手分量計る珍料理

心身をケアしたりハビリ若返る
長生きに薬膳料理医者知らず
うす味の手づくり料理に慣れた舌
裏方に徹した人の顔がいい
川柳塔鹿野みか月鳥取 土橋

良い教師勉強よりも先ず秩序
国の秩序試した来たか大津波
日本国秩序ただしくくる列車
このまんまワインを抱いて眠りたい
ワイン飲む慶びの手がふるう

地下室でワインぶつぶつ騒ぎだす
招かざる客がワインを褒めちぎる
負けて勝つ勇む心の置き処
女房の前なら出来る勇み肌
もう少し我慢足りない勇み足

北国を勇んで発つて今の幸
復興へ勇みながらも一歩ずつ
地震津波神も時には悪さする

純子 文子 美紗子 哲男 真由 啓子 多美子 開子 可住 かはる 幸子 照代 美智子 稠民 螢報 露子 惣子 重忠 節子 京 美代子 満 実満 美ツ千 (古)いさお (古)和子 小 鹿 くに子

悪筆も個性的だと褒め言葉

悪人にならぬ法話に手を合わせ

悪いわいと晴ればれとした遅刻

赤を着て悪運強いひとでした

福耳は悪を濾過してから拾う

お供えの団子に悪は似合わない

立ち上がる勇氣を春に貰う花

勇み足だった結婚式の予約

勇むけど脳も手足もついて来ぬ

ああ雨か勇んで準備したけれど

ワイン呑み浮かれてきたかよく喋る

焼酎もワイングラスで飲んでる

言いなりに飲んだワインに酔う脆さ

サラサラの血へ玉ねぎのワイン漬

梅漬けのワイン寿と名づけ

川柳塔なら

坊農 柳弘報

担がれた会長の椅子揺れている

人という花園刺も毒もある

三姉妹器量好しから売れて行く

夢にみた姉さん被りの新世帯

米俵担ぎ鍛えた心技体

この国を担いでくれる人を持つ

国担う若者なのに職が無い

知ったか振りしすぎて皆に担がれる

担がれているうち人は咲いている

花園ではと五感が冴え渡り

花園は僕の青春燃やした地

担がれて座った椅子にある試練

照彦

久枝

孔美子

八重

彩子

盛桜

永子

宣子

弘子

房子

かおる

みどり

富久江

螢

隆之

萌子

紀雄

とし子

満作

博一

芳子

千梢

次郎

ふりこ

勝弘

弘風

花園で春の音符が踊り出す

花園で夢を見ている車椅子

母親と同じ苦労をして長女

担がれた期待へ力不足知る

験担ぐ長い白毛は抜かぬまま

親代わり姉に頭が上がりた

何かある姉のエプロン涙あと

輕輕と担がれ嫁になりました

花園はこころの中にある通路

失恋の数だけ通った花の園

花園で生まれた蝶の平和ボケ

幸せな結婚ハッピーに離婚

あねさんを気取る女の太っ腹

姉さんのうしろで安心縄電車

ハッピーを見つけた満月の夜に

花園の花一本が左向く

ハッピーになるまでトイレ磨いてる

ももさくら姉さんやと母になる

ハッピーエンドの輪の中にある目向はこ

一摘みの幸せでいい君が居る

担ぐ荷が出来て男が引き締まる

花園で天女と恋をしてみたい

お姉さんについて憧れる少年期

あかつき川柳会(大阪)

宮崎シマ子報

木の箱におさまる迄は前向きに

針箱の蓋を開けると亡母に会う

箱ものをつくって鼻は上を向く

妻からの玉手箱には強壮剤

洋子

よしみ

真理子

一風

恭昌

寿美

富子

理恵

惠美子

柳弘

成子

順啓

朝子

比呂志

森子

弥生

克己

道子

隆盛

寿之

あかり

國治

良一

喜八郎

朝子

敏子

シマ子

速すぎる返事になぜか不信心

速達の便りありがたと思う

急速冷凍グツと構えている鮭

危機管理速断できぬ菅総理

だいたいはい人速く逝つたはる

速さ競う列島どこへ行くんだろ

口コミが列作らせるたこ焼き屋

居候口をすばめてかしこまる

しなやかに春を口説いている詩人

父の目と母の口元足せば僕

被災服口より物を言うらしい

古希すぎてまだ楽しみの登山口

言い訳はせぬ口元は一字

舌下錠甘い男にしてしまふ

目力に存在感のある無口

星空にギリシヤの神と詩を語る

星空を求めて山の露天風呂

星空の讃歌を唄う日は来るか

満天の星も奏でるレイクエム

甦る雨にも負けずある粘り

節電に温度落として風邪をひく

どの街も心やさしい募金箱

汚染水魚場を無視する怖い国

汚染水海に流すのやめてんか

後からせつつかれてもマイペース

黙祷をしても還らぬ数多の死

人災だ想定外の救援を

五十肩病名だけが若返る

みちのくへ桜前線急いでくれ

すみ子 太郎 ばつは 正 勝弘 ダン吉 祥昭 たかこ 柳弘 いさお 紀雄 穩夫 秀夫 克己 征子 宏 忠昭 一歩 君代 和雄 廣子 野鶴 美世子 篤 紀乃 一行 桃花 哲男

はたる川柳同好会(大阪) 水野 黒兎報

列島の東の地図をかきかえる
東への風に希望をのせてます
就活し東京砂漠に一人住む

久子
美智代
長一

懐の深さへ隣届かない
通り抜け奥までみんな春ですよ
目の奥の火花は嫉妬かも知れぬ
水平線の彼方ながす鎮魂歌
奥行きがあつて気持ちに通い合う
残高、奥の手お貸し願います
にこにこまるで俵の恵比寿さま
流れ流れてまるで人生木の葉舟
問診が見すかすように責めてくる
返す気はまるでないのに借りる金
春の風まるで私を咲かすよう
赤ちゃんが生まれタンポポ桃の花
ダイケアの花見弁当えがお咲く
嫉妬心誘発させた花の罪
一輪の花挿し今日を立ちあげる
根性を見事にみせて花吹雪
逆光に寄り添う花と影法師
花束を抱いて旗振る晴れ舞台
一円が余る一番やつかいだ
計算をするから生めぬことになる
四捨五入生きる指針を変えてみる
女心計算できる魔力持ち
計算づきのお世辞と知らぬ有頂天
計算はしつくされてる花吹雪
計算が合えば赤字となる家計

大輪
よりこ
美羽
あきこ
ほのか
緑良
めぐみ
輝子
保州
准一
登美代
愿
よしこ
泰女
徑子
寿子
和香
利治
紀久子
智三
富美子
佐一
俣子
精子
英子

山坂もなんのそのとは若い頃
山坂を越えて掴んだ今の幸
還暦を過ぎて厳しい坂である
まさかの坂幾度越えて来たことか
ゆつたりと余生楽しむ老いの坂
どんと来い坂で鍛えたど根性
札の雪ひらひら降って消えてゆく
優しさか今も漂う白き封
財布から札がひらひら逃げたがる
保安院ひらひら変わる舌の先
ひらひらとセシウムがとぶ春の空
春ですす青い時計はよく狂う
流れ矢が当たって何もかも狂う
原子炉の狂気の沙汰はまだ続く
見るだけで狂ってしまう大津波
旗色が変わり序列もみな狂う
狂いそう本の中へともぐり込む
相性がよいとみだのにすれちがう
相性は良いも悪いも相手なし
相性は三三九度の後に出来
思うことビタリと合ってわつはっは
相性がいい折り紙の角びたり
ピーナッツの私と柿の種の君
妻からのメール命令文で来る
メールより文字で咲きたい恋の花
のし袋中身を超える冴えた文字
さよならの文は短い方がいい

政子
幸
博子
幸代
ちえこ
左余
とも子
禮子
長吉
民子
知恵子
たけし
千里
昌枝
涼子
桂枝
久枝
薫
昭子
注湖
畔
ゆき
芳山
浜丘
幸子
美智子
茂美

東北へ西の桜の応援歌
東から悲しみの波打ち寄せる
金バッジ保つためなら深々と
アメちゃんを配る私の保身術
年金の元はまだまだまだ死ねん
したたかにまだまだ生きて闊歩する
老骨もまだ良いダシが出るようだ
まだまだと安全神話信じて過ぎ
頂上はまだまだ先の古桶の春
四つん這いにもなれまいて癪な歳

勝
黒兎
契子
正子
公子
幹治
春代
信男
順子
純子
長一

川柳花の輪(大阪) 妻谷 重風報

川柳花の輪(大阪) 妻谷 重風報

地下深く何を怒ってマグマ噴く
喜寿近いつか母似の深い皺
七十年喜怒哀楽が刻む皺
次の一手寡黙な父の深いよみ
持ち味は氣遣い良しで笑顔良し
三代目持ち味なんてという気概
持ち味を生かして励むボランティア
急ぐとき突然とび出す国訛り
結論は年末まででいいんだよ
幸せな時間は急いで通り過ぎ

敬子
楽鬼
一幸
昭好
重風
勇太朗
薫
克衛
泰子

この坂を登れば私丸くなる
旅立ちへ坂の桜がへばりつく
震災の坂はみんな越えて行く

大輪
よりこ
美羽
あきこ
ほのか
緑良
めぐみ
輝子
保州
准一
登美代
愿
よしこ
泰女
徑子
寿子
和香
利治
紀久子
智三
富美子
佐一
俣子
精子
英子

山坂もなんのそのとは若い頃
山坂を越えて掴んだ今の幸
還暦を過ぎて厳しい坂である
まさかの坂幾度越えて来たことか
ゆつたりと余生楽しむ老いの坂
どんと来い坂で鍛えたど根性
札の雪ひらひら降って消えてゆく
優しさか今も漂う白き封
財布から札がひらひら逃げたがる
保安院ひらひら変わる舌の先
ひらひらとセシウムがとぶ春の空
春ですす青い時計はよく狂う
流れ矢が当たって何もかも狂う
原子炉の狂気の沙汰はまだ続く
見るだけで狂ってしまう大津波
旗色が変わり序列もみな狂う
狂いそう本の中へともぐり込む
相性がよいとみだのにすれちがう
相性は良いも悪いも相手なし
相性は三三九度の後に出来
思うことビタリと合ってわつはっは
相性がいい折り紙の角びたり
ピーナッツの私と柿の種の君
妻からのメール命令文で来る
メールより文字で咲きたい恋の花
のし袋中身を超える冴えた文字
さよならの文は短い方がいい

政子
幸
博子
幸代
ちえこ
左余
とも子
禮子
長吉
民子
知恵子
たけし
千里
昌枝
涼子
桂枝
久枝
薫
昭子
注湖
畔
ゆき
芳山
浜丘
幸子
美智子
茂美

川柳塔わかやま吟社 川上 大輪報

川柳塔わかやま吟社 川上 大輪報

うつむいた胸の奥から炎の叫び

克子

この坂を登れば私丸くなる
旅立ちへ坂の桜がへばりつく
震災の坂はみんな越えて行く

大輪
よりこ
美羽
あきこ
ほのか
緑良
めぐみ
輝子
保州
准一
登美代
愿
よしこ
泰女
徑子
寿子
和香
利治
紀久子
智三
富美子
佐一
俣子
精子
英子

山坂もなんのそのとは若い頃
山坂を越えて掴んだ今の幸
還暦を過ぎて厳しい坂である
まさかの坂幾度越えて来たことか
ゆつたりと余生楽しむ老いの坂
どんと来い坂で鍛えたど根性
札の雪ひらひら降って消えてゆく
優しさか今も漂う白き封
財布から札がひらひら逃げたがる
保安院ひらひら変わる舌の先
ひらひらとセシウムがとぶ春の空
春ですす青い時計はよく狂う
流れ矢が当たって何もかも狂う
原子炉の狂気の沙汰はまだ続く
見るだけで狂ってしまう大津波
旗色が変わり序列もみな狂う
狂いそう本の中へともぐり込む
相性がよいとみだのにすれちがう
相性は良いも悪いも相手なし
相性は三三九度の後に出来
思うことビタリと合ってわつはっは
相性がいい折り紙の角びたり
ピーナッツの私と柿の種の君
妻からのメール命令文で来る
メールより文字で咲きたい恋の花
のし袋中身を超える冴えた文字
さよならの文は短い方がいい

政子
幸
博子
幸代
ちえこ
左余
とも子
禮子
長吉
民子
知恵子
たけし
千里
昌枝
涼子
桂枝
久枝
薫
昭子
注湖
畔
ゆき
芳山
浜丘
幸子
美智子
茂美

長柳会(大阪) 坂上 淳司報

見た目より短気瞬間沸騰器

政子
幸
博子
幸代
ちえこ
左余
とも子
禮子
長吉
民子
知恵子
たけし
千里
昌枝
涼子
桂枝
久枝
薫
昭子
注湖
畔
ゆき
芳山
浜丘
幸子
美智子
茂美

孫二人頑張り運ぶ空のカゴ

開化する試練乗り越え果立つ難くよくよとしてもせんでも春はくる

宅配で届く中味は母の愛

好きですと書いては消したラブレター

ルンバ見てヤル気を出した居候

このとりやつと我が家へ春運ぶ

被災地へ笑顔を運ぶボランティア

升酒の香り楽しむ春の宵

角とれて亭主の顔も丸くなり

仁王像四角い顔が怒りそう

桜餅お腹いっぱい春の色

堅物を四角四面に構えてる

塩をなめ枳を片手にウサ晴らし

我が夫は顔は四角で頑固者

寅さんの四角い顔にある昭和

くよくよは捨てて気ままな春の旅

運ばれた善意が癒す被災の地

お豆腐をぐずぐずにして春の鬱

肩肘を張って四角に身を守る

基盤の目の街で歴史に出会う旅

電子音楽を運んで来たのかな

とんでもねーガキが入試のルール無視

四すみまで気配り丸くいく秘訣

青春の味が檸檬にてんこもり

この丸い地球で四角張らんとこ

四角から丸になるまで修行積む

譲れない自負が豆腐の角にある

エミ
登美子

光弘

正一

正博

ふみ

孝代

たけし

幸子

よしお

輝子

ヒロ

モコ

洋二

武男

芳野

英美

和代

けい子

加修子

正美

和子

久美子

神の目が守る乳房を含む類
丸四角足して二で割る佳い夫婦

川柳大阪

長井

善純報

借金を残して先に逝きはった

ご先祖が残してくれた命の灯

無難作に宇宙に残す化学ゴミ

あの時に好きだと言えば悔い残す

子や孫に足跡残す道標

家族葬希望とメモに書いておく

俺様はかげろうである残さな

残り火に時が拍車を加速する

喪めすぎて三日も同じ残り物

朱に染まる余白残して舞い終える

リビアでは法律抜きで金を撒く

公然の害にはならぬほほにキス

百葉の長も過ぎると害を呼ぶ

害のない男になつてしょぼくれる

矢印の通りに歩き害もない

筋書きのない災害がやって来た

世界には飽食の国飢餓の国

住む世界どうやら違う俺お前

立ち飲み猫背が似合う新世界

僕の妻世界一だと思ってる

一慧
直樹

笑風

彦太

川童

勝弘

義明

美花

和

万紗子

いつみ

柳弘

紀雄

信醉

一風

朝子

まつお

芳香

五月

照月

哲矢

一步

喜楽

核のない世界を叫び続けたい

川柳塔きやらほく鳥取大塚

善純
恵子報

笑え笑え病とばしてまた笑う

妹が私の一歩前歩く

自分史の裏を剥がしてみたくなる

出産祝なくて不祝儀袋へる

一歩ずつ先輩の後追っている

余白には華やき誘う朱を選ぶ

強がって迷惑かけて生きてみる

想い出し笑いでポストから帰る

一年の目標たてて日々過ごす

昨日より冷える膝のひとり言

日を追うごとに老々介護耐えしのぶ

右肩に居座っているじやまものよ

豪雪をかよく待っていた花芽

争論に知った言葉すべて出す

春ですわ太鼓の音を夢現

避け枝に蕾みいという沈丁花

南大阪川柳会

吉川

善美報

共働きホームヘルパー交代制

夫逝き一緒に泣いてくれた人

外国の支援へありがたうを言う

震えない大地に何時も感謝する

ありがたうひと言葉で輪にとける

ありがたう桜前線北上中

そばに居てくれるあなたに有り難う

ありがたう涙のにじむ卒業歌

善純
恵子報

亜弥

未延子

千代

寿々子

春枝

てい子

恵子

瑞枝

晴枝

紀の治

初枝

麗

ふみ

喜周

鶴子

柳弘

柳弘

柳弘

柳弘

柳弘

柳弘

お見舞の優しい嘘へ有り難う

ありがとう素直に言える人が好き
誰にでも愛想笑いの腹の底

つらいから作り笑いで耐えている
真夜中にも含み笑いのうまい酒

二人共ボケたら笑う外はない
笑ったら余計に恐い厚化粧

笑うだけ笑うと腹が減ってくる
あげるものないから笑顔差し上げる

迫真の演技の中にサスペンス
ミステリアスうちの床下収納庫

預金ゼロ妻が支えるサスペンス
埋葬の牛や鶏怨み節

学童が瞬時を避ける避難先
笹舟の流れる先のサスペンス

大つなみ見るに堪えないサスペンス
サスペンスで終ってほしい大津波

さくら便りも被災地は氷点下
くぎ煮たく地震情報さながら

百歳のしゃべる言葉にある重み
日の丸の旗を仰いだことがある

次々の救援物資にやつと笑み
筒抜けているのも知らず白を切る

短か目のズボン履いてるやる気だな
引き出しの奥の内緒に陽をあてる

おかげさ今年も花見出来そう
新調のスーツとすこい春の四股

川柳茶はしら(愛知)

板山まみ子報

生き様も見事執筆から学び

(吉)幸子

清

忠昭

昌紀

なきさ

弘泰

一步

栄子

和雄

集一

太郎

ばっは

郁夫

正春

憲太郎

志華子

勝弘

物価より命の価値が低すぎる

散歩から帰るとネギが置いてあり
警鐘にしては犠牲が大きすぎ

カタクリの花も驚くカメラの目
買物ついでが真剣土筆摘む

青空の大きな富士とVサイン

川柳クラブわたの花大邸 西川

携帯なくて世間の声が素通りだ

女房のセット気付かず又げんか
この家に鬼より怖い妻がいる

えこひきしない太陽あつたかい
幸せに暇を食べてる日回ほこ

被災地に国境もなく輪を広げ
人の子が牛のミルクで育てられ

小さな命をしつかり抱いた救助の手
ブランドの和牛横目に赤札を

はろ酔いの調子はずれの唄がうけ
悲しみは声を出し合いわかちあう

高額でもいやされるバンダちゃん
幸せは妻が笑顔で待っている

子の為に母は鬼にもなる事も
ほろ酔いに待っていたのは鬼の面

鬼の留守そつとワインの栓を抜く
札束に信念曲げず鬼を斬る

大震災生きたる気力を試される
ごめんネと言ったら取れた鬼の角

信頼を解くと心に穴があく

抱き合つて奇跡よろこぶ避難民

雅美

迦行

美千代

かつ子

百合江

まみ子

義明報

晴美

浩三

孝子

和子

ますみ

たえ子

美代子

知佐子

民

縄のれんくぐると鬼も人となり

はびきの市民川柳会大邸 徳山みつこ報

石頭薬呑んでも治らない
一石を投げて相手の腹探る

転がってまた転がって石丸くなる
そのうちに大器晩成路傍の石

花も実も私大好き桃ファン
今日のキスビーチミントの洒落た味

桃源郷さがす地図には載ってない
甘酒にすこし酔うて桃が咲く

善人になれそう桃の花が咲く
百選の棚田帽子に土筆摘む

不満ないが満ち足りているとも言えず
満足の笑みをたたえて着地する

人の和を保つ嘘ならこ満悦
この辺で満足ですと悟ります

満たされた思いで帰る墓参り
シャツ一枚干して淋しく一人住む

七人の敵と戦う汚れ
寒いのににシャツ一枚ではしゃぐ人

派手を着て旅人になるアロハシャツ
Yシャツにネクタイやめて自由人

形状記憶シャツは賢くなりました
ペアのシャツ恋人みたいババとママ

Tシャツにジーンズ爺ちゃん無理してる

西宮北口川柳会(兵庫) 小林

波立てて騒いでみたい池の水

一風

アヤ子

庸佑

敏

久仁子

千鶴子

光男

悦子

美代子

ダン吉

美喜

登志子

一壺

猿杓

フジ

章司

尖ったペンが時どき吠えたがる
 醒めた眼で騒ぐ主人を見る猫
 騒がしいと一喝入れて客ともめ
 負け犬の遠吠え三途まで響く
 鳥さわぎ実を喰われると落ちつかず
 クラス会下見のはずが盛り上る
 騒がずに象の時間を信じた
 あの馬鹿と社長が消えてから吠える
 やえるのは家の中だけにしている
 わり場ない悲しみに吠えてき
 末席で吠えるチャンスを狙ってる
 半歩だけさわぎの渦の外に居る
 叫びたい吠えたいだろに津浪跡
 被災地の遠吠えに泣く臘月
 うちの犬ピアノに合わせ吠えている
 思い切り吠えろ悲しみ閉じ込めず
 切り取り線活用すれば光る趣味
 一直線男が受けた向う疵
 線引きをされたら消えていた個性
 晩鐘の折りが残る地平線
 五線紙から春の小川が流れ出す
 魔線にしないで欲しい旅が好き
 ネット社会に一線のない不安
 親に似ず線の太さが頼母しい
 のらりくらりと本音は言わぬ美人ママ
 内蔵助のらりくらりと時を待つ
 一病とのらりくらりのおつき合
 のらりくらり恋の季節のすんだ猫
 呱呱の声にのらりくらりが自覚する

哲男 いたる 基輔 蓄水 佐紀子 弘子 哲夫 茂 勝弘 浩司 秋果 直 てる キヨミ 順子 里こ 武臣 敏夫 折抗 朋月 比ろ志 歳子 美津子 嘉代子 毅 盛夫 求芽 耕治 光久

蛇行する春が残した深い傷
 言い逃れるから口がひん曲がる
 ビンとこぬタウンページのコーシヤル
 花束も男も照れてバスに乗る
 水一滴日本の心通い合う

岬川柳会(大阪)

八十田洞庵報

桜咲く日本を地震大あばれ
 日本地図を変える未曾有の大津波
 つわぶきに春日の照りに歩進む
 遠い日に旅した景色様変わり
 希望の日まだ近くまいぞお浄土へ
 天災は仏も神も目を閉じる
 加齢するたびに思い出遠くなる
 鉢巻を心で締めて被災地へ
 金まみれ党内亀裂どうするの
 清い海汚し不安な日々食
 震災の被災地思い胸痛む
 花よりも放水効果待ち望む
 震災へ忍耐の春動き出し
 大津波春の訪れ止められず
 北の旅重い土産は宅配で
 苦しみのスランプ越えて進歩あり
 み佛は化粧せずとも器量よし

川柳塔さかい(大阪)

村上

玄也報

美籠 忠 邦宏 ひとみ 千代 富美 和美 洋子 桜琴 和香 峻史 年子 茂平 清一 悦子 圭子 富美子 貞夫 利武 寛 洞庵 雅明 童之介 のん子

僕が居るだけで汚れていくこの世
 ばら撒きの人気取りから蹴躓き
 一遍で止まらずくしゃみ五、六回
 無視されてメラメラ闘志わいてくる
 勢いで賛成したら一人だけ
 型くずして勢いの見えぬ顔
 人気取りなんかではない百億円
 虚勢張る男の好きを捨て白詞
 この世しかない和尚も知っている
 幕引きの時期が見えない最盛期
 国難へ勇み足など気にしない
 勢いのある字で回復の便り
 満開のさくらこの世を春にする
 真実ちゃんに続く佳菜ちゃん人気者
 エコエコの勢い萎む放射能
 北国からライラック咲くいい便り
 明日の朝この世にいと限らない
 気負わずに運に任せて生きている
 飢餓を知るウチらはちゃんと生き延びる
 機転きくうるさい妻がいてくれる
 期待され鬱陶しいと家を出た
 とうさんと喧嘩が出来るものこの世
 気持よく運針進むいい季節
 裏の顔だあれも知らぬ人気者
 うまいの一杯食ってこそこの世
 勢いはいいけど逃げ足も早い
 幸せなこの世にしがみついています
 この元氣退屈してる暇がない

愿 玄也 天笑 千代 さくら 公誠 五月 好 時雄 誠一 清晋 深雪 月子 雅子 健吾 舞夢 扶美代 としお みつこ 像山 澄空 かりん 綾乃 冬虹 半銭 世紀子 敏治 朋月 日の出

春風に背中おされて手術台
人気落ちプレミアムやめ発泡酒
ポツクリと逝くには惜しいのがこの世
篤子 山彦 俣子

倉吉川柳会(鳥取) 竹信 照彦報

呼べど叫べど死んだ男は還らない
春を呼ぶ春吉鳥がまた来ない
津波から呼ばれることがない様に
間違つて呼んで赤恥かきました
呼びものはやっぱりパンダ上野かな
眼鏡かけすべてを見たど勘違い
停電はすべての人を暗くする
元気です頭以外はすべてよし
内視鏡へそくり運勢すべて見え
すべて欲しい器量に頭脳八頭身
放射線作物すべて廃棄させ
余生なるすべて此処から自由域
足るを知り東日本へ手を合わす
足るほどに聞いた安全な原子力
足らずとも足りる暮らしへ母の知恵
花見酒足るほど飲んでばやし節
被災地の惨状思ひ足るを知る
避難所は暮らしに足らぬものばかり
にんげんの林ウルシやイバラやら
妻のせて梅林めぐる車椅子
スクスクと林のよう伸びる孫
竹林に山奪われた雑木林
遠い日に松露ひろった松林
林から春一番で花粉飛ぶ
美津恵 萩江 貞子 重忠 完司 泰輔 悠子 祐子 智恵子 石花菜 康子 恭子 喜美子 英子 由紀子 けいこ 次男 風露 瑞子 日出子 賀寿恵 美ツ千 螢

母の待つ林の中の春彼岸
衣食住足るを一瞬呑む津波
照彦 醉芙蓉

サークル檸檬(大阪) 松尾美智代報

花言葉乙女はみんな信じてた
草の芽が踏んづけられて意地をはる
きれいだと色を愛でてる花音痴
鈍感になり順調に老いてゆく
考え方微妙に違い馬が合う
ひっそりと咲いて佐助たじろがぬ
わが心おさめきれすに傘寿なり
コンビの前に青春たむろする
白木蓮いれて姉妹のハイチーズ
穏当な言い訳あとで思いつく
思い切り過去を捨てたい花の舞
原発の避難も知らず咲く桜
溜め息をついて自分に負けている
楓 楽

京都塔の会 都倉 求芽報

のんびりと5分遅れで春のバス
貰い泣き花粉のせいに大津波
まっすぐな宣誓買事ユニホーム
テレビ欄隠れるように挟まれる
東北の空にも春の風が吹く
円高を世界が憂うモラルあり
折るしか出来ない位置で手を合わす
列島を二つに分けた大津波
表向き私は知らぬ事にする
正確な時計に慌てさせられる
昭 庸佑 求芽 美義 輝美 義昭 満子 宏子 ますお 鹿太

何やこれがらくたばかり持ち出して
孫の重み喜んで見るおばあちゃん
平凡な日にも趣味という飾り
飾りすぎ心に届かない言葉
飾らない人生本音のお付き合ひ
飾っても飾っても人間不信感
作業帽ダイヤのピアス覗かせる
ふところに喜怒哀楽の虫を飼う
新緑に囲まれ虫も大はしやぎ
何となく虫が好かないだけのこと
ゴキブリもゲジゲジもいる古い家
虫大敵ですぬ亡母の鮫小紋
余す人生尺取虫のマイペース
勤勉な割りに過労死しない虫
勉強の虫が現在ではホームレス
門限へ防虫剤を吊しとく
それ以上それ以下もなく本の虫
病気には勝てぬわたしの甲虫
葉子 綾子 由美子 かずお としこ 欣之 朝子 万紗子 益子 昌乃 英旺 則彦 俊宣 公知 啓子

豊中もくせい川柳会(大阪) 藤井 則彦報

喋り過ぎどんどん深みにのめり込む
ライバルの間に知らぬと言わぬ見栄
実に見事見事とサクラ褒めあげる
診察券とどんぞん増えて忙しい
山吹の照りささ眩し春のうつ
脈拍が指に感じるほどの愛
そつと触れようかこわれそうな愛ね
埋み火にされてどんどん燃え上がる
くすくすってビリケンさんを笑わせる
千恵子 幸雀 行兵衛 佳恵 幹治 (永)玲子 庸佑 萬の 啓子

栗の果の食べられたくはないガード
筆跡のふるえて愛し頼りあり
雑踏に首を泳がせ待ちぼうけ
アホなこと言うてどんな若返る
ばあちゃんと触れた頬つべに血が通う
静かな眼三角形は見えない
触れたのはやさしさボツとあかりつく
知らないがそれも読んだと言つておく
やさしさに触れて決心崩れそう
傷つける言葉がもぐく口の中
魂にいつも桜は入れている
悲しみに触れず寄り添うボランティア
石段の杖が優しい声に遇う
恋の傷触れると地雷目を覚ます
自信ある指は飾りを欲しがらぬ
次世代に借りをどんな作る国
被災地の少女を想う新学期
地団駄がどんな響く水田町

川柳あまがさき兵庫 田原

堅坊 夢 隆 則彦 千枝子 千代 葉子 寿美子 美智代 見清 満子 歌留多 美津子 志津子 求芽

一兆報

ヨシエ 義久 洋子 江美 野薫 正和 柳明 雪菜

強がりの女も飲めば泣き上戸
深々と礼それだけで許される
思い出の悲しき埋めて夢を掘る
じいちゃんにあやまられると泣けてくる
被災地に御免と言つて酒を酌み
一碗の味噌汁飲める有難さ
御免なさいたつた一言失語症
故郷は土の匂いももぎとられ
もどかしいサプライズなど要りません
定年が有るといひのおさんどん
フェロモンに惹かれ踏み込む迷い道
陰悪なムードに犬もソツと去り
敬老バス天下御免と伊達男
遅刻して御免御免と前の席
あの人が来るとムードがわやになる
いい気分二人でお湯を溢れさせ
縄電車園児を乗せて校道
売切れば御免と書いて人気呼ぶ
面倒は御免とばかり先に逝き
なんとなく自粛ムードで咲くくら
日本が頑張れムード一色に
詫びメールペコペコ絵文字入れて打つ
ご免やで妻がやめとけ言うんでな
一億が重い荷背負う大震災
子ら巣立ちお役御免のはずが孫
満点といかぬ嫁だがよろしくね

川柳やがわ(大阪)

籠島 恵子報

五月 幸香 龍 ひとみ 純 和子 美代子 イサミ 菜々子 泰子 かずお 登子 哲夫 朋月 紀乃 美義 キヨミ 奮水 芳子 求芽 朝子 里江 哲男 勝巳 美龍

この日本ガイドふらふらどこへ行く
最期まで付いてくる気の酒タバコ
明かり無し夜桜悲し通り抜け
人生のガイドに古典読み漁り
刈り終えた顔を夕陽が朱に染める
鉢巻を心にしめて立ち上がる
震災に生きる命へ陽の恵み
のどかさ心のボタンはずさせる
核ゴミを母なる海に吐き捨てる
私だつて春はピンクが似合う時
たつぷりの母乳でのごちそう午後三時
ユーモア賞あげる赤ちゃんの鉢巻
自分史をプラマイゼロで締め括る
好天に花見を兼ねて競馬場
里帰りひばりの声を聞くのどか
鉢巻を心にしめて決意
鉢巻を締めて恋文書いてます
思い出のガイドブックは宝物
絵具皿余生のほかかな彩を溶く
救援募金希望をわかち合いたくて
落選が続くポストを変えてみる
憂国日本鉢巻熱く訴える
鉢巻をへお守り入れて折る母
陽と風を縁に招いてこつくりこ
居酒屋の指定席ならガイドする
選にもれまた頑張れとはげまされ
桜前線いま東北を通過中

岸和田川柳会(大阪)

仲谷 弘子報

秀雄 仁清 義央 忠子 賢子 朝二子 栄子 寿子 惟圭 麗 西 祥昭 さち子 三郎 洋 郁夫 ルイ子 一風 鈍甲 修 亜成 博泉 じゅんこ とし子 美江 恵子

青春の真つた中にいる登寿

旭

青春はときめき今は不整脈
 ジーパンの穴が誇示する青春期
 青春の真っ直中にデモの声
 アスバラガスのような青い春だった
 夢持てばいつも青春真つ只中
 孫青春エールと小遣上げている
 青春を返せと叫ぶ妻の声
 青春の思いを遂げた箸二膳
 青春さつぷ買って行き先決まらない
 殴られた先生妙に懐かしく
 アルバムの青春カラーコピーする
 さつとまだ青春なんだろ迷つて
 命かけた青春でした鶴彬
 駅裏でつい横道に逸れる癖
 一直線逸れずたゆまず亀の自負
 逸れた道もどしてくれた師のピンタ
 わき道にそれた話で長くなる
 笑顔には貧乏神も目を逸らす
 どの道に逸れても最後同じ道
 夫婦でも会話が逸れて折れたまま
 仮面教師逸れた兄の背睨んでた
 出世コース逸れて失意の都落ち
 豪快なスイング柵越え大ファール
 絶望の闇から逸れて光見る
 逸れた子が今一番の親孝行
 ちくちくと教える顔でいじめてる
 ちくちくといじる万年課長補佐
 美しい薔薇はちくちく人を刺す
 ちくちくと姑いじめる今の嫁

まさみ 久美子 弘風 龍子 淳風 シマリ 靖博 力子 弘光 幸子 昭吉 淳司 直樹 隆彦 和美 和江 香代 房枝 弘子 いさお 柳弘 一行 東吉 旭 清 俊昭 笑司

古時計チクチクチクに感無量
 義援金いくらしたくと聞いて来る
 被災地の無惨ちくちく胸痛む
 ちくちくと身辺整理老いの坂
 鄙の宿ちくちく民話溜りだす

米子住吉川柳会(鳥取) 渡辺多美子報

おしよせる津波のすこいかにせん
 サムライのころの底で散るさくら
 眼鏡かけ涙流れる花粉とぶ
 フルムン夢のボスターぼろぼろに
 花吹雪独りの肩を包みこむ
 ぐるぐると回り内緒が本人に
 政争に地震津波が割って入る
 瘦せるのは努力目標として置く
 晴れくもり雨から雪と不思議な日

川柳同友会(鳥取) 吉田 陽子報

憧れてかつては吾も飛行兵
 呑ん兵衛のぼくが飛ぶのは午後十時
 あと少し夕陽背負って煙を打つ
 春ですれぬ敵も明るくほころびる
 叶う度小さな欲が顔を出す
 人付き合ひメガネをかえてやり直す
 根を下ろし咲かせ始めた花ふたつ
 初恋のきれいな別れ後を引く
 春だから何かを始めたい気分
 悪役はあえて私が引き受ける
 未来より明日の天気が気にかかる

彦弘 義泰 隆昭 珠城 蛙 登美枝 ふみ 欣子 公一 未延子 宏之 正二 紀の治 礼子 純宏 寒之 陽子 一聴 千恵子 ひとみ 章子 美恵子 山ふみ子 温子 久司

梅一輪遠くの春を気づかせる
 こだわらぬころで今日をしめくくる
 子も孫も育て上げたと力こぶ
 活力が失せるライバルとの別れ
 ゆつくりと上がれば坂も歩けます
 夢も見ず一気に眠る幸せよ
 流暢な告白嘘と知っている

転職へ埃がついた服のまま
 人気ある店には安いものがある
 あのちよつと雪押し上げて路の臺
 間違えるから人間は味がある
 頭上げ春先取りの福寿草
 ハンデさえ人気に変える人すごい
 ホイホイと引き受け首を締めている
 耕した女の爪が尖りだす
 嫁に出す片道券を背負わせて

川柳さんだ(兵庫) 堀 正和報

すれ違ふ友の夫を盗み見る
 許せない箱ごと盗む義援金
 半券で映画の名残温める
 あちこちに百円メガネ置いておく
 ゆつたりとしても減る命の灯
 おさげ髪うしろ姿に揺れる胸
 底力若者有事目を覚ます
 被災地であるさとの歌天を突く
 煩惱を深い祈りで浄化させ
 恐い顔慣れれば今はただの顔
 廃校のブランコ揺らす春の風

みどり 嘉子 敦子 三郎 良子 くにこ みち子 引ふみ子 安子 勇 菜美 華蓮 一眸 遊子 公弘 章子 好文 順子 一泉 美和子 雄一 淑子 雅司 茂山 裕美 朋月

菩薩顔これから修行するつもり
汗かけば応えてくれる土がある
土に生き土に戻った亡夫でした
春うらら晩学の一句いい笑顔
信心が足りないらしい不合格
怖いのは寝言で本音しゃべる猫
神仏にご縁が出来た母子手帳
揺りかごを想い出してね反抗期
死なないで下さいお金貸します
ひとりきり気球に乗って退屈た
賽銭に見合う小吉ありがとう

いずも川柳会鳥根 佐藤 治代報

胸の奥言えぬ舌切り雀です
いつまでも下座で役に立っている
囁かれた胸を誰にも知らせない
フエルテシモ胸の扉を開けたがる
主役の座保つていたい寒牡丹
親からの名前誇りとして生きる
胸に疵冷却水をかけている
胸算用櫓のつばみボトリ落ち
縁台で座礁している酔っぱらい
私の座だんだん狭くなっている
わたくしを励ます紅を引いてみる
表れにあなたの名前生きている
友達が胸の鱗を取ってくれ
失意ごと包んでくれるバスタオル
転んでも励ます青い空がある
もの忘れ自分励ましながら生き

キヨミ 彰
喜代子 一子
歳子 ちあき
哲男 菜々子
忠 ひとみ
正和

旅記念宿のタオルが慕い来る
命名に親父の自覚確かめる
あちこちで笑い転けて座を乱す
喝采の余韻に酔っている座席
下心ちらちらタオルしほり切る
なつかしい顔だが名前出てこない
爺の席がだんだん隅になってきた
生涯を支えてくれている名前
座つたら根つこが生えて来たようだ
一度だけ座つてみた議長席
液状化した胸にひらひら舞うさくら
励ましてくれた女房もう居ない
ひょういしと座つた貧乏神が出ていかぬ
むずかしい名前ですぐに覚えられ
口拭うタオルに残す嘘の数
原発の町も魚の名もおぼえ
今だから話せる胸のわだかまり
自分の名忘れるほどに生かされる
良いことをすると輝き増す名前

大山滝句座鳥根 新家 完司報

佐余 敬子 幸
歌子 志げる
満江 煩悩児
佳子 多喜
房緒 寿美
茂美 玲子
まこと ちえ
章峰 きみえ
文子 ちかし

友が逝く享年一歳鯖よんで
物欲がそぎ落されたような日々
親孝行した氣にさせる墓参り
ヒロシマ、ナガサキそしてフクシマ
心技体忘れた土俵泥まみれ
ときどきは狸寝入りもして同居
整理して仕舞った場所を捜している
百均の造花で部屋が若返り
老人を嬉しくさせる鯉のぼり
非常時の最中と野党睨み合い
ふと気付く熊か猿かの血が流れ
どんぶらこあなたのハート流れ着く
のん気です根気はないが元気で
打ち止めにするかと閻魔さまが言う
ウエストのライン見せたい春霞
弱点に触れぬ友達ありがとう
優柔不断にケリつけさせた通り雨
自慢するほどの腕なし隅にいる
日常の流れに燃えるもの探す
自分史の流れ詩により歌に詠み
痛み止め効かせて眠る夜もある
法螺吹きもしばらく法螺を自粛せよ

六甲川柳会兵庫 伊勢田 毅報

照彦 鈴野 すみえ
鬼一 忠良
美恵子 久子
水歌 宏章
孝子 熊四郎
七七 けいこ
紀の治 善江
久絵 やえ
大鯨 幸子
重忠 仁美
完司

少し秘密あつてわくわく生きている
ケータイが或日秘めごと喋り出す
おいしさの秘密は愛のかくし味
ぼつりぼつり秘密を明かす八合目
帯キリリ秘めごと守り抜く覚悟

石花菜 美ツ千
泰輔

合掌をしている下北半島
ゴミ捨てる場所に困っている地球
大津波字んだことが多すぎる

喜子 治代
あきら

吐き出せば秘密は空に消えていく
真夜中の窓が知つてゐるあの秘密
社外秘を律義に守る外野席

前略で妻に伝える秘密事

青春の秘密へそつとベールかけ

共有の秘密で絆強くなり

路地裏の茶店友との秘密基地

ここだけの秘密は一人闊歩する

揉めぬよう残さないのも思いやり

子に残す物はなんにもありません

突然の来客残す名文句

残されたお宝孫はゴミと言う

好きな物残してくれる思いやり

鍵を閉めやはり気になるガス電気

メールよりやはり手紙が欲しい母

子の未来やはり気になる親心

出来不出来やはり努力がもろに出る

手作りはやはり個性で拘りを

読み終えて余韻に浸るティータム

みちのくに春待つ風はすぐそこに

磨くのをやめると鈍くなる心

町並みを元気づけてるさくら色

考えても無理と白紙で出すテスト

にぎり飯伝わる温みありがたう

酔ったのはお酒じゃないのあなた

大津波ビルの上にも船残す

千の風もや津波のレクイエム

働き蜂の卵が並ぶ入社式

荷を降ろすたびに丸あるくなる背中

忠貞

夏子

政一

洋一

千賀子

浩司

武臣

弘子

登美子

和恵

繁義

芳江

盛夫

利子

弘子

基輔

勤

寿朗

美恵子

和郎

孝子

茂

弘

順子

保雄

弘

毅

無限

日本いま積木くずしのくり返し

翠洋会大版

佐々木満作報

能子

理恵

浩二

公平

昭

舞夢

みつ子

志華子

恭昌

桃花

日の出

楓楽

千歩

真澄

捷也

蕉子

滋彦

弘子

集一

富子

げんえい

善之

満作

すみ子

千梢

照子

年金でそこそこ暮らせて有難い

そこそこの実入りと趣味と日日常し

あつという間にそこその歳になり

知之

紀子

義

岩美川柳会鳥取

石谷美恵子報

けなげにも震災の地にさくら咲く

豪雪の痛み桜は耐えて咲く

桜咲き気分も浮いて旅に出る

桜より派手に咲きたいなど傲り

逢えるなら片道キップあればいい

別嬪に半券もがれこんにちは

センサーに押し戻されているキップ

宇宙行きキップ手にするまで生きる

冥土への往復キップ買っておく

思い出は木の葉のキップ縄電車

丁寧に沈めた過去が浮き上がる

菌の浮いたような誘いに罫がある

八ッ場ダム沈めてみたり浮かせたり

欲一つ握って浮いている私

浮き沈み乗り越え今も生きている

春の夢奇妙に両の手を合わす

あなたから奇妙な風が吹いてくる

お隣は奇妙な家族競い咲く

夫婦の奇妙同じ時間に腹が減る

奇妙だね寝たきりの母歌うたう

丸い地球誰も落ちない奇妙です

霊界の往復キップ是非ほしい

キャンセルの切符は福の神だった

知子

紀子

義

節子

たぬ

一京

茶子

圭郎

蟹郎

公子

菖子

幸安

幸子

忠良

重忠

清帆

一粹

和子

螢

はお

孝男

一瑤

稔

雅女

昭弘

美恵子

句 会 名	日 時 と 題	会 場 と 投 句 先
岸和田 川柳会	18日(土) 午後1時半締切 制服・蓄える・ちょいちょい ノイローゼ	岸和田市立福祉総合センター 〒596-0076 岸和田市野田町2丁目13-19 中国香代
川柳 ねやがわ	19日(日) 午後2時締切 陽気・イベント・梅雨・自由吟	寝屋川市立総合センター 4F 第1研修室 寝屋川市駅からバス 〒572-0063 寝屋川市春日町9-9 高田博泉
川柳 藤井寺	19日(日) 午後2時締切 家族・さすが・席題(共選)	藤井寺市立生涯学習センター・シュラホール3F 近鉄南大阪線藤井寺駅下車南徒歩10分 〒583-0023 藤井寺市さくら町2-201 高田美代子
岬川柳会	19日(日) 午後2時締切 知る・辞任・世辞	淡輪17区集会所 南海みさき公園駅・徒歩6分 〒599-0301 大阪府泉南郡岬町淡輪3592 八十田洞庵
豊中 もくせい 川柳会	20日(月) 午後1時40分締切 伝える・喧嘩・マーク・自由吟	豊中市中央公民館 阪急曽根駅南東・徒歩5分 〒561-0801 豊中市曽根西町2-8-4 江見見清
川柳 さんだ	21日(火) 午後1時から 一人・占う・滴・見事・自由吟	三田市中央公民館 〒669-1546 三田市弥生が丘5-2-4 堀 正和
川柳クラブ わたの花	24日(金) 午前9時半から 蛇・雨・握る・自由吟	八尾市生涯学習センター 〒581-0012 八尾市小阪合町1-4-8 西川義明
川柳塔 すみよし	25日(土) 午後2時半締切 世・暴く・どンドン	住吉区民センター 南海高野線沢之町下車3分 〒558-0041 大阪市住吉区南住吉3-16-8-206 鶴田遠野
和歌山 三幸柳会	25日(土) 午後0時30分から 家・先走る・守る	和歌山商工会議所4階 第2会議室 〒640-8570 ニュース和歌山編集部 「読者のひろば和歌山三幸柳会」係
はびきの 市民 川柳会	26日(日) 午後2時締切 じめじめ・しみじみ マナー・早い	綾南の森 公民館 近鉄高鷺駅北東・徒歩10分 〒583-0882 羽曳野市高鷺8-31-11 塩満 敏
川柳 ふうもん 吟社	26日(日) 午後1時半締切 失言・ダウン・道半ば	鳥取駅 2F シャミネホール 〒680-0872 鳥取市宮長205-45 萩原美雪
南大阪 川柳会	27日(月) 午後6時から 雨・クラシック・悪人・叩く	大阪市立住まい情報センター 5F 研修室 地下鉄谷町線・堺筋線天神橋6丁目駅③号出口 〒540-0004 大阪市中央区玉造1-16-13-304 前たもつ
京都 塔の会	27日(月) 午後2時締切 増える・あえて・穴	京都ハートピア 地下鉄丸太町駅⑤番出口すぐ 〒600-8428 京都市下京区諏訪町通松原下ル 弁財天町328-202 都倉求芽
松露 川柳会	27日(月) 午後8時締切 釣り・税・雑詠	溝口五区集会所 〒689-4201 鳥取県西伯郡伯耆町溝口757-3 小西雄々

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所(06-6779-3490)へご連絡ください。

6 月 各 地 句 会 案 内

(開催日順)

句 会 名	日 時 と 題	会 場 と 投 句 先
城北会 川柳会	4日(土) 午後1時開場 すいすい・溶ける・庇う 自由吟	旭区老人福祉センター 3F 地下鉄千林大宮③番出口 〒535-0002 大阪市旭区大宮4-10-18 神夏磯典子
富柳会	4日(土) 午後1時開場 攻め・損・自由吟	富田林市中央公民館 近鉄南大阪線富田林駅下車南へ200m 〒584-0043 富田林市南大伴町4-1-10 TEL.0721-25-0603 池 森子
倉吉会 川柳会	4日(土) 午後2時締切 そうか・理想・着る	倉吉市 明倫公民館 〒689-2221 鳥取県東伯郡北栄町由良宿2072-17 谷口次男
川柳塔 な	9日(木) 午後1時開場 替える・夢・些細	奈良市立中部公民館 4F 近鉄奈良駅④番出口 徒歩5分 〒634-0812 橿原市今井町2-1-24-901 安上理恵
川柳塔 さかい	10日(金) 午後1時から とける・例外 「すいか(折り句)」	堺市総合福祉会館 〒593-8305 堺市西区堀上緑町2-16-3 河内天笑
あかつき 川柳会	10日(金) 午後2時締切 組む・光・臆病	大阪保育運動センター (新谷町第1ビル2階) 地下鉄[谷町6丁目]駅③番出口から3分 道路向い側 〒599-0232 阪南市箱作1586-14-102 森村美花
川柳大阪	11日(土) 午後2時締切 ときどき・腕・心配	地下鉄長堀鶴見緑地線 京橋駅「研修室」 〒533-0004 大阪市東淀川区小松1-18-24-14 長井善純
川柳塔 まつえ	11日(土) 午後2時締切 指輪・純・覚める・アピール	松江市雑賀町 雑賀公民館 〒690-0056 松江市雑賀町1388 安達幸子
川柳塔 みちのく	11日(土) 午後5時締切 揺れる・暴く・ひらひら	弘前市桶屋町4-7 居酒屋とんぼ1階「川柳道場」 〒036-0161 平川市杉館宮元53-1 小寺花峯
川柳塔 打吹	11日(土) 午後2時締切 幅・負う・潤う	倉吉市上灘町9 上灘公民館 〒682-0034 倉吉市大原637-3 牧野芳光
八尾市民 川柳会	12日(日) 午後1時半締切 葉味・泉・降る・雑詠	八尾神社内 西郷会館 3F 近鉄八尾駅西口徒歩5分 〒581-0086 八尾市陽光園1-3-12-305 宮西弥生
川柳塔 わかやま 社	12日(日) 午後1時40分締切 私・揺れる・まあまあ・パン	近鉄カルチャーセンター 2F JR和歌山駅前 〒640-8482 和歌山市六十谷1188-14 川上大輪
西宮北口 川柳会	13日(月) 午後1時45分締切 つれない・雫・いらいら 自由吟	西宮市立中央公民館 阪急西宮北口駅南出口徒歩3分 プレラにのみや 〒662-0062 西宮市木津山町3-15 亀岡哲子
川柳 あまがさき	14日(火) 午後2時締切 真相・応じる・大変・自由吟	尼崎女性センター トレビエ 阪急武庫之荘駅南へ200m 〒661-0953 尼崎市東園田町2-45-8 山田耕治
ほたる 川柳 同好会	14日(火) 午後1時半締切 町・苦い・折り句(いのち)	豊中市立螢池公民館 阪急・モノレール 螢池駅駅前ビル5F 〒561-0813 豊中市小曾根2-4-1 水野黒鬼

柳界展望

★居谷真理子さん(常任理事・榎原市)は、平成22年度・紋太賞を受賞した。ほえんでいよう卵を抱いている 他9句。

★2011年あうすと川柳大会は4月3日(日)兵庫県民会館にて開催された。同人の成績は次の通り。

神戸市民文化振興財団賞 花びらが惑う形で手のひらに 西口いわゑ

★第15回全日本川柳誌上大会の本社同人の成績。

全日本川柳誌上大会賞

北野 哲男
合格の空は三百六十度

▽同人動向△

☆小島蘭幸主幹は5月3日(祝)傘傘わかくさ川柳会65周年記念全国川柳大会に出席。西出楓楽理事長は同大会に於て選者を務めた。

▽御芳志御礼△

○近藤佳子さん(同人・鳥取市)より金一封を拝受。

○高田美代子さん(参事・藤井寺市)より、夫君の供養としてご厚志を拝受。

○米田恭昌さん(参事・奈良市)より、「一〇〇〇号記念大会」と薫風師の「追憶」のDVD(円盤)を作

成・寄贈頂きました。

▼計 報▲

●西村梨里さん(会計監査・西村哲夫氏母堂・麻生路郎師五女)は、4月21日心筋梗塞のため往生。法

名・聖覚院釋芳秀。行年87歳。自坊の浄福寺で行われた通夜・告別式には、楓楽

理事長・岳人・たもつ相談役ほか川柳塔関係者が多数参列。

●岡本久峰さん(同人・茨木市)は、4月30日老衰のため逝去。行年91歳。家族

のみにて見送られた。(追悼文は7月号予定)

▽お詫びして訂正△
5月号P65下段19行目、河内・河田。P80下段1行

目、一歩出ずれば我れ旅人となる心↓吾れ。P125下段15行目、美龍↓美龍。

▽新誌友紹介△

山口市 中野 幸子

紹介者 小島 蘭幸

▽削 除△

○1月号、4頁上段11行目「万歩計つけて昼寝をして

います」は、類似先行発表句あり、削除します。

常任理事会は5月6日(金)出席者22名。①第17回川柳塔まつり関連②平成23年度同人総会式次第案③定例確

認事項④各部報告事項・2賞選考委員選出。檸檬抄選者交代について⑤その他

次回(6月7日) 午後13時30分

五月号、葉…この一句について

張り替えた障子の中に母

が居る(78頁)は、平成5

年全日本川柳協会発刊の「全日本川柳写真名鑑」

290頁に、葉先生の写真と共に掲載されています。

張り替えた障子の中に母

新同人紹介

すぎ 杉澤 汀

— まさよ・直樹・和夫・弘風推薦

御礼の事

浄福寺十四代坊守 聖覚院釋芳秀

俗名 西村リリ(路郎の五女)

平成二十三年四月二十一日往生 行年八十七歳

「無位無冠で良し」と云いながら、何事にも全力投球、

活発で完璧主義の母でした。そんな母も思うような伝道

活動が出来にくくなりますと、淋しかったのでしょね。

その頃(路郎三十三回忌)の川柳に

「般帳がおりずもたもた生きている」 梨里

とあります。そして今私がその母を思う事、

「演目は母般帳おりず生き続け」

「母という冠だけは取らず過ぎ」

「如来様母成りすまし我育て」

母もまた、多くの人にお世話になり、お育てを賜ったこと

であります。そしてこの日、静かに婆の縁尽きました。

「感謝感謝いのちのちの世話になり」合掌

ご縁の皆様へ

長男 西村 哲夫

います(79頁)は、平成8 載されています。

年5月、葉先生一回忌に川 出典の通りに掲載したこ

柳塔社から発刊された『定 とお断りします。

本・西尾葉句集』17頁に掲

第14回 鳥取県川柳文芸大会

日 時 7月10日(日) 午前10時開場
場 所 新日本海新聞社5階ホール
(JR鳥取駅南口から徒歩3分)
兼 題 「八百長」 川上 大輪 選
「晴れる」 永井 玲子 選
「酌」 北村 紅絵 選
「くらくら」 両川 無限 選
「酸っぱい」 田中 新一 選
「バランス」 斉尾くにこ 選
「困る」 岡崎 彰夫 選
「針」 前田 孝子 選
締 切 午前11時30分(各題2句)
会 費 2000円(軽食、大会誌呈)
欠席投句 締切 7月5日(当日消印有効)
用紙 自由
投句料 1000円
投句先 〒680-0074 鳥取県卯垣1-110
夏目 一粋
主 催 鳥取県川柳作家連盟

いずも川柳会85周年記念川柳大会

と き 7月9日(土) 午前10時開場
と ころ ホテル武志山荘
鳥根県出雲市今市町2041 ☎0853-21-1111
出句締切 正午(各題2句・席題なし・欠席投句拝辞)
兼 題 「大」 小島 蘭幸 選(広島)
「恵」 天根 夢草 選(大阪)
「門」 赤松ますみ 選(大阪)
「弁」 新家 完司 選(鳥取)
「福」 山本希久子 選(大阪)
「寿」 門脇かずお 選(鳥取)
「袋」 佐々木 裕 選(鳥根)
会 費 2,000円(昼食・大会誌・記念品呈)
懇親会 4,500円(7月9日(土) 午後3時半ホテル)
宿 泊 5,000円(朝食付)(ホテル武志山荘)
前日泊(8日)、当日泊(9日)に宿泊を希望の方は、宿泊日指定の上、5月末迄に、下記へ申し込んでください。宿泊費は当日会場にていただきます。
申込〆切 5月末日(懇親会出席・宿泊希望・前日・当日・住所・氏名・電話 明記)
申込先 鳥根県出雲市白枝町423 伊藤玲子宛
TEL.0853-23-3200 FAX.0853-23-3201
主 催 いずも川柳会

播磨川柳協会創立記念 川柳大会

日 時 7月10日(日) 10時30分開場
場 所 姫路文学館3F 大講堂
姫路市山野井町84 TEL079-293-8228
課 題 (各題2句 締切11時30分)
「姫」 情野 千里 選
「豊」 古川 奮水 選
「覗く」 蛭原 夏牛 選
「故郷」 赤井 花城 選
会 費 1000円(発表誌呈) 欠席投句拝辞
事前投句「残る」 前田美巳代 謝選
◎未発表句1句・重複投句不可・投句料不要
◎ハガキに1句・郵便番号、住所、氏名、電話番号、所属柳社名、大会出席有無を明記
◎賞は当日表彰、秀句3句に播磨川柳協会賞呈
投句締切 6月10日(金) 当日消印有効
投句先 〒670-0884 姫路市城北本町9-15
播磨川柳協会賞事務局宛て

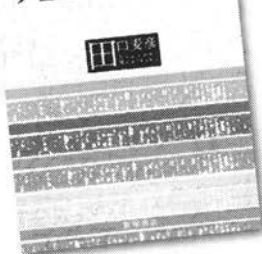
台東川柳人連盟創立六十周年記念 朝顔川柳大会

日 時 7月8日(金) 午前11時開場
会 場 台東区生涯学習センター2階
ミレニアムホール
会 費 1500円
記念講演「台東と川柳」
川柳公論主宰 尾藤 三柳 氏
宿 題 (各2句吐)
「星 座」 原 光生 選
「鈴 なり」 播本 充子 選
「清 楚」 米島 暁子 選
「周 到」 竹田 光柳 選
「二 の 舞」 尾藤 一泉 選
「佳 境」 佐藤 美文 選
「野 点」 田中八洲志 選
「神」 脇屋 川柳 選
特別課題(1句吐)
「幸 運」 大川幸太郎 選
席題なし・投句拝辞 締め切り・午後1時
主 催 台東川柳人連盟

『アート川柳への誘い』^{いざな}最新刊

田口麦彦 著

アート川柳への誘い



川柳とアートがクロスカップリング！

果たして何が誕生するか？

前作『フォト川柳への誘い』から2年を経て川柳作家田口麦彦はいかに進化したか。新作川柳と全篇書き下ろしのコラムを携えて、写真だけにとどまらず古今東西のあらゆる芸術とコラボレーション。新感覚川柳書、刊行！

ISBN978-4-7522-4010-5 四六判 112頁 カラー ソフトカバー
税込1575円

本書には新鋭の書道家、梨華さんの作品も多数掲載



(本文より)



【ご購入はお近くの書店か直接小社まで】

好評既刊



田口麦彦著
税込1680円

楽しみながら上手くなる
穴埋め **川柳練習帳**
例題の空欄に入れる言葉を考えるだけで自然と川柳が上達する本。

第1弾



田口麦彦著
税込1575円

十七音の詩―田口麦彦の
フォト川柳への誘い
川柳と写真のコラボレーション集の
第一弾。川柳がもつと楽しくなる本。

〒112-0002 東京都文京区小石川5-16-4 飯塚書店 TEL03-3815-3805 FAX03-3815-3810

第15回 川柳展望全国大会

日 時 7月17日(日) 10時30分開場
場 所 ホテル アウイーナ大阪
大阪市天王寺区石ヶ辻町19-12
TEL.06-6772-1441

参加費 2,000円

◇お 話 「動物に学ぶ病気になるず
楽しく暮らす秘訣」
永田 高司 氏(永田動物病院院長)

◇題と選者

席 題 「 風 」	高田 桂
宿 題 「 人 形 」	日野 愿
「 右 」	三村 舞
「 帰 る 」	草地 豊子
「 広 い 」	鈴木 公弘
自由吟	新家 完司
自由吟	青砥たかこ
自由吟	森中恵美子
自由吟	前田 咲二
自由吟	天根 夢草

各題2句 出句締切り 12時00分

※各選者秀吟2句 呈賞

◇質疑応答 進行/天根 夢草

※大会終了後パーティーを行います。(6000円)

主 催 川柳展望社

第12回 生駒市民川柳大会

日 時 7月17日(日) 12時30分開場
会 場 生駒市芸術会館「美楽来(みらく)」
(近鉄生駒駅から北西へ400メートル)

講 演 「古事記」 青山 茂 氏

事前投句 「活 力」 荻原三四郎 選

事前投句先 ハガキで一句(6月17日締切)
(生駒市芸術会館「美楽来」も可)

宿 題 締切13時30分(各題2句)

「手 当 て」 古今堂蕉子 選

「ちよっと」 谷垣 郁郎 選

「呼 ぶ」 中山恵美子 選

「屈 く」 長島 敏子 選

「首 」 松田 俊彦 選

会 費 1500円 発表誌呈

お問い合わせ

生駒市生涯学習課

TEL 0743-79-1689 (内線649)

宮田 宜子 TEL & FAX 0743-79-1689

主 催 生駒市・生駒市教育委員会

生駒番傘川柳会

第35回 鳥取県川柳大会

と き 10月15日(土) 午前10時開場
ところ 米子コンベンションセンター 小ホール
米子市末広町74 TEL 0859-35-8111
JR山陰線「米子駅」下車・徒歩3分

課題と選者(各題2句・席題なし・出句メ切12時)

「 水 」 吉 田 孔美子 選

「 乗 る 」 牧 野 芳 光 選

「 棒 」 石 橋 芳 山 選

「 ハート 」 竹 治 ちかし 選

「 休 む 」 西 出 楓 楽 選

「 声 」 天 根 夢 草 選

「 生きる 」 森 中 恵美子 選

◎表 彰 鳥取県知事賞ほか

◎会 費 2000円(作品集・昼食)

欠席投句 1000円(用紙自由・作品集呈・小為替)

メ切り 平成23年9月20日

※投句先 〒689-4201 鳥取県西伯郡伯耆町

溝口757-3 小西 雄々 方

第35回鳥取県川柳大会実行委員会 宛

TEL 0859-62-1520

主 催 鳥取県川柳作家協会

第58回 八尾市民川柳大会

と き 8月28日(日) 正 午

ところ 八尾文化会館 5F
レセプションホール
(近鉄八尾駅、西武デパート東隣)

会 費 2000円(作品集・鉢植花・軽食)

宿 題 「 家 」 北川 拓治 選

「 魚 」 大内 朝子 選

「 志 」 阪本 高士 選

「 名 」 池 森子 選

「 雅 」 長島 敏子 選

「 波 」 田中 新一 選

「 手 」 宮西 弥生 選

締 切 午後1時(各題2句)

懇親会 当日受付 4000円

主 催 八尾市民川柳会

編集後記

★浴槽へずり立つたは皆我が子 荻乃

★四月二十一日、西村梨里さん本名(リリ)が亡くなられた。大正十四年四月四日生まれ。麻生路郎、荻乃夫妻の五女。浴槽へずり

並んだうちのお一人。路郎を助け川柳雑誌の編集にも携わった。「思はざりき娘が二十四にもなり」と、路郎が詠んでいる。同人、西村哲夫さんの母君である。

★「麻生路郎読本」編纂の折に生前の路郎・荻乃夫妻のお話なども聞きたかったが、病床にあられたことで適わなかったのが残念でならない。この世のくびきから解放され、彼の世で親子水入らずの再会を果たされたことであろう。行年八十七歳。ご冥福をお祈りします。

★「麻生路郎読本」をお贈りした方々からは、さまざまの反響があったことは以前にもお伝えした。これまでに多数の精鋭、論客が批評・評論、随想で誌面を飾って下さっている。

★「麻生路郎読本」この労作は、終生、ばくの話し相手になってくれそうです」と、熱い返信を寄せてくださったのは淡路放生さん。時実新子の「川柳展覧」(創刊号昭和五十年五月)にもその名が見える。余談だがこの創刊号には、蕨風先生や同人、鴨谷瑠美子さんの父君、大島無冠士氏も作品を発表されている。

★もし蕨風先生ご存命ならばこうおっしゃったであろう。「放生さん、よう書いてくれないはった。路郎に対する暖かい目がうれしいあと。小説も書かれるという放生さんのペンは、路郎の真実をえぐり荻乃夫人の内面を照らして余すところがない。「ふたりの風色」とい

うタイトルから、読者はどんな風を感じたろうか。★昨年の日川協・鳥取大会で客死された穴吹尚士さんの忌が巡ってくる。亡くなられる前日の十二日、砂丘会館で美穂さんと三人ソフ

トクリームを紙めたが、あの日の笑顔を思う。(朱)

□「時間がないので長文になりました」とは哲學者パスカルの書簡の一文で、推敲する時間がなくて、だからと書いてしまったと

言うような意味らしい。散文ではなく、十七音字の川柳と向き合う私達にとって

も非常に示唆に富んだ含蓄のある言葉と思う。

□ヨガの「断業」「捨行」「離行」という考え方を応用、暮らしの中の不要なものを絶ち、捨てる事でモノへの執着から解放、身軽で快適な生活をと「断捨離」なる言葉が注目を浴びる。

折しも大震災後の生産力や電力低下が叫ばれる昨今、

皆で身の回りの無駄を見直すチャンスではと思う。

□美しいものは時に人を疲れさせる。心が弱っている時はソプラノよりハスキーが沁みる。星野富弘の詩の一節にこんなのがあった

「……ここに小さな花があります「へくそかずら」と

います 呼べば心がなごみます「へくそかずらへくそかずら」……つばやきながら夕べはぐつすり眠りました」

三日路から三日路からへ (水府君宛)

タイトルは「麻生路郎読本」P85にある。三日路とは大阪市西成区にあった旧地名、そこに、路郎夫婦宅から三軒目に水府夫妻宅があったのだ。

水府への手紙には、久良岐先生へ書いた「原稿用紙が11枚あるのやで、達者なものだろう」と大いに自慢し、「9月号、番傘の表紙は莫迦にいい」と褒めたかと思うと、

「番傘は近來駄句が多すぎる」とケチをつけ、「社友が随分出来て結構だ。この調子だと番傘が世界的川柳雑誌になるのも遠くはあるまい」と持ち上げ、最後に「歯が痛むのにあまり長い手紙をかくと後難が恐ろしいから」と逃げている。

三軒目に住む水府に直接話せばいいものを、ライバルの水府に、路郎が少し妬みながらも、番傘の動向を気にしているのがよくわかる面白い手紙だと私は思った。

(江島谷勝弘)

ひとこと

「番傘は近來駄句が多すぎる」とケチをつけ、「社友が随分出来て結構だ。この調子だと番傘が世界的川柳雑誌になるのも遠くはあるまい」と持ち上げ、最後に「歯が痛むのにあまり長い手紙をかくと後難が恐ろしいから」と逃げている。

三軒目に住む水府に直接話せばいいものを、ライバルの水府に、路郎が少し妬みながらも、番傘の動向を気にしているのがよくわかる面白い手紙だと私は思った。

(江島谷勝弘)

皆で身の回りの無駄を見直すチャンスではと思う。

□美しいものは時に人を疲れさせる。心が弱っている時はソプラノよりハスキーが沁みる。星野富弘の詩の一節にこんなのがあった

「……ここに小さな花があります「へくそかずら」と

います 呼べば心がなごみます「へくそかずらへくそかずら」……つばやきながら夕べはぐつすり眠りました」

川柳塔(同人)・水煙抄(誌友)投句用紙

種目「

」発表(8月号)

地名

都府
道市
県
姓
雅
号

きりとりせん

◎ 8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようにお送りください。

同人・誌友 マルで囲んでください。

投句先 〒543-0052 大阪市天王寺区大道1丁目14番17号 花野ビル201



檸檬抄投句用紙

「刹那」(せつな) (6月15日締切)

8月号発表

山本希久子 選 — 共選 — 三宅 保州 選

B A

--	--

地名

市都
県道府

姓雅号

B A

--	--

地名

市都
県道府

姓雅号

切らないで下さい

左右に同じ句を書いて下さい



作品募集

8月号発表(6月15日締切)

川柳塔(8句) 小島蘭幸選
水煙抄(8句) 西出楓楽選
愛染帖(3句) 新家完司選
檸檬抄「刹那」(2句) 三宅保州共選
山本希久子
一路集(3句) 岸本宏章選
「季」 岩本笑子選
「氣まぐれ」 林本さだき選
「そろそろ」 鈴木公弘担当
「ボーズ」(3句) 鈴木公弘担当

9月号

檸檬抄「変化」
一路集「兼ねる」「誤算」
「さらり」
初歩教室「効く」

本社6月句会

とき 6月7日(火) 午後5時開場・6時20分締切り
—開場時間、締切時間を変更しています。—
ところ アウィーナ大阪 4階 金剛の間
天王寺区石ヶ辻町19-12 電06-6772-1441
おはなし「商品開発と川柳」
兼題「定食」
「やまと」
「筆まめ」
「黒」
「誤解」
江見清選
井丸昌紀選
米澤佩子選
久保田千代選
岩佐ダン吉選
山岡富美子選
小島蘭幸選
会費 1000円
投句料 500円(切手可)
(各題2句以内)

本社7月句会

7日(木) 午後5時から
兼題「半額」「ビタミン」「拗ねる」
「裏」「炎天」

第30年度 夜市川柳募集

第1回「曲げる」 高瀬霜石選
ハガキに3句 6月末日締切
投句先 〒593-8305 堺市西区堀上緑町2-16-3
河内天笑方 川柳塔さかい

「川柳塔」への投句について

- (1) 川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄へは誌友(誌代半年分以上前納の定期購読者)に限り、本誌綴込みの投句用紙を使用してください。
 - (2) 愛染帖・檸檬抄・一路集への投句は、同人・誌友に限ります。初歩教室は誌友のみとします。愛染帖・一路集・初歩教室は川柳塔柳箋(本社事務所取り扱い扱い)、檸檬抄は本誌綴込みの投句用紙を使用してください。
 - (3) 各欄への投句は、必ず氏名と住所(県・市名)を明記してください。
 - (4) 各欄への投句数および投句締切期日の厳守をお願いします。ファックスでの投句は御遠慮下さい。
- 川柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜、祝日を除く平日の10時から16時までにお問い合わせいたします。

定価 八百円(送料84円)

半年分 五千円(送料共)

一年分 九千八百円(同)

二〇一一年(平成二十三年)六月一日発行

発行人 小島和幸

編集人 木本朱夏

印刷所 美研アト

〒543-0052 大阪市天王寺区大道一丁目一七

花野ビル201号室

発行所 川柳塔社

電話(〇六)六七七九一三四九〇番

振替 〇〇九八〇四二九八四七九番



杵つき製法の「すりごま」
オニザキの

つ
ま
ご
ま

長い間親しまれてきた
オニザキの「すりごま」は、
名称を変更し、パッケージ
を一新いたしました。
オニザキのすりごまは、
元々すり鉢ですったゴマ
ではなく、杵と臼を使った
杵つき製法で出来た「すり
ごま」です。
今までと変わらぬ、風味
豊かな味わいをご堪能く
ださい。



株式会社 オニザキコーポレーションセルズ
〒862-0951 熊本市上水前寺1-6-41 OCOビルディング

TEL 0120-30-5050

医療法人社団

湯川胃腸病院

・日本医療機能評価機構・ISO9001-2000認証取得

健康保険取扱 看護2A・緩和ケア病棟

- ・消化器科・内科・外科
- ・放射線科・ホスピス
- ・デイサービスセンター

診療時間

月～金 8:30～16:00

土 8:30～11:00

JR桃谷駅徒歩3分

<http://www.yukawa.or.jp>

電話 大阪(06) 6771-4861(代)